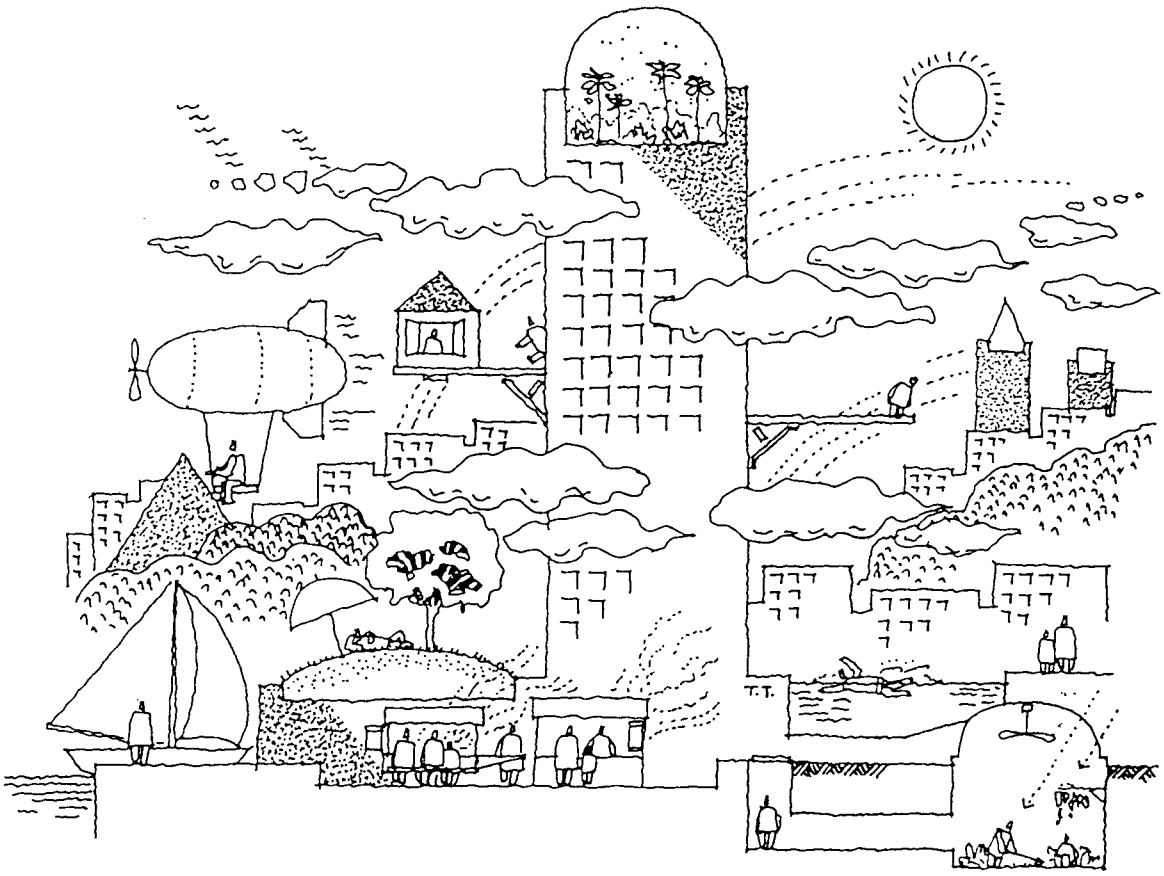
横浜まちづくり研究会
発足１０周年記念

まちづくり



1990年3月

まち研

YOKOHAMA

目　　次

◇なぜか『まち研』・だけど『まち研』・ちょっと『まち研』
まちづくり研究会世話人　仲原　正治
◇まちづくり研究会の十周年を迎えて
まちづくり研究会顧問　　田村　明
◇まちづくり研究会（年表）
◇まちづくり研究会活動報告
・大分「一村一品運動」
・ｉｍｉｄａｓ執筆協力
・韓国（ソウル市）ツアー
・台湾（台北市）ツアー
・香港ツアー
◇まちづくり研究会会報抜粋
◇会員からのメッセージ
・アメリカから愛をこめて　ＵＣＬＡ留学中　南　学
・まち研１０年　建築局宅地第一課　飯島　悦郎
・お役所組織とまちづくり　㈱みなとみらい21　田口　俊夫
・まちづくり研究会事務局として　都市計画局都市計画課　漆原　順一
・まち研と総合的なまちづくり　都市計画局企画課　石田　正
・まちづくり研究会120%活用法　港湾局山下ふ頭事務所　遠藤　博
・すべて『まち研』のおかげです　緑政局緑化推進課　内藤　恒平
・『まち研』１０周年によせて　市民局勤労福祉課　内藤　恵子
・都市の課題の変化とまち研の役割　都市計画局企画課　五島　哲男
・『まち研』なんてもういらない　都市計画局都市デザイン室　大蔭　直子
・『まち研』と私　西区総務課　大島　昭宏
・祝・・・『まち研』１０周年　都市計画局企画課　土井　一成
・新人感想　鶴見区戸籍課　鈴木　政憲
・東欧小報告　総務局行政管理課　山梨竜一郎
・まち研とのかかわり　都市計画局金沢八景東口開発事務所　松下　由佳
・豊田市からまち研に参加して　豊田市福祉課　伴　幸俊
◇まちづくり研究会名簿
◇掲載紙抜粋
・月刊誌「地方自治職員研修」　・建築ジャーナル特集「道」新時代

なぜか『まち研』・だけど『まち研』・ちょっと『まち研』

まちづくり研究会　世話人代表　仲原　正治

１０年前の手紙にこう書いている。

『このごろちょっと自分のおかしい状態がわかります。朝、職場に行くことがイヤになって、ズル休みをとって大井の競馬場に行ってしまったり、夜になると家に帰りたくなくて連日のように酒浸りで、どこかでクダをまいている。原因はあるようで、ないようで、所詮は自分の心の問題だとは思うのですが、自分が情け無い状態にあることは確かです。

自分を取り巻く環境は、自分がいつもどこか覚めているという自覚を持ちながらも、道化なりの仕種をして自分を何かに包み込もうとしているのです。何か公務員としてのみんなが持つ共同幻想に自分を押し込む作業を自分をしているような哀しさがあります。現代の組織は、みんながそうだと思うことを覆すことは非常に難しいもので、ひとつの枠の中に入っていないと孤立してしまうのではないかという苦しみを身体で感じてしまい、どうしてもそれに身体を合わせようと動いてしまうようです。

そういう中で暮らしていると、その中で溺れている間は、何も考えずに楽しく思えてきてしまうのでしょうが、覚めている自分がいて、何故ここに自分がいるのかということを一度考えてしまうと、もう精神的には何かを閉じてしまわなければ生きていけないのではないかと思います。だからといって、そこから逃げ出すだけの勇気もなく、鬱々とした毎日を酒でごまかしている。そんな自分が今、見えています。・・・・』

何故『まち研』を始めたのかと聞かれたら、たぶん、そんな精神状態の時に職員研修所にいて、田村明氏に出会い、反発を感じながらも何か魅かれるところがあって、偶然に何かが始まったとでも答えるのではないかと思う。だからといって、その時の精神状態が今は払拭したわけではなく、相変わらず同じような軋轢の中で生きている。しかし、昔と違っている自分が今、確かにある。それは、自分で自分が見えない状況を何もしないで見過ごしていたが、見えない状況でも何かを見えるように自分で動き始めたということである。そして、自分のための自分だけでなく、自分のための他人、他人のための自分をいくらかでも意識しはじめたということではないかと思う。様々な人がお互いに影響しあって生きていることが、自分の意識の中に根づき、それを大切にしていることだと思う。

『まち研』とは、非定型流動の組織とは言えないような浮遊体である。誰に

強制されたわけでもない世話人がテーマを考え講師に交渉し、会報で会員に知らせる。出て来たい人は出てきて、話しを聞いて、話したいことを話す。都合の悪い人や来たくない人は連絡も不必要。やめたれば会報を送るなと一言電話をかければ良い。会費があるわけでもなく、会則があるわけでもない。ただ、ぶらっと来て、ぶらっと帰れば良い。その日に、ちょっと興味がわくことがあれば、会の後の飲み会兼懇談会に出て、興味ある人と興味のある話しをすれば良い。何となく問題意識のある、どこか輝いている人がいつも『まち研』には来ている。

『まち研』は誰のものでもない。自分で『まち研』を名乗ろうと思えば簡単である。『まちづくり』に関すること（森羅万象なので何でも良い）を自分で企画して、会報に載せて、参加者を募れば、それで立派に『まち研』の事業として認められる。認める人がいるわけではないが、みんなそんなものだと考えているので、暗黙の合意がある。今までもずっとそうしてきた。イミダスの編集も、ﾖｺﾊﾏ･ﾌﾗｯｼｭもＹＥＳ’ＦＭも、みんなそうだったし、今後もそうであろう。原稿を書いて『まち研』の名前を付けて掲載するのも構わない。これを書いている私も世話人代表と名乗っているが、誰が決めたわけでもないし、誰にも否定はされない。要するに主体的に動く自分がいれば、それで『まち研』になり、勝手に名称を付けることができる。

『まち研』はすぐにでも消えてしまう脆弱な浮遊体でもある。世話人がくたびれてしまったり、都合で忙しくなったりすると、会報がでなくなって自然に消えていってしまう。世話人はよくくたびれる。しかし、今までそういう危機が来ると誰かが動いてしまうのである。すぐ再建委員会などというものをでっち上げて、ニューグランドホテルのマッカーサールームを予約して話でもしようかと電話が掛かってくる。消えそうになると、自己治癒能力が高まってしまい復活する。

『まち研』は横浜市職員のためにあるようだが、それだけではない。最初は市職員だけであったが、だんだんと民間の人も増えてきている。課題も当初は市の政策中心であったが、外に出るようになってきている。要するに『まちづくり』の内容は市役所の中で留まるような小さな世界では考えられなくなっているのである。『まち』に出ないとまちづくりにならないし、また『まち研』にもならないようになっている。

こんなフワフワしたつかみどころのない浮遊体なのに、なぜか『まち研』は幻想をつくり出す。なぜか確固とした組織と間違えられることが多い。この頃特に他の自治体や民間からの声が掛かってくる。たぶん、それは、ひとりひと

りの『まち研』のメンバーが輝いているからだと思う。各々が自分の仕事の場所で、良い仕事をしていて、対外的にも様々な自治体や企業の人達とネットワークを持っていること。そして『まちづくり』が好きで、特に『ヨコハマ』が大好きな人が揃っているからだと思う。結局、『まち研』は、入ってみて何となくわかってくる、不思議な浮遊体ではないかと思う。

これから『まち研』がどのように進んでいくかは誰にもわからない。それは各自の主体性が、『まち研』を支配しているからだ。あなたと私とまったく異なった位相にいても、『まちづくり』という接点があれば、それで『まち研』になる。何かを始めていれば、それは『まち研』となるのだから、ひとりひとりが違った『まち研』を持っていると考えた方が良い。そういう風に考えていただければ、非常に嬉しいし楽しい。だから明日、『まち研』という浮遊体がなくなっても、まったくおかしくない。

だから『まち研』、だけど『まち研』、そして『まち研』、どうでも『まち研』、まあボチボチ進んでいこうと思う。

最後に、田村明氏には、本当に感謝している。教えることは教わることという本当に簡単な真実、でもそれが中々できなくなっているこの頃、いつも『まち研』に出席し、それを実践していただいている。『まちづくり』のことになると、誰とでも同じように議論をして、年齢や性別、経験や信条と関係なく公平に扱ってくれる。いつも『まち研』の仲間と同じ扱いであることがあたりまえになっている。だから、心の中では『先生』であるのは確かだが、なるべく彼を『先生』とは呼ばず、『田村さん』と呼ばしてもらっている。『本当にありがとうございます。これからも、よろしくお願いします』

まちづくり研究会の十周年を迎えて

まちづくり研究会顧問（法政大学教授）　田村　明

月並みな言い方になるが、「まちづくり研究会」が今年で満十年を迎えると聞いて、随分月日の流れは早いなという感じがする。

だが、やっぱりこの十年は長かったと言うべきなのだろう。その間に、私自身の生活には大きな変化があった。「まちづくり研究会」が生まれた翌年、私は横浜市を辞めて大学に移りすでに九年の年月がたつ。おかげでこのところ自由に全国を周り、世界の各地も歩かしてもらった。日本全国のまちづくり運動うしている人々にも会った。全国の自治体の悩みや活動の実体にも触れた。そうしてみると私にとってのこの十年の月日は大きい。

「まちづくり研究会」は私が横浜市を辞める一年ちょっと前に始まった。四回続きの研修をやってくれと、当時研修所にいた仲原君に持ち込まれた。それなら、この機会に「まちづくり」を考える自主的な研究会をつくったら、ということで始まったのである。私としては横浜市を辞めようと思っていたが、最も長く十三年間も御世話になった横浜市の次の時代に、なにかを伝えたいという思いもあった。しかし、後で述べるように、それほど大それた思いをもって始めたのではなく、極く内輪にささやかに始められたものであった。いまでも小さな存在だが、それがともかく十年も続いたということは、この変動の激しい時代としては、ひとつの注目すべき事実ということができるだろう。

じつはその前にも、私はいくつかの自主的な研究グループをつくってみた。そのひとつは「横浜プランナーズ協会」というもので、横浜市にこだわらず、横浜という土地に住んだり働いたりしている人々、或いは横浜に集まり易い人々で都市のプランナーをめざす人々の集まりとして始められた。かなり入念な準備期間もあり、規約も整理して始めた。横浜市の職員と、神奈川県の職員、大学人が中心になって相談し、川崎や藤沢市など近在自治体の職員、それに住宅公団の職員、研究者、民間コンサルタントなど幅広いもので、なかには東京から来る人もいた。横浜という土地を閉鎖的な区域としては考えず、多くの人々に呼び掛けたり働き掛ける拠点として横浜をとらえた。同じような活動が各地に広がり、やがては全国のそうした小さな動きが互いに結びつくようにしたいとも考えていた。それにはいきなり全国組織から始めるのではなく、小さな拠点が日本国中の至る所に生まれて、やがて全国につながる地域中心型の組織の方がいいと思ったからである。

重要なことは、この会は主体性をもつ個人の集まりだということである。毎月研究会を開いていたが、それはあくまでも個人という立場であって、所属す

三村　明

信一三を迎えると

その間に、私自
生まれた翌年、私
てこのところ自
まちづくり運動
に触れた。そ

に始まった。四
を迎えられた。それ
ったら、とい
ていたが、最
を伝えたいとい
な思いをもって
いまでも
変動の激し
ないと。
ってみた。
ここにわらず、
に集まり易い人
になり入念な
県の職員、
職員、それに住
には東京
えず、多くの人
な活動が各
ようにした
、小さな
連合型の組織

ことである。毎
て、所属す

を組織の代表ではない。自由な立場で議論しあうことによって、新たなものが生まれてくる。

こうした個人の集まりを組織する前に、私は横浜市という組織の立場で、他の組織と連合する会議や研究会を数多く作り、さまざまな研究や提案、提案の実現まで行ってきた。最初は、指定都市の企画部門でつくっている「企画主管者連絡会議」が冬眠状態にあり、共同研究などと称して、どこかの大学にそっくり委託研究費を出してその報告を聞くというやり方をしていたのを止めさせ、指定都市の職員が協同作業によって「大都市白書」をつくった。ほぼ二十年前のことになる。それまでは自治体職員が自主的に考えることは指定都市レベルでもほとんどなかった。まして、違う自治体の職員同士で一つの研究をするということはない。自治体の立場はさまざまで幹事都市は半年交代だから、この企画は途中で何度もつぶれかかったが、横浜市がプロモーターになってとうとう実現させた。その後は、もうすこし作業を軽くできるように、その時々でテーマ別のレポートをつくる方式にしたのも横浜市の主導であった。

また、神奈川県や川崎市に働きかけてつくった「京浜工業地帯長期展望研究会」もある。小さな市町村の企画担当者で、互いに情報を交換したり、あるべき企画部門の姿について勉強しようという「都市企画会議」も組織した。また「七大都市首長懇談会」「首都圏の五首長懇談会」「神奈川県の三首長会議」などを横浜市の主唱で組織して、それらの会議の常任幹事役として、さまざまな提案や研究を行った。そのなかでも「七大都市首長懇談会」で行った自動車排気ガス規制に対する提言は、当時産業側の圧力に負けて弱まりかけていた政府の自動車排気ガス規制を、強く押し戻す大きな力になったものである。

このような自治体組織を結ぶ連合組織は、時によって社会的に大きなインパクトになることはあるが、組織を動かすのはあくまで人である。ところが、組織のなかの人々は人事異動で変わってしまうと、以前の関心からは離れる。職務として要領よくその場の問題を処理する人々は多いが、一時的に職務をこなしているだけでは、都市や自治体という極めて総合的な問題に、しっかりした考えをもち、実行力のある存在は育たない。そこで、組織を離れて主体的な個人として都市や自治体の問題を考えてゆく人々が、互いに学びあう場が必要だと思うようになった。

そうした問題意識から、前に述べた「横浜プランナーズ協会」や、他にも個人を中心とする研究会をつくってみた。「まちづくり研究会」は、その最後に私が横浜市を辞める少し前に横浜市で新人で職員になった人々の会として始まった。「横浜プランナーズ協会」のように、専門性をもちたいというものでも、外にも発信しようというものでもなく、職員だけの極く内輪の勉強会で、と

くに規約もないし、役員といったものもない。また構成員もすべて二十代の極く若いささやかな会であった。私としては、私が辞めるころ、すでに管理職にもなったり、あるていど出来上がっている人々だけではなく、これから伸びてゆくこうした人々にも心が残ったからである。

それから十年、市の立場でつくった公の組織は、私がその運営から離れて十年以上になると、その内容が変化してきたし、機能を失ったものもある。組織としての結合は、その時代の必要性により生まれるもので、機能を失ったり変わっていくのも仕方ない。しかし「横浜プランナーズ協会」などのように個人を中心とした集まりも、機能を停止したり消滅してしまった。忙しいとか、ほかにもいろいろの理由はあるだろうが、なかなか主体的な個人同士の会というのは育ちにくいものである。

ところが意外なことに、もっとも小さく限定された若い人々の集まりであった「まちづくり研究会」だけが、その後のさらに若い人々にも受け継がれて、今日まる十年を迎えるということは、考えてみると面白い現象である。組織は大きければいいというものではない。大きいものは形骸化しやすい。小さくても、そこに関心をもち愛情をもつ主体的な少数の人々がいれば集まりは続くものである。今日「まちづくり研究会」が存続しているのは、その間にかかわった多くの人々の目立たないが、地道な努力と愛情の積み上げの結果だと思う。熱心に参加しながら、その後何らかの事情で、この会に出席できなくなった人々も、この会を続けてゆく大きな力となったことも事実である。

それに、「まちづくり研究会」の面白いことは、始めは横浜市の職員に限定していた会合に、ごく自然なかたちで数人の外部の人々も加わるようになり、自主的な海外研修会もなんどか実行した。また、内輪の勉強会だから外部への発信などは考えてはいなかったのだが、用語集「イミダス」の「都市」を執筆したり、この活動が雑誌にも紹介され、各地で生まれている「まちづくり研究会」になんらかのインパクトを与え、訪れてくる他の自治体の「まちづくり研究会」とも相互刺激をするようになってきた。小さくはあっても、続けているということは、ひとつの大きな発信機能をもつことになる。

この十年間に自治体の重要性はさらに強まり、自覚的に政策の主体になる事態も生まれてきた。一方において、新中央集権主義と言われる動きも進行しているが、その反面で自治体も明らかに実力をつけてきた。現代の自治体は、かつて三割自治体といわれたような自己卑下の状況に留まってはおれなくなってきている。制度的にはさしたる改善は見られないものの、自治体の実力を強めてきたのは先覚的な首長と、その背後に、これまでなかった主体的な自治体職員が誕生し、自覚的な市民が育ってきたことによる。

員もすべて二十代の極
こで、すでに管理職に
な、これから伸びて

その運営から離れて十
たものもある。組織
て、機能を失ったり変
て、などのように個人
なに、寂しいとか、ほ
屋、同士の会という

人々の集まりであっ
ここも受け継がれて、
現象である。組織は
くすい。小さくて
る集まりは続くも
そこ間にかかわっ
その結果だと思う。
きてきなくなった人
そう。

市長等の職員に限定
するようになり、
自分たちら外部への
の「都市」を執筆
まちづくり研究
の「まちづくり研
ても、続けている

員の主体になる事
を重きも進行して
の自治体は、か
なくなって
実力を強め
的な自治体職

こうした状況のなかで、今日では各所の「まちづくり研究会」が生まれている。それらは構成員も自治体職員によるもの、市民によるもの、両者の混合によるもの、自治体行政がかかわりをもつもの、関係ないものなど色々ある。会の名称も「○○塾」などというものなどさまざまであるが、個人の立場に基礎を置く研究会や活動体であることでは共通している。ようやくにして「まちづくり研究会」の動きは全国の草の根的な地域づくりの基礎として、その底辺を広げつつある。「横浜市まちづくり研究会」も、ささやかながらその動きの先駆けとして活動してきたし、また、逆に意識はしなくても、そうした全国の動きに支えられて今日まで続いてきたことも事実であろう。

四年前、このような草の根的なまちづくり研究を行う人々の広がりをネットワークし、その活動をより発展させ、学者・研究者も実務家も市民も一緒になって、自治体についての研究を進めるため「自治体学会」が設立された。私もその設立にかかわり、設立後、その代表運営委員を勤めてきた。これは、この学会員に所属するしないは別として、広い意味の「まちづくり研究会」の全国版的ネットワーク運動だし、多くの人々への呼び掛けである。私もささやかながらお役にたたなければと思っている。

私も、この十年、全国各県をまわった。たしかに、どの都市も一頃に比べると美しくなったし、自治体も役場感覚からは抜け出しかかっている。自治体職員のなかには、かなり自信をもって活動する人々も生まれてきた。都市をつくるのも、自治を育てるのも、制度や金ではない。制度や金も重要なものではしるが、それらはあくまでも手段である。“まち”をつくるのは“まち”を愛するすぐれた人々である。そうした人づくりに成功しない都市は、一時的に金が余り巨大な構築物ができても、優れたまちづくりとはならないだろう。また、人がいなければ金をかけても、本当にいい“まち”にはならない。

横浜市も３２０万人と巨大になってきたが、人口の大きさが都市の勝ちを決めるのではない。人口規模ではなく、都市はいつも人々が生き生きと生活でき、個性と魅力のあるものでなくてはならない。それをつくるのは、そこに住む市民の意識と、自治体職員や首長の質によって決まるだろう。ささやかではあっても、「横浜市まちづくり研究会」が、今後とも、自覚をもって主体的な活動をする人々によって支えられ、また次の時代の若い人々を育ててゆくことを期待したい。

まちづくりに終わりはない。まちづくりとはいつも未来に向かってのロマンをもち、それに向かって、多くの人々、まだ見ぬ未来の人々や、見知らぬ人々とも協働作業を続けていくことである。

まちづくり研究会年表

イベント行政　国または地方自治体が、博覧会、見本市、展示会、国際会議などのイベントを積極的に活用することにより、産業振興や地域振興を図ること。イベントの実施は、ヒト・モノ・情報の集積の場を積極的に創設することから、社会資本の整備に関して地域のコンセンサスが得やすく、また比較的少ない資金で地域の活性化を図ることができるというメリットがある。神戸ポートピア博覧会の成功は多くの自治体に影響を与え、各地で博覧会をはじめとする各種のイベントが実施されるイベントブームを創出する契機となった。しかし、北海道の「世界食の祭典」では、九〇億円の赤字を出したり、平成元年度は全国いたる所で博覧会が行われたため、都市の個性をつくるものとはかけ離れたイベントも多く、また運営が広告代理店へ一括して委託されてしまうなど、地域の独自性が発揮されていないという問題点も指摘されている。

まちづくり研究会（年表）

1990，3，10

三　月	まちづくり研究会テーマと講師	ヨコハマ及び世界の出来事
1.29 ～ 2.07	まちづくり研修（職員研修所主催） 横浜市技監　田村明氏	モスクワ五輪ボイコット・KDD 事件・市営地下鉄横浜～新横浜間起工式
3.04	まちづくり研究会の発足会議	イエスの方舟・浜幸ﾗｽﾍﾞｶﾞｽ 借金 三菱横浜造船所金沢移転決定
4.08	地区カルテ『緑区』 緑区職員　木佐森氏他	嫌煙権訴訟・横浜駅東口開発主体社長決定
5.21	金沢シーサイドタウン 港湾局　北村氏	光州事件・大平内閣不信任案可決 オークランド港と姉妹港締結
6.05	金沢シーサイドタウン現地見学 港湾局　北村氏	大平首相急死・市選管啓発ハガキ全有権者に発行。新総合計画策定方針発表。2000年の人口 314万人
7.03 ～ 04 09	第一回日本デザイン会議参加 保土ヶ谷区の将来 保土ヶ谷区　清水氏他	中野区教育委員準公選・鈴木内閣発足・金沢海の公園人工砂浜ｵｰﾌﾟﾝ
8.04	都心臨海部総合整備計画 企画調整局　浜野氏	ポーランド連帯発足・新宿西口バス放火事件・港湾局 ｺｽﾀﾘｶへ職員派遣・横浜高校全国優勝
9.04	地下街のガス爆発 消防局　津田氏	華国峰首相辞任・ ﾙｰﾋﾞｯｸｷｭｰﾌﾞ流行 横浜いのちの電話スタート
10.08	地区カルテ『中区・緑区』 中区・緑区職員	山口百恵さよならコンサート 東戸塚駅開業
11.12	産業廃棄物資源公社の意義と背景 現地見学含む　環境事業局　三橋氏	レーガン大統領誕生・横浜ﾙﾐﾈ，ﾎﾙﾀ ｵｰﾌﾟﾝ・ベイブリッジ起工式 金属バット殺人事件
12.23	戸塚地区センター利用状況 都市問題研究会	横浜新都市センター㈱創立
81' 2.10	総合計画（横浜２１世紀プラン） 企画調整局　古畑氏	校内暴力史上最高・横浜文化問題懇談会が文化基金構想策定
3.12	横浜市の高速道路 道路局　山口氏	中国残留孤児来日・神戸ポートピア開催
5.14	横浜の産業構造の課題と展望 経済局　北園氏	ミッテラン政権誕生・ヨコハマウォーキング発行
7.01	文化行政と美術館 企画調整局　木村氏	パリ人肉事件・開港資料館オープン・横浜市海外交流協会設立 横浜市都心臨海部総合整備計画基本計画発表 180ha
8.13	まちづくりとは―バクダッド報告― 法政大学教授　田村明氏	三語族『ｳｯｿｰ，ﾎﾝﾄｰ，ｶｯﾜｲｲｰ』
9.24	市民が期待する広報紙とは 神奈川区　小沢氏	伊藤素子の愛と犯罪 本牧ジャズ祭開催
11.05	国際障害者年の意義 民生局　杉山氏	ハチのひと刺し(ﾛｯｷｰﾄﾞ事件) 愛称『みなとみらい21』決定

年　月	まちづくり研究会テーマと講師	ヨコハマ及び世界の出来事
12, 12	緑のマスタープラン 緑政局　内藤氏	ポーランドに戒厳令・よこはま女性の国際フォーラム開催 マニラ保険金殺人
82' 1, 29	新本牧地区計画 都市整備局　高橋氏	
2, 20 ～ 21	『まち研』合宿	ﾎﾃﾙ･ﾆｭｰｼﾞｬﾊﾟﾝ 火事・日航機逆噴射墜落・中区米軍住宅返還
4, 02	ＹＬＡＰの意義と職員の主体的参加 企画調整局　佐々木氏 ＹＬＡＰ―国連アジア太平洋都市会議	フォークランド紛争・伊勢佐木町街づくり協定 細郷市長再選
4, 20 ～ 5, 31	ＹＬＡＰ研究会開催（合計７回） よこはまのまちづくり 技監　田村明氏	レバノン戦争・少女の妊娠中絶前年より16%も激増。
6, 09 ～ 16	ＹＬＡＰ開催―主体的に参加	第１回ヨコハマどんたく開催
6, 24	土地利用の制度と問題点 都市計画局　廣瀬氏	ラジカセ騒音殺人・東北新幹線開業
7, 23	地区整備計画の作成について 都市計画局　北内氏他	歴史教科書問題 三保市民の森閉鎖
9, 29	山手地区のまちづくり 都市計画局　高橋氏他	ゲートボール殺人
11, 10	新交通システムの現状 道路局　仲原氏	中曾根政権誕生 伊勢佐木町3, 4 丁目モール完成
12, 18	地域性と空間的広がり 筑波大学助教授　岩崎氏	三年越しの不況 開港広場オープン
83' 1, 25	神奈川区のまちつくり 神奈川区　小沢氏他	中川一郎自殺・勝田事件（連続８人殺人）
3, 12 ～ 13	『まち研』合宿 テーマ　―都市ヨコハマをつくる―	三菱重工の金沢・本牧移転完了 横浜女子駅伝開催
4, 22	みなとみらい21について 都市計画局　橋田氏他	おしんドローム・区ｽﾎﾟｰﾂｾﾝﾀｰオープン 横浜新都市交通㈱設立
6, 08	ヨコハマの主体的経済発展を目指して 経済局　横山氏他	参議院比例区始まる 金沢緑地オープン
7, 08	横浜市婦人問題懇話会提言について 市民局　五反田氏	市高齢者社会対策研究会発足
8, 26	横浜市の老人問題 民生局　中村氏	アキノ暗殺・エイズに厚生省無対応・港北ﾆｭｰﾀｳﾝ集合住宅入居開始
10, 24	青少年に未来はあるか 駒沢大講師　汐見氏	大韓航空機墜落 ロッキード裁判田中実刑判決,
11, 28	MM21フェスティバル顚末記 都市計画局　遠藤氏他	ロッキード解散・MM21起工式 夕暮れ族摘発・フォーカス現象
12, 24	地方自治体における国際化と国際機関 （総会、公開討論会）	自民党過半数割れ 疑惑の銃弾スタート
84' 2, 21	戸塚駅周辺再開発について 都市計画局　矢野氏他	首都高―横浜公園～新山下開通
3, 03 ～ 04	『まち研』合宿 テーマ　―土地問題と土地政策―	南部斎場地元反対決議 グリコ事件
4, 18	ファッション都市ヨコハマをつくる 経済局　田口氏	焼酎ブーム、イッキ飲み ２階建バス『ブルーライン』発車

年　月	まちづくり研究会テーマと講師	ヨコハマ及び世界の出来事
5, 30	日本丸とみなとみらい２１について 港湾局　内藤氏他	横浜こども科学館オープン まちの色彩とまちづくりシンポジウム開催
6, 29	大分県一村一品運動 余暇開発センター　橋立氏	㈱横浜みなとみらい２１発足
8, 30	横浜港と経済の結びつき 港湾局　大島氏	黒字のロス五輪・日照指導要綱緩和 投資ジャーナル 事件・21面相の挑戦状
9, 21 ～ 22	大分県一村一品運動見聞旅行	帆船『日本丸』運輸省から払下げ 宅開要綱緩和方針
11, 26	大分県一村一品運動見聞記 企画財政局　荒氏他	池子問題で富野逗子市長誕生 世田谷通信ケーブル故障
12, 26	アジアの自治体は今・・・ 港南区　田口氏	ボケ老人殺人 田中角栄倒れる
85' 3, 14	ひかり号新横浜停車はヨコハマに何をもたらすか　都市計画局　上井氏他	エイズ一号認定 地下鉄新横浜～舞岡間開通
4, 25	東京都横浜市or首都横浜？？　首都圏においてヨコハマの生きる道は・・ ㈱みなとみらい２１　森氏	都心の地価年40%上昇 帆船日本丸一般公開
5, 23	ヨコハマ、鉄道、道路、空港 横浜を中心とする交通体系とは？ 都市計画局　友田氏	指紋押捺拒否 男女雇用機会均等法成立 市「文化基本構想」発表
6, 24	横浜の交通―ペナンと横浜の都市間比較による開発コントロールと交通体系 都市計画局　金近氏	豊田商事会長刺殺
7, 31	海外レポート　アメリカ編 都市計画局浜野氏　緑政局矢加部氏	京都古都税で拝観停止 日航ジャンボ墜落
9, 30	高度情報化社会の技術 ＮＴＴ　溝尻氏	ヨコハマ・ハイスクール・ホットウェーブ 開催 G5で円高時代へ・横浜そごう開店
10, 12 ～ 13	『まち研』合宿 テーマ　―各自のレポート―	歴史的建築物保存のボーナス制度 いじめ１１０番開設
11, 13	自治体と高度情報化社会 ～高度情報化社会の裏表～ 企画財政局　石田氏	市人口 300万人突破
12, 21	行政計画と住民調整 ～住民説明会を素材として～ 民生局　永井氏	ファミコンブーム(スーパーマリオ) 横浜ＦＭ放送開始 アキノ大統領誕生
86' 3, 04	市政100 周年記念事業の戦略 企画財政局　岡村氏	逗子市会リコール成立
4, 01	そごう進出と横浜駅周辺のこれから 横浜そごう　遠藤氏	岡田有希子現象・ヨコハマ・ビエンナーレ開催 チェルノブイリ 原発事故・細郷市長三選
5, 26	外食産業とまちづくり 経済局　南氏	市政100 周年「横浜・丘と海の祭り」発表
6, 27	インテリジェントビルと企業の情報化戦略 千代田化工建設㈱　東山氏	横浜人形の家オープン 衆参同日選で自民圧勝
9, 18	今、アーバンデザインは ～近年都市デザイン事情～ 都市計画局　佐藤氏	国際交通博ヨコハマデー 狂乱地価 社会党土井委員長誕生
10, 29	地方自治体の国際化 ～横浜と他都市の事例等～ 公務職員研修協会　又坂氏	ライトアップ・フェスティバル開催 戸塚区分区―泉・栄区誕生

年　月	まちづくり研究会テーマと講師	ヨコハマ及び世界の出来事
11, 26	みなとみらい２１は今 都市計画局　若竹氏	防衛費ＧＮＰ１％突破
87' 1, 29	海外大学の誘致は可能か 総務局　南氏	胡耀邦総書記辞任 赤レンガフォーラム開催
3, 24	国際居住年と横浜の役割 建築局　浜野氏	売上税岩手補選ショック ㈱横浜国際平和会議場発起人会
4, 19	東京湾ウォーターフロントツアー 民生局　仲原氏他	国鉄分割・民営化 野毛大道芸フェスティバル開催
4, 23 ～ 26	『まち研』海外ツアー―ソウル編― ～オリンピック前のまちづくり～	
5, 15	今、自治体がおもしろい！ 地方の目で見る四全総 法政大学教授　田村氏	朝日新聞阪神支局襲撃 ㈱横浜国際平和会議場設立
6, 26	横浜博覧会の表・裏 人・金・事業の流れなどなど ㈶横浜博覧会協会　川口氏	ＭＭ２１新線計画発表 特養ﾎｰﾑ「松寿園」火災17人焼死 市「緑化基本計画」発表
8, 03	ＭＭ２１新線の裏を覗く 今抱えている問題点と今後の見通し 都市計画局　鈴木氏	ヨコハマ・サマー ﾌｪｽﾃｨﾊﾞﾙ開催 ㈶ｹｰﾌﾞﾙｺﾐｭﾆﾃｨ横浜(CCY)CATV 送信開始・金沢水際線公園オープン
9, 19	旧根岸競馬場スタンドの有効利用 総務局　堀氏　山手総研　寺田氏	国際居住会議―横浜会議開催
10, 29	横浜アートセンター構想 関東学院女子短大助教授　小林氏	ブラックマンデー 金賢姫の謎
12, 05 ～ 06	『まち研』合宿 テーマ　―各自のレポート―	横浜市道路建設事業団設立
88' 1, 20 ～ 3, 23	横浜ウォーターフロント探検講座 （全１１回）	三菱地所「ﾗﾝﾄﾞﾏｰｸﾀﾜｰ」建設発表
2, 02	横浜港は今・・・ 港湾局　佐藤氏	横浜ビジネスパーク起工式
3, 11 ～ 27	ヨコハマ・フラッシュ開催 （１７日間のアートイベント）	YES' 89ﾖｺﾊﾏ・ﾌﾗｯｼｭ開催 さよなら青函連絡船
3, 15	企業サイドからの水際開発 日本鋼管　東氏	市情報公開制度スタート
4, 21 ～ 24	『まち研』海外ツアー―台湾編― ～平均地権制度とは～	アグネス論争
4, 27	横浜本牧ＣＡＴＶ奮闘記 ～ＣＡＴＶとまちづくり～ 都市計画局　田口氏他	㈱ポートヨコハマ１３０創立総会 市「歴史を生かしたまちづくり要綱」制定
6, 03	東京都のウォーターフロント開発 東京都　島村氏	リクルート疑惑発覚
7, 21	夜遊びの水先案内人 ベイサイドクラブ　林氏他	海の公園海水浴場オープン ソウル五輪
10, 14	国際化への挑戦―自治体編― 総務局　南氏	横浜女性フォーラム会館
11, 22	海外長期派遣研修制度について 総務局　小木曽氏	横浜国際平和会議場起工式 ブッシュ大統領誕生
89' 2, 17	ﾃﾞｨﾍﾞﾛｯﾊﾟｰ から見る“まちづくり” ～市街化調整区域の開発～ 日本環境企画㈱　清水氏	昭和天皇崩御―平成時代へ

及び世界の出来事
1%突破
書記辞任
ーラム開催
選ショック
会議場発起人会
宣化
ティバル開催
支局襲撃
会議場設立
計画発表
園」火災17人焼死
計画」発表
フェスティバル開催
横浜(CCY)CATV 送信
線公園オープン
横浜会議開催
事業団設立
」建設発表
ーク起工式
開催
書終船
貸スタート
130創立総会
したまちづくり要
発覚
場オープン
ーラム会館
会議場起工式
誕生
戎時代へ

三　月	まちづくり研究会テーマと講師	ヨコハマ及び世界の出来事
3, 14	横浜市と海外都市との技術協力 都市計画局　五島・伊東氏	マリタイム・ミュージアム完成・JR桜木町駅 駅舎開業・横浜美術館開館
3, 25 ～10, 01	ＹＥＳ’８９横浜博覧会 『ＹＥＳ・ＦＭ』放送オンエア	YES'89横浜博覧会開幕
3, 29	アメリカ体験報告会 総務局　南氏	ＱＥⅡ洋上ホテル開業 横浜高速鉄道㈱発足
4, 28	旭区からの発想・金沢八景のまちづくりチャレンジ　旭区　長井氏 都市計画局　松下氏	消費税スタート・横浜アリーナオープン・馬車道日本火災ビル新装 マイカル本牧オープン
5, 20	ＹＥＳ’８９横浜博覧会速報 ㈶横浜博覧会協会　安島・出縄氏	国際青年会議所アスパック89開催 美空ひばり逝去
7, 24	鶴見区からの発想 鶴見区　高安氏他	金沢シーサイドライン開業・世界交通学会 参院選与野党逆転・海部内閣発足
9, 06	米国留学報告会NO. 2 総務局　南氏	横浜ベイブリッジ開通 横浜博覧会閉幕1333万人入場
10, 20	横浜博覧会『ＹＥＳ・ＦＭ』顚末記 濱じゃん組　竹森・原氏他	幕張メッセオープン
11, 15	まちづくりの新たな地平を求めて サウンドスケープデザイン研究機構　鳥越氏	「よこはま21世紀プラン」発表
12, 14	香港のまちづくりとこれからの香港 千葉大学助手　藤原氏	MM21・24街区コンペ案発表 細郷市長不出馬表明
'90' 1, 14 ～1, 17	『まち研』海外ツアー―香港編― ～返還前の香港の現状とまち～	
2, 08	居住環境整備とコミュニティ参加 -海外研修報告-　建築局　飯島氏	細郷横浜市長逝去 衆院選自民党圧勝
3, 10	『まち研』10周年記念フォーラム	

まちづくり研究会活動報告

アーバン・デザイン(urban design)　**都市デザイン**。地方自治体による主体的なまちづくりの手法。既成の法律・制度の枠組みにとどまらず、自治体のもっている権限と人材を総合的に活用して、デザイン的にも質の高いまち並みづくりを行う。一人だけでデザインするのではなく、都市をつくる多くの主体に柔軟に働きかけ、総合的で質の高い都市環境を志向する環境デザインの代表的分野。あるべき都市像を背景に、地域の自然的特性や歴史的文化的価値などを反映させて、人間的な空間を備えた都市を実現しようとする。都市計画上の規制誘導権限を活用して公共事業、民間活力、さらに市民の協力などを総合的に結集させて企画・演出をする。小はサイン(道標や案内板などの)や建物相互間の調整による壁面後退から、大は地域ごとのまちの方針づくりまで、都市の表層的なデザインにとどまらず、その前提となる都市活動も総合的に把握・企画することがその基本姿勢である。横浜市では昭和四六年から、自治体では初めてアーバン・デザインの専門家集団をおいた。

５４年度　大分「一村一品運動」

１　日　程

３月２１日　大分県地域振興課
　　湯布院町　　旅館「玉の湯」
３月２２日　玖珠町　　吉四六（きっちょむ）漬工場
　　大山町　　町役場
　　中津江村　　鯛生金山博物館

２　概要

１）「一村一品」の本質

昭和５４年頃から大分県が提唱しはじめた「一村一品運動」は，個別の市町村が知恵を絞り展開した運動であり，県は各地の地域振興の試みを誘発し側面から援助したに過ぎない。また，単なる特産品づくりをめざすだけでなく、それをテコとした地域経済の振興を図ろうとしたものである。そして，さらに地域振興へ向けたイベント，イメージ，人材などの地域の素材を活用した「まちづくり」「むらおこし」と捉えることができる。

２）各地の取り組み

ア　大山町　昭和３０年代から「田圃をつぶして梅，栗を植えよう」と米作や育牛からウメ・クリ中心の多品種少量生産への転換を図り「月収制農業」を確立していった。（第１次ＮＰＣ運動）この成果を受けて，昭和４４年イスラエルのキブツへの青年の派遣をはじめとする，人づくりをめざす第２次ＮＰＣ運動を始めた。彼らは熱気を町へ持ち帰り人々を啓発した。海外派遣は壮年者の中国派遣，高校生の韓国セマウル派遣と展開した。そのノウハウはその後「１．５次産業」「分工場方式」「文産団地」へと発展し，第３次ＮＰＣ運動へ続いた。これは地域を８つのブロックに分け（文化集積団地）地域施設を中心に新しいコミュニティを作ろうとするものである。これと平行して梅ハニー，味しめじ等の農産物に付加価値を付けた「１．５次産業化」を進めている。

イ　湯布院町　地理的に大観光地別府に隣接しながら観光ルートからはずれた温泉であったが，昭和４５年頃，外部資本による観光開発の動きをきっかけに「由布院の自然を守る会」が生まれ，その後それは「明日の由布院町を考える会」へ引き継がれていった。彼らは別府と対象的な「個性」を大切にした「保養温泉地構想」をめざした。今でいう「ＣＩ」の形成を図り清潔な保養地イメージ，都会的要素を含んだ観光資源の創造，積極的ＰＲを柱に構想の実現をめざした。

「映画館のない町，しかしそこに映画はある」と売り込んだ湯布院町映画祭や「小さな星空コンサート］と銘打った「ゆふいん音楽祭」などイベントの活用に優れた特長を見せた。また，地場素材の活用に積極的

であり，都会の人達から育牛の資金を集める「牛一頭牧場」や地鶏運動という地域の農業学校・農家・肉屋を経済循環に巻き込んだ運動を生みだした。

ウ　玖珠町　「一村一品」の中でも一次産品を加工した「１．５次産品化」の代表例である「吉四六（きっちょむ）漬」は，大根，キュウリ，人参などのモロミ漬けである。ボーリング場を改造した工場は民間の食品会社から農協が引き継いだものであり，昭和５３年当時の減反対策への対応として安定した生産体制を整える目的があった。それは半面雇用の創造につながった。現在でも極力機械化は抑えられ地場雇用の確保をめざしている。吉四六漬は，他の市町村の漬物類と比較して，「地産地消」を掲げ地元から浸透を図ったり，研究を重ね３種類の野菜から１３種類に種類を増やしたりして生産拡大を図っている。吉四六漬の波及効果として工場の雇用のほか，農家の収益の安定と拡大が可能となった。また工場から出るモロミの粕は良い牛の飼料となっている。

（３）　共通の特質

ア　明確なポリシー　大山町のＮＰＣ運動や湯布院町の成功例には明確なポリシーを見ることができる。しかし，それはいずれも綿密な市場調査や長期にわたる試行錯誤を経ていることを忘れてはいけない。

イ　地場の素材の活用　湯布院の牛や玖珠町の野菜は地場の素材をうまく活用している。自然条件の活用を含めて，自分達の周囲の環境に対する深い配慮が十分に払われている。

ウ　小さな経済連関の重ね合わせ　湯布院の地鶏運動や玖珠町の吉四六漬は，それのみに留まらず地域に経済の連鎖を産み出している。

エ　外部ノウハウの利用　地場の特産物を産み出して行くうえで外部ノウハウを積極的に取り入れている。湯布院の「猪鹿鳥料理」は日本全国の食べ歩きから生まれたものであり，大山のエノキ栽培は産地長野から苦労の末導入したものである。

オ　その他　イメージづくりとマスコミ活用が巧みであり，また「まちづくりは人づくり」と考え人材育成にも十分力を注いでいる。

（この項は　調査季報８４号　行政研究「大分一村一品運動の実際」を要約しています。詳細は調査季報をご覧ください）

場」や地鶏運動
込んだ運動を生み

う次産品化」
チュウリ，人参
は民間の食品会
反対策への対
は半面雇用の創
雇用の確保をめざ
「地産地消」
から１３種類
波及効果と
なった。また

には明確な
な市場調査
ない。
素材をうまく
環境に対する

の吉四六漬
る。
で外部ノウ
は日本全国の
長野から苦

また「まちづ
る。

「実際」を要

IMIDAS執筆協力

1986年11月、集英社から最新情報知識辞典『IMIDAS』が発売された。

この『IMIDAS』の「都市」の項目を当会顧問の田村氏が執筆しているが、まち研ではこれに全面的に協力している。当初、集英社から依頼された田村氏は多忙でもあり断ろうと思われたそうであるが、まち研の存在を思い出し、まち研のメンバーが協力することで引き受けることとしたのである。このため、草稿をメンバーが分担して書き、田村氏が監修する形で毎年の出版が行われている。

初年度は全くの書き下ろしであり、項目の選定から始まり分担して執筆、内容の修正、分量の調整等田村氏のチェックを経ながら原稿づくりを行った。しかし、我々もこの種の文章化の作業に慣れていなかったこともあり、最後には田村氏に相当直され、原型をとどめないものもあった。辞典であるので、項目名を極力具体的にすること、最初に定義を手短かに述べること等田村氏の指導を受け、２年目以降は次第に慣れて来た。

「都市」は、ソフトからハードまで対象とする領域が広い。毎年新たな項目も必要となっている。メンバーも新しい言葉はないか、その言葉の一般への浸透度はどうかと普段から新聞等に注意している。また、据え置く用語でも内容に変化があれば修正することになるし、全体量との関係で手を入れざるを得ないこともある。このため、ほとんど総ての用語が毎年何らかの形で修正されている。その一方で、新語が入ることではみだす用語もあるわけで、基礎的用語が入らない点等の問題も起きて来る。『IMIDAS』が最新用語事典と銘打っている以上限界もあるのである。また、田村氏も我々も、まちづくりという観点から用語をとらえようという認識でいるので、単なる言葉の説明ではなくその内容に対するまちづくりからみた論評も入れるように努めている。

実際に原稿を書いてみると、限られたスペースで説明するのは実に難しいことがわかる。わずかな量といってもその背景も含め相当量の情報を理解していないと正確な言葉の説明ができないということもわかってきて、毎年のことながら緊張しながら書くことになる。これは良い経験にもなるのでなるべく多くのメンバーに書いてもらうようにしているが、初めて書いた場合は田村氏の手でほとんど修正されることになる。

また、各自の書いた原稿を前にお互いに批評し合うのも楽しい機会であ

る。お互いの情報不足を補い、研さんの場になる。また、自分の担当した用語が、量の調整上削除されそうになると、何とか残そうと必死の攻防が展開される。

我々はこれらの作業を通じて、日ごろ何気なく使っている多くの言葉の意味を再認識している。このような機会が得られるのもまち研ならではである。

た、自分の担当した
そうと必死の攻防が

ている多くの言葉の
たまち研ならではで

韓国ツアー

日　程	1987.4.23 成田→ソウル 現代総合商事訪問 24 ソウル市役所、木洞事業所、漢江管理事業所、 オリンピック施設を訪問 25 自由行動（国立現代美術館、中央博物館等） 26 ソウル→成田
参加者	21名

1982年に横浜で開催された国連アジア太平洋都市会議（ＹＬＡＰ）での活動や、その後のアジア部会等でアジアとのつながりの中でまちづくりを考えて来たまち研では、実際にアジアの都市を見てみたいという機運が高まっていた。これを最初に実現したのが1987年の韓国・ソウルツアーである。

翌年にオリンピックを控えた韓国は、高度経済成長のただ中にあり都市開発も急速に進められているとのことであった。そこで、ソウルの都市づくりの状況をこの目で見、また、官民の都市づくりにはたす役割等を聞いてみようという趣旨でツアーを企画した。

実際に訪れたソウルは高層ビルやニュータウンの開発が進み、日に日に変ぼうを遂げているという印象であった。市役所の訪問では、都市計画部門でまちづくりの制度等を伺った。また、韓国の代表企業である「現代」を訪問し直接会長の話を聞く機会を得た。これらの話の中で、韓国の状況が高度成長期の日本によく似ていること、土地住宅政策にかなりの力を入れていること等がうかがえた。また、根強い儒教思想の影響や南北分断の落とした影が話のはしばしにうかがえた。

朝早くから夜遅くまで、ソウルのまちは一日中にぎわっていた。近郊からバスを連ねて買い出しに来る人で早朝から混雑する市場、深夜までバスや車が流れる広幅員の幹線道路、超ラッシュの地下鉄と、すさまじい活気、熱気であった。中心街の明洞（ミョンドン）にくりだしたメンバーは、海鮮料理の小さな店でサギまがいの料金を請求され、粘りに粘って値引きさせるというハプニングもあった。

また、市内に残る史跡等に日本の統治の名残を見て、あらためて日本と

アジアの関係を考えさせられたりもした。

短い期間であったが、隣国韓国がぐっと身近になった4日間であった。

った4日間であった。

台湾ツアー

日　程	1988.4.21 羽田→台北 台北市政府都市計画處訪問 22　〃　地政處、行政院経済建設委員会訪問 23 自由行動（故宮博物館等） 24　〃　、台北→羽田
参加者	15名

第2回の海外ツアーは台北を訪れた。折しも我国では首都圏から始まった急激な地価高騰に見舞われていた。「地上げ」が流行し、土地問題は都市の発展にも影響していた。土地政策のあり方をめぐって様々な議論がなされていたが、国土利用計画法による届出といった対症的な方策で手一杯であった。

台湾では、以前から孫文の三民主義の理念に基づき独自の土地制度を実施していた。これは、地価の上昇による利益は地権者が占有するのではなく国民全体の福利向上に用いるべきだとする理念である。これを実現するために、地価上昇分を徴収する課税システムや地価の自己申告制度等が整備されているということであった。この独特の土地制度『平均地権制度』を調査しようという趣旨でツアーを企画したのである。

台北では市政府の都市計画處と地政處を訪ねた。地政處では『平均地権制度』の実態をうかがったが、制度の運用が形がい化されて来ていたり、税率が引き下げられたりと、当初の理念から後退している様子であった。台湾も経済成長により土地の資産価値が上がり、次第に制度がゆがめられているのである。地主が有利な方向に制度が改訂されているのである。しかしながら、その優れた理念や、土地に関する行政が区画整理、登記、地価公開、課税等も含め一元化されている事等見るべき点は多かった。

都市計画處では、都市計画の制度をうかがったが、日本と同じような容積制や用途地域制が行われていた。また、日本の総合設計制度を取り入れ、公開空地を確保した現代建築が増えていた。しかし、このために従来からある「亭仔脚」（一階部分の壁面後退によるアーケード）が分断されているのは残念であった。

台北のまちは周囲を山に囲まれた盆地状の平坦地に広がっている。平坦

で地形的特徴が少ないことに加えて、戦前の日本の都市計画で格子状の道路網ができており、マクロ的には地区の特性が乏しく感じられた。しかし、道は我がちに走る車やバイクで混雑し、人通りも遅くまで絶えず、特に旧来からの市街地は屋台や夜店に雑踏があふれ、活気に満ちたまちであった。漢字の看板も前年訪れたソウルのハングル文字と異なり、意味の見当もつくので親しみやすさを覚えた。

このツアーでは、テーマを明確にして、事前勉強会等もある程度行うことができ、効率良く情報が得られた。また、台北市政府や大学関係者と暖かい交流ができたことも成果であった。

[香港ツアー]

香港のまちづくりのスケールと先進性には驚かされた。香港島の超高層のオフィス街と九龍半島の超高密な住商工が混在した街という表層的なイメージしかもっていなかった我々は、エネルギッシュな街の姿と、民力を生かした積極的で知恵に溢れた果敢な都市づくりに脱帽した。

香港のまちづくりの根幹は巨大なインフラ（都市基盤）の整備である。

これから進められる最大のプロジェクトである空港移転を例にとってみると、九龍半島の飛行場を西方に移転し、そこと他の地区を環状につなぐ交通網（地下鉄・高速道路など）の整備、港湾施設の沖合への移転・強化も行う。空港近辺には職住近接を図、人口の分散を進めるためにニュータウン整備も行っていくこととなっている。

一方、九龍側の超高密市街地も空港跡地をも含め大規模に再開発する予定である。このような積極果敢な都市づくりの施策は近年稀にみるものである。

また、香港では土地が限定され、特に旧中心部では狭小な埋立地か丘陵地しか建築可能地がない。従って、計画的な開発に伴う土地の取得は困難を伴う。これをクリアするためにつくられたのがLand Development Corporation（土地開発公社）という政府と民間による第三セクターである。

香港の交通政策については、多種多様な交通手段が確実に動いているように見受けられ、先進性を感じた。

近代的な地下鉄から新交通システム。昔ながらのフェリーや２階建バス、ミニバス、さらに珍しい２階建の路面電車と乗物好きにはたまらない場所である。これらを総合的に統括している運輸局の仕事ぶりも適確なようである。

いかんせん物理的な余地がなく、新たな道路建設が難しいという。それならばと自動車への重課税で台数を押える発想もユニークである。

香港では、政庁が行う公共事業（地下鉄、高速道、埋立、ゴミ処理場等）などにも公開入札によって事業主体を民間に求め、定められた条件を満たしさえすれば施設等の引き渡しまで、工夫に応じて利益をあげることも認めている。

信託のようなものであるが、この方式も、政庁の巧みなコントロール能力と先見性があることによる。

１９９７年の中国返還にも拘らずこうした創意に溢れた積極的な都市づくりが継続的に進められるのは、“市民がいる限り都市づくりは必要”という信念による。予見されているように、数十万の人達が外国へ移住してもなお５００万人以上の住民がここに集住しているからである。

日　程	１９９０．１．１４　成田 → 香港 １５午前　香港政庁都市計画局及び運輸局訪問 午後　屯門ニュータウン開発事務所訪問 １６午前　清水建設株式会社香港事務所訪問 １７　香港 → 成田
参加者	１８名（市：１５名、民間：２名、田村顧問）

まちづくり研究会会報抜粋

みなとみらい21（MM21）

横浜市が進めている都心臨海再開発プロジェクト。昭和四〇年に、横浜市は自治体主導型の六大事業を掲げた。その一つが都心部強化事業であり、都心臨海部で操業中の三菱造船所、旧国鉄ヤード、埠頭などを移転し、跡地を横浜らしい都心として再開発するもの。新規埋め立て地（七六ヘクタール）も含め一八六ヘクタールに、就業人口一九万人、居住人口一万人を予定している。五八年に着工した。国際文化都市としての業務機能の集積を進めると共に、高度情報社会に対応した情報インフラ整備を図り、さらにみなと横浜のイメージを演出する公園や観光施設などの設置が計画されている。平成二年に日本一の高さ（二九五メートル）を誇るランドマークタワーが着工する予定である。平成三年には臨海部に、コンベンションセンターの一部として国際展示場やホテルなどがオープンする。総事業費二兆円、西暦二〇〇〇年の完成を目指している。

なお、昭和六三年七月には、地区内地主によって、建築物の高さ・形態・用途・新しい都市システムの利用・電波障害への共同負担などを内容とする「まちづくり協定」が結ばれた。そのための自主的運営組織として「まちづくり部会」が結成・運営される。

まちづくり研究会

通信NO.22.

2月20.21日 合宿の報告

進行：参加者各自が「まちづくり」又は「仕事」についてのレポートを提出し、それについて討議する。

参加者16人 アドバイザー1人

主なレポートの項目

- 地方自治の可能性
- 地震警戒宣言発令時の市内各駅の実態調査について
- 観光からとらえる横浜
- 仕事について考える事
- 都心部の都市計画道路の整備による環境の改善について
- 街づくりについて
- こみゅにけいしょんしてますか
- 区にまちづくりは可能か
- 政令指定都市横浜の矛盾
- 公務員の意識変革についてのひとりごと
- 職員の主体性の創造に向けて
- 区役所問題に関する一試論
- 老人ホームで
- 公私の機能分担論における福祉

[雑感]

☆ 問題点が様々な方向に向ってふくらんでおり、個々の問題を話合う時間が足りなかった。次回はテーマを決めてレポートし、討論するよう心がけたい。

3時30分～10時すぎまで、となりの宴会の騒音にも負けず、真面目に討論を続けた。11時から、本格的にアルコールを入れての討論に移り、早い人で午前3時、遅い人で5時半までねばりぬいた。不思議なことに、若い人から順次ダウンしてしまったようで、最後まで飲み、話していたのが田村氏だったことには、驚くとともに、若い人たちの体力のなさ、アルコールに対する淡白さを残念に思うしだいです。

内容については、あまりにも多方面にわたるので、ここでは記せませんが、資料等は用意してありますので、電話をいただければ送付します。

- 今後の「まちづくり研究会」の運営のためにアンケートを実施しますのでご協力をお願いします。
- 3～4月は事務局多忙のため、研究会は開きません。5月からは、装いも新たに（新採用職員も含め）再開いたしますのでご期待ください。
- 今回は3月27日（土）港北区で開催される「港北区まちづくりシンポジウム」のお誘いをお送りします。

港北区まちづくりシンポジウム

路地裏からまちづくりを考える

港北区役所では、地域に暮す人々とともに地域について話し合いまちづくりを考えていく資料として、「港北地区カルテ1981」を昨年発行しました。

しかし、実際のまちづくりには人々の協力と息の長い取り組みが必要です。

そこで、区役所ではこのたび「港北区まちづくりシンポジウム」を開催して、私達のまち港北でどのようにすれば住みよいまちづくりを進めることができるのかということについて、みなさんと考える機会を設けました。

区内の現状を紹介したスライドや神戸・横浜のまちづくりの話しを参考に、いっしょに考えてみませんか。

法政大学教授・港北区在住（前横浜市技監） 田村 明

神戸地域問題研究所長 宮西悠司

司会 港北区民会議副代表委員 水野次郎

3月27日（土）1：30～5：30

会場／吉田ビル3F アーバンホール（区役所隣・駐車場なし）

詳しくは、港北区役所 区政推進調整係 045（543）1212（内）532 まで

事務局 総局職員研修班 仲原 671-2165
経局中央卸売市場 南 461-1311 内226

まちづくり
まちづくり研究会・機関紙
NO. 30
1983年 1月
発行：
まちづくり研究会
運営委員会

国際的 大講演会と舞踏会

INTERNATIONAL
Discussion and party

1982 | 12 | 18 | SAT.

● PART I　Discussion ● ● ●

Theme　「地域性と空間的広がり」
一都市デザイン的価値の延長線上に見たアジアー
Urbandesign and Asian countries

GuestSpeaker　岩崎駿介 氏（筑波大学社会工学系助教授）
Syunsuke Iwasaki
前ESCAP Chief
元横浜市アーバンデザイン担当副主幹
PM 2:00～4:00
勤労青少年センター 501 号室（野毛山研修所）
Kinro Seishonen Center

○自治体職員の役割は、その地域の多面的価値を増進することにある。～そういう意味で自治体はいい職場だ。

○「都市デザイン」とは、ひらたく言えば「まちをよくしよう、より人間的にしよう」ということだ。

○都市の美学、美しさには3つの柱がある

1. 空間造形的なもの ― 建物、道、植樹…などが相互に関係しあってその地域の特徴となる

2. いろいろな人に出会うこと ― 異種、多種なふれあい

3. さびしいところ、にぎやかなところがある

○しかし、現状においては地域が地域として完結せず、その産業（農業、工場）流通ではますます広域的ネットワークを拡げ、生活も当然のように地域をとびこえて、広域的ネットワークの中で成立している ― 何が地域主体の形成になりうるか

○経済的ネットワークはもとより首都圏でも完結せず、アジアを含めた世界的LINKAGE（linkid3＝結合、つながり）の中に成立する。

○経済の伸びについて言えば、伸びていくところがあるうちはよいが行きついてしまうと、伸びていった波が帰ってくるのではないか

Q. 新たな地域経済はどうしたらできると考えているのですか

A.「わること」だいせつ。ESCAPに行ったり、スラムの子たちに図書館を作ったり、YLPをやったり、とにかくよさそうなことをやってみている。

Q なぜ市をやめたのですか。自治体はよい職場だと言ったではないか。

A. 全部の局にわたらなければひとつの地域のデザインはできないわけで……
結局市長が代ったからですよ。

〔付録（講演レジュメ文献一覧表）もごらん下さい〕

まちづくり NO.42
まちづくり研究会・機関紙　1984年8月
□発行：まちづくり研究会 運営委員会

定例会報告　6月29日（金）

テーマ：　大分県の一村一品運動
講　師：　余暇開発センター　橋立氏

講演内容

1．大分県の一村一品運動について

昭和54年11月に平松知事が打ち上げた運動。農村工業をもってくる施策でなく、若者が希望をもって働ける産業をつくることが目的（一次産業から一・五次産業へ）
ねらいは、1.多様な産物を活かす。2.ローカルエネルギーを活かす。3.県民のやる気をおこすプロジェクトを。
具体的には何をやるか —— 県は、市場調査、ＰＲ、講演会等を行う。推進協議会による研修会etc.大山町・湯布院町など地場産業おこし。

2．その他の地域づくり

北海道釧路について —— 200 海里問題でだめになった水産資源のかわりに方法を考えだした。1.ボタ山の火力発電所。2.火力発電所の余熱・もえがらを利用した野菜工場（公社）3.フィッシャーマンズ・ワーフ（魚の消費を増やす）
沖縄について —— 船の廃油回収センターで集めた廃油とさとうきびのしぼりかすを混ぜてタドンを作り、安く発電を行う。

3．自治体と地域経済について

自治体が直接に経済にタッチするのは難しい。自治体の政策を外からオーソライズする力が必要。行政マンが、商社マン、企業マンとなって新たに産業を作っていく。地域の経済政策がうまくいったところでは、犠牲になった産業が必ずある。

質疑応答

1．平松知事のかけごえが何故実践につながったか？
既に大山町等の実践があった。若手の働きがあった（ムラおこし研修集会）。

2．一村一品の効果は？
地域資源、エネルギー、Know Howを使った開発であり、落ちこぼれが少ない。

田村氏の総括コメント

・平松知事は、産業と地域を結びつけた地域経営者である。
・地域資源（地場産業、企業etc.）をうまく組み合わせていくのが地域プロデュースである。地域資源が何もないところでは、自治体職員が作っていかなければならない。自治体職員は地域に必要なことは何でもやる。
・まちをつくることが創造であるが、そのまちからさらに創造的なものがうまれてくるようなまちづくりが必要。

次回定例会

テーマ：「横浜港と経済の結びつき」
講　師：港湾局企画課　大島氏
日　時：8月30日（木）　午後6時～
場　所：教育文化センター　9階　906号会議室

○「大分県一村一品運動」見学ツアーのお知らせ
（まちづくり研究会・まち研地域経済部会共催）
6月の定例会での大分の一村一品運動の報告をもとにして、地域経済の活性化に先進的に取り組んでいる大分県の現場を見学するツアーを企画しました。大分県庁の方々との懇談会や、大山町・湯布院町などの見学を予定しております。
皆さん、ぜひ御参加下さい。

☆日程・予定
9月21日（金）午前　羽田→大分　県庁にて懇談会、湯布院町泊
9月22日（土）湯布院町・大山町見学、日田泊
9月23日（日）観光予定
☆費用　7万円ぐらい
☆問い合わせ　企画財政局資金課　荒　671－2183

○自主研に横糸を張る —まち研スパイダースからのお知らせ

秋の“自主研フェスティバル”に集まろう！

地方の時代は、自発的な創造の時代。それぞれが考えていることを持ち寄って交流することで、さらにジャンプ。トヨタ財団だって地域研究に懸賞をかけている時勢、僕ら当事者にやれないわけがない！
横浜について研究している人ならジャンルや職業は全く問いません。県職の自主研との交流も予定。来れ10月。これから始めてみようという人ももちろん大歓迎。

よこいと8月号　8月16日（木）発行

・自主研究っ子ぴあ大充実！
—— 7月発足の自主研・各区自主研20を含め総勢30に！
見やすくなります。
・秋の“自主研フェスティバル”参加予定グループ中間報告
1　大分一村一品運動ツアーに期するもの
まち研地域経済グループ　荒氏
2　市民の手作り“あざみの地域カルテ”とウォークラリー
緑区地区カルテ研究会　斉藤氏

スパイダースの活動は職員研修所承認自主研修です。問い合わせ、参加、意見等色々お待ちしています。
連絡先：企画財政局財政課　大木　節裕　671－2236

まちづくり

まちづくり研究会・機関紙

NO.68

1987年 10月

発行：
まちづくり研究会
運営委員会

定例会報告

［テーマ］旧根岸競馬場スタンドの有効利用を考える
［講　師］山手総合計画研究所　寺田　芳朗氏
　　総務局横浜開港資料館企画調査室　堀　勇良氏
［日　時］9月19日（土）午後2：00から（ツアー）
　　9月21日（月）午後6：15から（討論会）

◎講義内容

1　根岸競馬場
　所在地　中区根岸台
　設計者　J・H・モーガン
　構　造　一等観覧席，二等観覧席，連絡部，下見所（パドック）等

2　他の建築物との相違点
　(1)現存しているものでは最古である（一等・昭和5年，二等・昭和9年）
　(2)場所自体が日本競馬場発祥の地である
　(3)根岸の高台にあり遠くから観ることが出来る
　　根岸＝競馬場という連想が出来る特異なランドマークである
　(4)単体的価値を有している
　　①外観では当時の建築の特徴を兼ね備えている
　　②面白い内部空間（吹抜け等）を持っているetc.

3　その保存への問題点
　建築物として新しすぎるため価値基準がはっきり確定出来ない
　　↓↓↓
　技術的には難しくないが、そこまでして保存する価値があるのか
　　↓↓↓
　ファサードだけ残して建て直しても同じようなものではないか

4　残すとしたらどの様に
　○建築博物館
　○スポーツセンター
　○生涯教育センター
　○ヨコハマ国際芸術センター（アートギャロップヨコハマ）

5　将来への展望
　一等観覧席のみ残す方法が現在有力で、緑政局は11月に対象部分を取り壊す予定である。
　歴史に関して総合性＋地域性を生かすことを考慮し、もしBestの結論が出ない時“待つ”行為が様々な価値観を持つ行政各内部が出来るのか、そして後に判断を先送りすることも必要ではないのか。
　現在のアイデア不足で壊せば二度と元には戻らないものなのだから。

皆さんのアイデアを待っています。

10月定例会

［テーマ］横浜アートセンター構想
　～アートセンターは横浜に・横浜はアートセンターにどの様に貢献できるのか～
［日　時］10月29日（木）午後6：15から
［場　所］教文センター908号
［講　師］関東学院女子短期大学助教授　小林　進氏

　アートセンターは、現代芸術にとって欠くことの出来ないワークショップの場を提供すると同時に、交流を企画・演出する中枢のことである。アートセンターは、横浜の国際性・文化性を実効的に高めるだけでなく、ロフト使用等施設経営に新しい可能性を提供するであろう。真の国際性・文化性は、人と人との交流によって始めて根つくもの。その交流をコーディネイトしてくれる機関・場所・そしてシステムが何より大切だ。

　国際文化都市を自称する横浜にこそアートセンターを！！！

連絡先：都市計画局都市計画課
671－3510　漆原　順一

まちづくり

No.85

まちづくり研究会・機関紙　　1989年12月

□発行：
まちづくり研究会
運営委員会

１１月定例会報告

［テーマ］まちづくりの新たな地平を求めて
　　ーーサウンドスケープの思想と
　　それに基づくデザインの実践ーー

［日　時］11月15日（水）6時15分から

［講　師］サウンドスケープ研究機構　鳥越けい子

［報　告］

１．サウンドスケープの概念

”音”は従来、音の専門家だけのものと考えられていた。しかし、「サウンドスケープデザイン」はそういった環境音楽の１ジャンルと言ったものや、騒音行政と言ったものではない、「誰もが日常出している音」そう言った”音”について捉えることをしようとするものである。つまり、”音”を作り出すのではなく、一つの風景として捉え、それを聞く環境を創ること、または保っていくことを目的としたものである。従って、音を物理的に捉えるのではなく、人間とそれを取り巻く諸々の音がどのような関係を形成しているのか、人々がどのような音を聞き取り、いかに意味づけ、価値づけているかを問題とし、音環境を一つの文化として捉える。

サウンドスケープの構成音には、雨や風の音、動物や昆虫の鳴き声などの自然界の音から、人間の発する音、道具などの物音、機械の音など多様多種な音が含まれる。

「サウンドスケープ」は、複合語であり、視覚的な「風景＝ランドスケープ」に対して「耳で捉えた風景」を意味する。換言すれば音の風景を意味する言葉である。

２．神田サウンドスケープ研究会

(1)都市における音の役割

例）神田ニコライ堂の鐘の音

・ニコライ堂の鐘の音は、教会で礼拝が行われていることを教会に来られない人々にも伝えるもの。鐘の音は、神田で暮らす人々と地域や時代との深いつながりを支えている。

証言１・・・ニコライ堂の鐘の音を産湯で聞いた

証言２・・・子供の頃、どこで遊んでいてもニコライ堂の鐘が鳴ったらかえって来いといわれた。毎日夕方６時に鳴る時報の鐘は遊び歩いて帰ってくる時の合図だった。当時日本橋や銀座で遊んでいても、鐘の音が聞こえた。

(2)研究会の活動

①神田での路上パフーマンス

時期が悪かったため行政などからの抵抗があり、うまくいかなかった。

②神田川まつり

③なごやの音名所

名古屋市内で、聞くと親しみを感じ、心が安らぐ生活の中の街の音を名古屋市公害対策局が公募したが、その審査に携わった。

<名所として選ばれた音>

・名古屋港の汽笛

・興正寺の鐘の音

・名古屋コーチンの鳴き声　　etc.１６カ所

これらの音は、世界デザイン博の期間中、白鳥会場でテープで流し来場者に人気投票をしてもらった。

④横浜博音憲章

一、会場の音環境全体を一つの「音風景＝サウンドスケープ」としてとらえ、その味わいに耳を傾けると同時に、音の無思慮な発生により場内の音風景を破壊しないよう注意しよう。

二、自然の音、人口の音をトータルにとらえ、両者の調和ある音風景を味わい、創造しよう。

三、「音によるコミュニケーションとはなにか」その本質を考え直そう。

四、お祭りらしい楽しい音風景の創造に各自さまざまな形で参加しよう。

五、横浜の歴史の音、波の音、宇宙の音に耳を澄まそう。

・・・従来の視覚で捉える街づくりではなく、
　　聴覚で捉える街づくり・・・

世界で初めて計画された音風景を持った博覧会としての試みを行った。多くの博覧会がともすると、その場限りのお祭騒ぎとなりがちな中で、音憲章の制定とそれに基づく試みの成果を今後のまちづくりや都市計画に活かしてもらいたい。

＊田村氏のコメント＊

１０年間まち研をやっていて９時過ぎまでかかったのは初めてのことである。それぐらい表現の難しいものである。

「デザイン」と言えるところもあるし、言えない所もあるあるようだ。チャート（当日配布資料）にまとめてしまうと分かりやすいがトータルな話としては難しい。光のように視覚で捉えるのではなく消えてしまう音であることがなお難しくしているのであろう。名古屋の「音」の話があったが、横浜で「音」と言ったら、大晦日の除夜の汽笛や海岸教会の鐘が挙がるであろう。

＜１２月定例会のお知らせ＞

［テーマ］香港まちづくり視察関連テーマ
　　ーー香港のまちづくりと、これからの香港ーー

［日　時］12月14日（水）　午後6時15分から

［場　所］労働福祉センター　４０１会議室

［講　師］千葉大学工学部助手　藤原　恵洋氏

来年一月に予定されている「まち研海外視察第３弾、香港まちづくり視察」を前にしての特別企画です。1999年に中国に返還されることが決まっている香港は、様々な意味で、今一番”動いている街”と言える。そんな香港の現状とまちづくりについてお聞きします。

なお定例会終了後に中華街にて忘年会を兼ねた懇親会を行いますので是非ご参加下さい。

都市計画局都市計画課　漆原　TEL 671-2677

◆中野区等横浜ツアー・金沢うぉーたーふろんと編

１１月１８日（土）晴天の下、中野区他特別区の皆様総勢２５人（４歳のお子さんも参加）をご案内致しました。

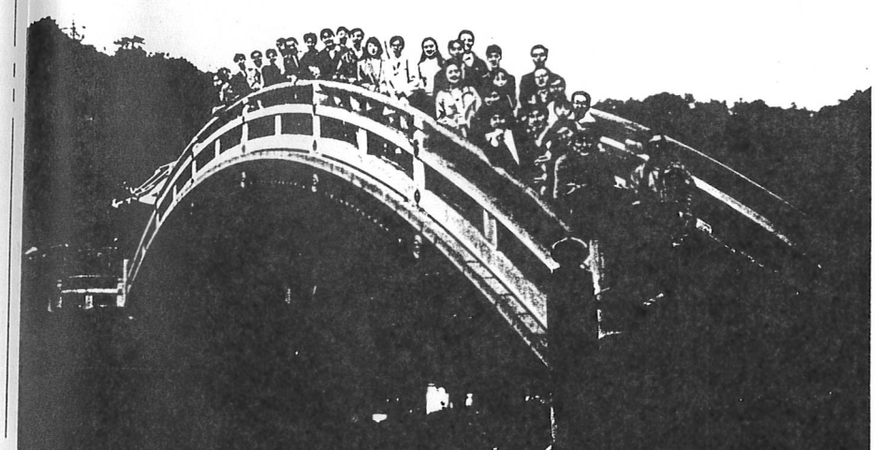
日ごろ机の上での討論会には縁の深い我々まち研ですが、今回は実地に街を歩くことを課題としている東京特別区のまち研（事務局・中野区、他多数の区が参加しフリーカメラマン等の民間からの参加も有り）との合同ツアーを計画しました。

用意した資料があっと言う間になくなるほどの大人数（主催の中野区の方も驚いていました）で、金沢八景駅を出発し八景駅東口周辺の開発状況から始めて、走川公園や周辺団地の道路と歩道を一体化させた歩行者空間を見学、称名寺で休憩、海の公園から八景島を望んだ後、シーサイドライン海の公園南口駅からシーサイドラインに乗車し、一路中華街での懇談会となりました。

金沢区の仲原氏、都市デザイン室の中野氏の両名から要所要所での説明を受けながら、予定コースを無事終了。公園ではしゃいだちびさんが怪我をしたり、一時行方不明部隊が出るなど、街を歩くならではのパプニングがあったりと、賑やかなツアーでありました。後日いただきましたお礼状によると、中華街の懇談終了後番外編と称して、大桟橋その他を探検され夜の横浜を楽しまれたとのこと、あらためて「歩くまち研」のエネルギーを感じました。

今回ご協力いただきました皆々様に厚く御礼申し上げます。今後とも横浜紹介のツアーをふくめて「街に出掛けるまち研」を計画したいと検討しております。

以上



「街づくり研究会」の御案内

技術研修も最終日となりました。

毎回「街づくり」(都市計画・都市経営)に関する興味深い話を聞くことができましたが、反面わずか4日間では表面的、あるいは概略しかなかったような気がします。横浜市に勤めている上、技術・事務、ハード・ソフトを問わず、「街づくり」課題は尽きることがないと思いますので、今回の研修を機会として「街づくり研究会」を発足することにいたしました。ぜひ御参加ください。

//実施要領//

- ⊙ 月に一回程度の会合をもって、レポーターの提起に基づき討議する。(技監は毎回出席)
- ⊙ 研修所に「自主研究グループ」の登録を行い、補助(職免、講師、資料)をうける。
- ⊙ レポーターは参加者のなかで希望者が行う。(内容は「街づくり」の範疇とする)〈都市計画、アーバンデザイン、都市経営等〉
- ⊙ 必要に応じて講師を依頼したり、見学を行う。

その他は、参加者の意向によって決めることとしたいします。

問合せ

南(ミナミ) 学(マナブ)	環境事業局産業廃棄物指導課	671-2511
関(セキ) 寛(ヒロシ)	鶴見区役所保険年金課	503-1212
林(ハヤシ) 秀樹(ヒデキ)	下水道局 施設課	671-2850

会員からのメッセージ

まちづくり研究会

自治体職員や地域の人々がまちづくり全般に関する情報交流と人的交流、政策立案を図る自主的な勉強会のこと。まちづくりとは現場性・地域性・総合性・実践性・市民性をもつものであるという観点から、ハード・ソフトの枠を超えたものとして位置づけられ、これを担う人間形成（人づくり）を目指している。また、組織のタテ割りを補完するヨコ糸をめぐらそうとする意図も大きい。北海道の恵庭市、名古屋市の「青年都市研究会」、横浜市の「まちづくり研究会」、東京・墨田区の「ソーラーシステム研究会」など、全国的に活動がみられる。最近は自治体職員の研修の一環として、市町村が組織し援助しているものも多い。

アメリカから愛をこめて

ＵＣＬＡ留学中　　南　学

『まち研』が１０周年を迎えると聞くと、創立者としては「よくぞここまで」という気持ちと、「５年一昔」と言われるこの時代にはもう「二昔も歳をとってしまった」という気持ちが重なりあう。

すでに設立にかかわったメンバーは係長歴数年の、まさに中堅になっている。そして、自分自身で仕事を「面白く」するだけでなく、次の世代の「元気ある」職員に道をひらく役割も考えなければならないのだから、振り返ってみるとやはり１０年は大きな重みとなって迫ってくる。

アメリカから太平洋を隔てて日本を見ていると、地域性あるいは自治体であることを第一に考えながらも、もっともっと大きな視点で仕事（プロジェクト）を考えなかったら、一度しかない人生を無駄遣いしてしまうという思いがしてくる。自分の周りの人間よりほんのちょっと早く出世して肩書を得ることに満足を覚えるのも人生かもしれないが、たかが一市役所の中で肩書をちらつかせても、世間から見れば（市から発注を受ける会社は別にして）ほとんど無視される小さな存在に過ぎない。それよりも自分の全力を傾けてプロジェクトを進め、その過程で様々な人間と議論して知り合いを創るほうがどれだけ楽しいかしれない。

環境事業局、経済局中央卸売市場と、「本庁舎」意外のところで９年間過ごしていたころは、「本庁」に行けばもう少し仕事が面白く、簡単に進むのではないかという憧れがあった。しかし、総務局に来てそれは間違いであることがよくわかった。教育課にいた２年半の間にわかったことは、確かに「本庁」には仕事を良く知っている実力のある職員と、様々な情報が集まっているが、それだけでは仕事は進まないということであった。

最大の関心事は「人事」であり、出世すれば出世するだけ判断を求められることはあっても、自分で仕事を創りだすことは難しくなる。課長がやる気になればかなりの程度進むが、部長以上になると「バランス」を考えることが第一になる。助役まで出世しても、次の就職先を考えなければならないので、やはり「バランス」を考える必要がある。そして、自分の自由になる時間は確実に減っていくのである。

この現実を見れたことと、「役所」の信用力、バラエティ、そして膨大な予算をもとにした仕事の面白さを知ったことで、ジェネラリストとして出世するよりも、ある程度のスペシャリストとして仕事の面白さ、つまり人生の面白さに生きようと決心がついた。これが３０代後半になって「遅れた留学」をする

ことになった理由でもある。

自治体の仕事は必ず「役所」以外の人達と接触せざるを得ないし、また「役所」のほかの部局の人達とも一緒に取り組まなければならない。これまで、どの仕事も、自分の「外」の人との、その人々を通した世界に積極的に触れてきた。その結果、私の「名刺箱」に約８００枚の名刺が保存され、その中の３００人ほどはいつでもコンタクトがとれる程度のつきあいを保っている。この「財産」はさらに広がるのは確実であるので、ある程度自分のスペシャリティを決めれば、仕事を通した世界は無限に広がるのではないかと確信しているし、期待している。

私にとって、『まち研』は自分の世界を広げる大きな場の一つであった。これからも『まち研』が誰にでも開かれた、大きな世界の窓口の一つとして続いていくことを心から願っているし、努力していきたいと思う。

るを得ないし、また「役
ならない。これまで、ど
世界に積極的に触れてき
保存され、その中の３０
を保っている。この「
自分のスペシャリティを
うと確信しているし、

場の一つであった。こ
窓口の一つとして続い
思う。

まち研10年

飯島悦郎

まちづくり研究会が活動を始めてから10周年を迎えた。私が市役所に入ったのが昭和54年であるから、ほぼ１年後に始まったことになる。この間、多くの人々としりあい様々な体験をできたことは、自分にとっても有意義なことであった。まち研の魅力、それは、通常業務ではなかなかしりえない人や情報に接することができること、立場を離れて自由な視点で考えることができること、これらのことを通じて刺激をえられると同時に、各方面にネットワークができること等である。

このようなまち研も10年間には何度かの転機があった。ここでは、運営にたずさわった立場からふりかえってみたい。

その１；批判

まち研の活動は定例会と呼んでいる会合を中心にしている。講師を呼んで話を聞き討議をするスタイルは今も変わらない。この定例会に出ていただいた講師の方から「まち研ではなく落ち研だ」との苦言をいただいた。すなわち、リーダーがいない、聞きっぱなしである、基礎的な勉強が足りない、会の目標がみえない、要するに落ちこぼれの仲良し倶楽部だというわけである。

また、月一回の定例会に対し、「間があきすぎる。」「毎回のテーマに関連性がなく、場当り的である。」等の意見があった。

しかし、私達の共通認識には、都市づくり、まちづくりにはあらゆる事象が関係し、常に幅広い視点を保っていたいという目標があった。会を通じてネットワークを広げ、お互いの仕事にいかしつつ、個人の資質の向上を図ることに重点があるのであり、その分、基礎的な部分や、特定のテーマ設定は個人の努力にまかされることになる。

その２；部会活動

そうは言っても、やはり特定のテーマについてより深い研究をしたいという有志グループもあらわれた。一つは、1982年６月にヨコハマで開催された国連アジア太平洋都市会議（ＹＬＡＰ）を契機に活動したアジア部会である。ここでは、外部から専門家を招き講演会シリーズを行い、国際化時代のアジアとヨコハマについて認識を深めた。また、地域経済に着目した地域経済部会もでき

た。地域活性化の実態調査として、大分一村一品ツアーを実現させたりした。さらには、自主研究グループ間の交流をめざす“よこいと”なるグループも出現した。市役所の中にも、かなりの数の勉強会がある。これらは、我々のように職種や年齢を問わず行っているものもあれば、専門職による業務密着形のものもあり、様々なタイプがある。まちづくりには局別縦割りではなくよこつなぎが必要であるが、勉強会も同じ事、勉強会同士の情報交換、交流を深めようという発想から生まれたものである。

その３；再建秘話

このように続けてきたまち研も、出席率がひどく落込んだ時期があった。ソフトシリーズと銘打って福祉等をとりあげた時などわずか数名しか集まらず、惨澹たる状況であった。我々の活動にとって、人集めは常に意識しなければならない課題である。というのは、ネットワークを広げ相互の交流関係の充実をするためには、裾野を広げて門戸を開いていたほうが良いからである。しかし、いくらよびかけてみても定例会に出てくれないことにはどうしようもない。
この惨状を打開すべく再建委員会と称して中心メンバーが緊急に集まったことも一度ならずある。この時はいずれも、少し気分を変えるため、ホテル・ニューグランドのマッカーサールームを借りて、飲みながら、まち研の方向を確かめあったものである。多くの参加者を得ようとすれば、タイムリーで親しみやすい話題を追わなければならない。実際、再開発等のハードなまちづくりの話題はわかりやすいせいか、比較的出席率が高い。一方、テーマがホットでもそれを話してくれる人が役所の公式見解程度のカタい話しかしてくれないのではおもしろくない。なるべく、我々と同レベル、即ち一担当者としての苦労話、裏話などを含めた話をしてもらわなければならない。このような意味で、毎回のテーマ、講師の選定には頭を悩ますわけである。何やら、講演屋、セミナー屋のようである。

その４；高齢化対策

まち研のメンバーも徐々にではあるが高齢化している。発足当初のメンバーも係長になったものも増え多忙になってくる。自分達では当り前と思って話していることが新人には難解であったりして、結果的に新たな参加者を遠ざけているのではないか、高齢化、メンバーの固定化の弊害があるのではないかとの反省も生まれた。多くの参加者を得、つなぎとめることを考えると、新人にも

現させたりした。
なるグループも出
ちは、我々のよう
る業務密着形のも
ではなくよこつな
交流を深めよう

期があった。ソ
しか集まらず、
識しなければな
流関係の充実を
である。しかし、
ようもない。
に集まったこと
、ホテル・ニュ
研の方向を確か
ーで親しみや
まちづくりの話
がホットでもそ
くれないのでは
しての苦労話、
な意味で、毎回
屋、セミナー

初のメンバー
と思って話し
者を遠ざけて
はないかとの
こ、新人にも

魅力のある会にしなければならない。後に続く世代を育てるというと生意気なようだが、ネットワークを広げていくためにも新たな参加者を確保したい。そこで、新人にもわかりやすい発言をしようと申し合わせるとともに、新人勧誘を行うことにした。まちづくりに興味のある職員のほりおこしである。実際、ヨコハマが好きでヨコハマを良くしたいと思っても、巨大な組織に埋もれてしまい、必ずしも思い通りの機会が得られるわけではない。そういう職員をほりおこし、ともに学ぼうというわけである。ここ数年は、４月または５月に新入職員向けのテーマを設定し、新人勧誘を行っている。これは同時に、新人のフレッシュな感覚で高齢化するメンバーに刺激を与えることにもなる。

というわけで、山あり谷ありの運営であったが、そこに楽しみもあり、これだからやめられないまち研である。

お役所組織とまちづくり

㈱横浜みなとみらい２１　田口　俊夫

役所組織はまちづくりに向いていないのでは、と時たま考え込んでしまう。まちづくりとは複雑多岐に渡る分野の事柄や人間たちを総合化して、戦略的に動かすことと理解している。それが役所の縦割り組織では対応しきれない。組織構造が縦割りだけでなく、職員意識も縦割りであるのが大きな問題である。なかには未だに上意下達の職員倫理感にこだわっている人達もいて、仕事を対等な議論を基に進めるという意識に乏しいことも多い。職員レベルでも、たまたま担当した職務の中に、蛸壺的に埋没して、他分野との連携を考えようとしない傾向もある。経験と学習に裏打ちされた的確な判断力を有するのが組織の幹部職員で、限られた担当分野からでも常に広い発想を心掛け、進取の精神を持つのが若手職員だとすれば、当然オープンな議論が可能なはずである。進取の職員を許容するということは、人の多様性を認めるということであり、型にはめないことである。管理することにのみ汲々としているのが今の組織体の現状である。組織とは、仕事を総合的かつ戦略的に進めるものであるとするならば、今の構造はそうなりきれていない。

役所組織は意外と地域にこだわらない。横浜市（ 431㎢, 320万人）といっても広く、個別のまちづくりは比較的小さな地域に限って進められることが多い。その時、地域にこだわらない役人意識が見え隠れするのである。たまたま担当になったからとか、いやいや担当している職員も少なからず存在する。まちづくりへの影響を受ける地域住民の「顔」を見ずに、仕事を機械的に進めることも多い。これでは住民の生活実感に即してまちづくりを考えることはできない。行政施策は地域住民の多様なニーズを的確に把握することが前提となる。仮に地域の中に多種多様な意見を持ったグループが存在するならば、その人達の意識を進んで理解することが求められる。これらの接触の積み重ねから、住民の立場に我身を置いてまちづくりを考えることができていく。役所は常に「公平なる調停者」という独善的意識でなく、一人の生活人としての意識から物事をとらえる姿勢が求められている。これさえ今の役所の組織の構造の中では不可能なことかもしれない。謙虚に人の話しを聞き、真面目に議論する姿勢が求められている。

こうした膠着した組織の中では、動けば動くほど反発を招くことが多い。しかし、やはり動いていないと何も変わらないのは確かなことである。信念に基づいて行動するならば、何かがひらけてくる。そのためには、それを一緒に進めていく横に繋がる仲間を持つことが望ましい。『まち研』の会員には、そういう信念に基づいたネットワークを望んでいる。

田口　俊夫

ま考え込んでしまう。
総合化して、戦略的に
は対応しきれない。組
て大きな問題である。
人達もいて、仕事を対
職員レベルでも、たま
連携を考えようとし
を有するのが組織の
進取の精神を
なはずである。進取
ことであり、型に
今の組織体の現
てあるとするなら

320万人）といって
られることが多い
である。たまたま担
存在する。まち
積的に進めるこ
えることはできな
前提となる。
ならば、その人達
者の重ねから、住
役所は常に「
の意識から物
の構造の中では
議論する姿勢が

ことが多い。し
である。信念に基
それを一緒に進
会員には、そう

「まちづくり研究会事務局として
　　－－　ネットワーキング→まちづくり　－－」

漆原　順一（都市計画局都市計画課）

私が横浜市に入ったのは三年前であるが、「まち研」にもそれとほぼ同時に参加している。配属間もない頃、新入職員研修の担当講師であった田口氏から「イミダスの文章を書いて見ませんか」という誘いを受けた。自分の書いた物が出版物に載ると言う魅力もあったが、社会人になり「知らない世界、新しいことに挑戦し、多くの人と出会い、その中で自分を磨いていこう」という気持ちがあったため、引き受けさせて頂くことになった。やがて、定例会に出席しているうちに「事務局をやってくれませんか」ということになってしまったのである。

こうして、三年間が経とうとしているが、事務局にとって一番気を使うのは、定例会の参加者の確保である。まち研会員は現在、約１７０人おり、毎回の定例会の参加者は普通２５～３０人である。しかし、定例会でとりあげるテーマによって、その数がかなり違ってくるのである。このテーマは、まち研のコアメンバーで決めているが、「まちづくり」として取り上げるべき話題と、集客性のある話題とは必ずしも一致せず、せっかくお願いした講師にも申し訳ない。それゆえ、毎回のテーマを決めるのに、たいへん苦心している。

そういった中で、特にこの三年間で、好評であったものの一つに「旧根岸競馬場スタンドの有効利用を考える」というテーマがあった。これは、「横浜山手の根岸森林公園（根岸競馬場跡地）にある旧競馬場スタンドは、わが国初の競馬場施設であり、ランドマークとして独特な雰囲気を醸し出すとともに、付近の人々に愛されている。米軍による接収の解除に伴う利活用方法が検討されたが、跡地利用のため、全面的な取り壊しという事になりそうである。そこで、我々”まち研”としても、その危機から救うため、有効な活用方法を考え、提案してしまおう。」と言うものであった。実際には、二棟ある内の一棟しか残らなかったが、まち研の見学会を企画し、そこに立ち、目の当たりにした時には、その気持ちがよくなるほどの広さに、「空間の存在」と言うものの素晴らしさを感じていた。

一方、この三年間には、こうした定例会以外にも、「国際居住会議＝横浜会議」や「ＹＯＫＯＨＡＭＡ　ＦＬＵＳＨ」（別項参照）、横浜博覧会でのミニFM放送局「ＹＥＳ　ＦＭ」、「海外まちづくり視察ツアー」といったイベントの企画や協力、参加などもあった。

このような、定例会や、企画に参加することによって、ふだん仕事の中だけでは、決してつながりの持てないような人との出会いが生まれてくる。こうした、人と人とのつながりによって、まち研がつくられているのである。

様々な人との交流を通して、一番感じられるのは、巨大組織の中での「仕事」というものは、必ずしもシステムという意味の組織だけで進められるのではなく、フォーマルであれ、インフォーマルであれ、人と人のネットワークが横糸となり、潤滑油となって動いているのだと言うことである。まちづくりにおいて、こうした、横糸や潤滑油となったり、あるいは起爆材ともなるような、ネットワークを創っていくのが、事務局の仕事であり、まち研の役割の一つでもあると信じている。私自身、人と人のつながりを大切にしているし、それによって生まれるネットワークを「まちづくり＝仕事」に活かせるよう努力して行きたいと思っている。

「まち研と総合的なまちづくり」

石田　正（都市計画局企画課）

私が、“まち研”に最初にであったのは昭和５６年ころだったと思う。

当時、市から東京の財団法人日本都市センターに研究員として派遣されていた私が、土地問題の研究会で委員長をつとめていただいた田村さんに、――そもそも田村さんと知り会えたのは、都市センターに派遣されてからであり、市にいた時の私には教育委員会の人事労務セクションにいたこともあって田村さんは「都市を計画する」という雲の上ならぬ本の上の人だった。――研究会の打ち合わせの後、『今日青山で横浜の若い人達と泊まり込みをするんだけど、一緒にどう？』と声をかけられたことがきっかけであった。

そのときは、なんとなく付き合って、集まっていた人達がレポートし、発表していたことにコメントを求められたりした程度であった。

その後、５８年に市の企画調整室に帰任してから上司に“まち研はオチ研だ”（落語研究会ではなく、おちこぼれの集まりという悪口である）という人がいたりもしたが、当時の私は２，３度講師で呼ばれたりもした。

最近では、アジアツアーには毎回参加したり、雑誌へのまち研紹介の掲載などのお手伝いをしている。

数年間、つかずはなれず、組織としてのまち研というより、そこで仕事で頑張っている人達とのお付き合いが続いているといった方が実にあっているように思える。

それは、ちがった見方をすれば“お勉強だけの受け身の集団”といわれながらも、単なるチャージでなくそこでのストックを仕事で生かすことのできる人達を生み出すことができてきたということではないかと思う。

よく言われるまちづくりの総合性とは、単なる個々の要素の総和でなく１＋１＋１が３でなく５にも１０にもしていくことであろう。

まち研での学習やネットワークが、総合性をもったまちづくりという仕事に生かされるとするならば、そうしたまちづくりへの視点をもち、日常の仕事（与えられた仕事という狭い意味ではなく）においてもそうした意識をもつことが必要条件ではないかと思う。

そのような、人のネットワークが広がることを期待したい。

まちづくり研究会１２０％活用法

港湾局山下ふ頭事務所　遠藤　博

〔交流する〕

『まち研』。変わった集まりである。月１回の定例会を開催し、横浜市政の様々なセクションで行われている事例について直接の担当者に話しを聞く。この定例会だけが決まっていて、ルールなど何もない緩い集合体である。『まち研』を捉える上でのキーワードはＮｅｔｗｏｒｋである。日常的にはバラバラに仕事をしている人達の間に「よこいと」を張り、交流する。『まち研』はこのＮｅｔｗｏｒｋの上に様々な可能性を秘めている。

〔考える〕

多様な部門の横浜市職員などが集うことによって、ここから自分に関心のある領域について小さな勉強会を始めることができる。共に考え自分自身を高めていくことが可能である。まちづくりの情報を得るための読書会から、テーマ研究を行う研究会まで、そのグループの可能性は限りがない。『まち研』のなかにもＹＬＡＰを前後して活動していた「アジア部会」や地域経済面に着目した「地域経済部会」などがあった。

〔歩く・出会う〕

横浜市以外の都市を訪れ、そこで実際に『まち研』を歩き、まちづくりをしている人達に出会って見る。そこから見ると以外に今まで気づかなかったことを発見することがある。「一村一品」の大分ツアーやソウル・タイペイ・ホンコンの海外ツアーを通じて得られた体験は数多い。

〔発表する〕

『まち研』の定例会は発表の場である。自分達が勉強会や研究会で討議してきたことを改めて『まち研』で発表することによって、より質を高めていくことができる。仕事の区切りとして自分の担当している事業についてまとめ発表することもできる。このほか「調査季報」の行政研究や「公務職員研修」などのメディアへの投稿も自分の仕事を振り返ってみるにはとても良い方法である。

〔実践する〕

勉強会や研究会で得られた知識は実践の場で活かされ確かめられて初めて意味を持つ。実践することによって自治体職員は「まち」というフィールドを持ったプロフェッショナルたりえるのである。〔交流する〕〔考える〕〔歩く・出会う〕〔発表する〕ことのすべてが〔実践する〕ことによって「まちづくり研究会」は１２０％活かされていくことができるのである。

事務所　遠藤　博

を開催し、横浜市政の様
者に話しを聞く。この
集合体である。『まち研
常的にはバラバラに
る。『まち研』はこの

ら自分に関心のある
考え自分自身を高めて
読書会から、テーマ研
『まち研』のなか
域経済面に着目した

、まちづくりをして
なかったことを
・アイペイ・ホンコ

研究会で討議してき
を高めていくこと
てまとめ発表す
員研修」などの
方法である。

て初めて意味
ールドを持っ
歩く・出
まちづくり研

すべて『まち研』のおかげです

緑政局緑化推進課　　内藤　恒平

1　『まち研』との出会い

『まち研』との出会いは、1981年12月12日、『まち研』16回目の研究会で「緑のマスタープラン」について報告したことからです。

とおり一遍の説明を終えて下がろうとした私に、田村さんは「プランはわかったが、これから君たちはどうやって実現していくつもりなのか。そこを話してくれなければ」と言われました。

戦略について話しを始めたが、これといった策があるわけではなく、「あらゆる機会を捕らえて努力していく。」という議会もおどろくような抽象的な表現をしてしまい、自分自身恥ずかしい思いをしました。

うまく話しができなかった恥ずかしい気持ちで二次会に出席した私に、田村さんや出席者の皆さんはやさしいねぎらいの言葉をかけてくれるとともに、楽しい、あくなき議論を続けていくのでした。この楽しい雰囲気に魅せられて毎回参加するようになりました。

この後、戦略について考え、どの地域の公園から優先的に整備を行うべきかを明示する「公園候補地調査」をつくりだせたのも『まち研』での議論があったればこそと思います。

2　講演の楽しさを知る。

『まち研』での２回目の報告は、港湾局に異動した1984年 5月30日「日本丸とみなとみらい２１について」で、帆船日本丸の横浜誘致とみなとみらい２１の公園緑地について、同じ局の二人で報告をしました。この時聞いていた女性から「ふだんろくでもないことしか言っていないのに、今日はずいぶんいい話しっぷりだったので見直した。」と言われ、すっかりその気になって、いろいろな場面で講演したりして話す楽しさを覚えました。

3　結婚・これから

カミさんとの出会いも『まち研』で、会員同士の結婚第一号だそうです。いま、６歳の娘と３歳の息子がいますが、１０周年を迎えた『まち研』がさらに飛躍を遂げながら、長く続いて「親子２代のまち研」になってくれることを願っています。

『まち研』１０周年によせて

市民局勤労福祉課　内藤（四夷）恵子

１０周年おめでとうございます。

もう６年近くも間接的にしか参加していない御無沙汰会員ですが、一言。『まち研』創設者のお一人、研修所の大先輩N氏に連れられて初めて参加して、横浜市役所というところには、なんて面白そうな仕事がたくさんあるのだろう！なんて優秀な人材が存在あるいは潜在しているのだろうか！と驚きとある種の興奮を感じたのがつい昨日のことのようです。

各セクションで真面目に仕事をしておられる先輩方のレポートがとても新鮮で面白かったばかりでなく、参加者の違う立場からの物の見方や意見、そして田村先生の解説や批判などが、その都度とても刺激的でした。

必ずしも今はそれぞれの力を発揮する機会に恵まれなくても、いつか、やりたい仕事が手がけられる時が来るという希望を感じ、また、人と人との素晴らしい出会いやネットワークができて、とても元気のでる会でした。

その会の魅力は変わらず若い人々を引きつけ続け、１０年になるのだと思います。

私事になりますが、およそ独身がふさわしいと言われていた自分が、妻となり、２児の母親となるきっかけも『まち研』にあったことを思うと、やはり『まち研』あっての今の自分かなっと感謝しています。

きちんと物事が見え、自分の立場で意見が言える、そんな先輩方の後に続き、また後を続けるべく時間の許すかぎり、これからも係わっていきたいと思います。

都市の課題の変化と『まち研』の役割

都市計画局企画課　五島　哲男

1　見えにくくなった自治体の課題

国際化、高度情報化、高齢化への対応ということが多くの自治体で、これからの課題として取り上げられている。たしかにこの三つのトレンドは、日本が直面している重要なものである。そしてこの流れに対して自治体がどのような政策を打ち出すかということが、これからのそれぞれの都市の発展に大きな影響を与えるだろう。

しかし、この三つの課題を人口急増期の自治体と比べると、その抽象度が高いことに気づく。人口急増期の課題は、学校の建設、ゴミ処理工場の建設、水道の供給能力の向上等具体的で、自治体の仕事として分かりやすいものだった。言い方を変えるなら、この時期は問題が具体的な形をとり、その解決を自治体に迫っていたのである。

考えてみると、国際化、高度情報化、高齢化というのは課題でなく、トレンドを表しているにすぎない。従って、かつての人口急増というトレンドとこれらの三つのトレンドが対応するのである。それでは人口の伸びに応じた公共施設の整備というかつての課題に対応するものはなんであろうか。国際会議場、ＣＡＴＶ、地域福祉システムの整備等々様々な施策が打ち出されている。しかし、これらは施策であって課題ではない。

もう一度人口急増期と比較すると、かつては人口急増というトレンド、公共施設整備という課題、そして具体的な施策があったのに、現在は三つのトレンドと具体的な施策が示されているだけである。

2　課題設定が必要になっている。

三つのトレンドは、都市を大きく変えるだろう。しかし、このトレンドの中で都市の姿や昨日がどのように変化し、何が当面取り組むべき課題になるのかは明確でない。従って今、自治体職員、あるいは都市のあり方を考える人間に求められているものは、課題を設定することなのである。これは自治体が解決しなければならない問題ですよ、と外部から突きつけられ課題に対する施策を作ることだけでなく、大きなトレンドによって生じる変化のうちから自治体が取り組むべき課題を設定し、それを課題とすることについて市民の合意を形成することが求められている。

もちろんこのことは、自治体に課題として取り上げるように迫ってくる問題がなくなったことを意味するのではない。地価高騰により、首都圏ではほとんどの人にとって住宅の取得が絶望になり、東京を含め首都圏の都市の発展に歪

みが生じているという大きな課題を多くの都市が抱えているが、これについてはここでは触れない。

3　自治体職員に求められるもの或いは都市を考えるときに求められるもの。

課題を設定するのには、与えられた課題に対する答えを見つけるのとは別の力が必要である。より広く、より長期に社会構造の変化を見通すことが課題設定には必要である。

さらに、都市がより広い範囲から影響を受けるようになったことも考えなければならない。三つのトレンドの一つである国際化を例に取り上げよう。従来横浜の発展戦略を考えるときには、東京からの影響、首都圏の都市との競争関係くらいを考えていれば良かったが、今では、シンガポールやホンコンとも国際的イベントに関して競争関係にあることを考えなければならないし、横浜の地価高騰がバンコクの生産機能拡大に結びついていることも考慮しておかねばならない。自治体職員は、時間的、空間的にもっと遠くまで見なければならない。

他方、自治体で働くことのメリットである、住民や企業との日常的な接触の中から問題の具体的な形を見つけ出す重要性も依然として失われていない。つまり、一方では国際レベルでの変化を見通し、そしてその変化と毎日の住民や企業との接触の中に現れる個別の具体的な問題とを結びつけて理解することが要求されているのである。しんどい話しである。

4　『まち研』が果たすべき役割

このしんどい状況をこなして行くには、さしあたって仕事の中では会えないような分野の人と意識的に会い、直接は仕事に生かせないような情報を仕入れておくことと、日常的にぶち当たる問題を表面的に処理するだけでなく、それを発生させている構造までも読み取ろうとする努力が重要である。

『まち研』は役所の内部の勉強会からスタートし、最近は企業の人との情報交換にも力を入れ始めている。このような情報源を拡大する方向を強化し、なおかつそれが雑多な情報収拾に終わるのではなく、だんだん時代の変化の構造が読めてくるようにする、という大変高度な役割を『まち研』に求めよう。

もっと遠くまで、もっと未来まで見通し、研ぎ澄まされた感受性を持って日常的な個別の事象に対応できるようになるため、『まち研』を使っていこう。

『まち研』なんてもういらない？

都市計画局都市デザイン室　　大蔭　直子

『まち研』１０周年との事であるが、１０年！も続いていた集まりなのかと思う次第で，今ひとつ実感がないというのが、正直な気持ちである。

市の内で、何かの話しのついでに、「まち研が・・・」という言葉がでると、たいていの職員が部署・年齢・性別を問わず、わけ知り顔になる不思議さと、何らかの暗黙の了解があることに気がついたのは、私が『まち研』に係わり始めた３～４年前のことになる。では『まち研』て何なのかというと、やはりサロン的お集まり会という事か。１０年も経っていながら、未だ発生当初のメンバーが中心的に会を引っ張る立場にある。また１か月に１度の定例会と称する会合も、ただ単に講師の話しをうかがうだけの会である。メンバーの話しを言えば、若手のメンバーがいないわけではない。それぞれの職場での活動や他都市との交流を考え実行しているメンバーも勿論いる。定例会について言えば、発生当初の意識として、まずまちを知るという情報収集・交換の意図があったとも聞く。それは現在も変わっていないことは理解している。

そこに物足りなくはないかという疑問がでてくる。これだけの組織（？）を運営していくこと。単に拝聴する立場だけで良いのかということ。傍観者から当事者へ意識は発生しないのかということ。しかし、これが１０年も続いてきた理由の所以であろうとも考える。何とはなしに、意識を同じくする大勢の中にいるという安心感と充足感。これに総てが集約され、そこから『まち研』が始まっている。キッチキチの現代の中で、何とも貴重な『集まり』なのだろうか。

今一つの疑問として、『まち研』の講師の顔触れは、どうもハードな都市計画関係に偏りがちではないかという事である。『ひと』で『まち』は造られていて、けっして『まち』が『ひと』を造るわけではないと思いたい。（もっとも昨今のシティライフと言う言葉の響きは、その街に合わせた暮らしをしようというニュアンスを感じさせるものではあるが。）もっと、『ひと』を意識した活動を展開しようではないか。そして単に集まって終わりという「まち研なんてもういらない」を合言葉に、一人一人が造り出す『まち研』になろう！！

『まち研』と私

西区総務課　　大島　昭宏

学生時代、環境問題に関心を持ち、水俣へ行きました。地域再生のための有機農法による甘夏みかんづくりを手伝いながら、いろんな人に話を聞きました。沖縄では老人がのんびりとくつろいでいる縁側のすぐ上を米軍の戦闘機が轟音をあげて飛んでいく姿や、住宅地のすぐ裏山に訓練用の爆弾を打ち込んでいる様子（２か月に１回行われている）を見ました。そして、問題を自分の問題として考えるため、やはり自分が住み、将来自分の子供が育つ街で、地域の問題に取り組もうと思い、市役所に就職しました。

ところが、配属された区役所の統計の職場では、毎日１プラス２マイナス１というような人口統計の足し算、引き算の連続。そしてその簡単な計算さえ、間違える私。就職前になる程度予想していましたが、こういうことをあと３～４年続けるのかと思うと目の前が真っ暗になりました。そんなとき、恐る恐る『まち研』に顔を出して見ました。何回か飲むうちに、まちづくりは、単に建物や道路をつくることだけでなく、住んでいる人々や文化的な側面、そして環境も含めた総体的なあると教えられ、区役所にいてもいろいろ考えることはあるなあと、希望を持つことができました。学生時代、一時期、貿易会社で働くことを考えていました。市役所で働くことは、物理的に活動の範囲は狭くなると思っていましたが、逆に自分の世界が拡がったと思っています。

また、『まち研』を通して様々な機会に恵まれました。韓国のソウル市役所都市計画課を訪問し、学生時代に訪れた韓国を違った視点から見ることができました。その他、国際居住年会議に伴う勉強会、そして就職と同時に半ば諦めかけていた留学の夢。

『まち研』の活動を通して得たことを、少しでもこれからの自分の仕事に活かしていきたいと思っている今日この頃です。

祝・・・『まち研』１０周年

都市計画局企画課　土井　一成

現代的ネットワーク組織の老舗、まちづくり研究会の１０年間の活動に敬意を評するとともに、今後のさらなる発展を祈って、乾杯！

私は年に１～２回しか姿を見せない幽霊会員である。それにも係わらず、毎回きちんと機関紙を送っていただき、運営委員の人達には感謝の言葉もない。

1980年４月に横浜市に入り、その年の夏からまちづくり研究会には参加している。つまり、私の公務員生活もまちづくり研究会とともに１０年を迎えたことになる。この間を振り返ると、ほんの短い時間に感じるが、個人的には結婚をし子供も２人できたし、初々しい新人職員もいつのまにか口うるさいベテラン係長になってしまっている。横浜のまちづくりも同じように1980年３月末日の三菱重工との協定締結で本格的にスタートしたみなとみらい２１事業をはじめに、人口３２０万人の巨大都市として様々な展開を見せている。１０年ひと昔、思いのほか世の中の速度は速いものである。

昨年１１月９日、ベルリンの壁が崩壊した時、たまたま海外研修でヨーロッパに滞在していた。ブタペストのホテルのレストランで、パリのカフェで、現地の人からＥＣ統合やドイツの再統一について、そして日本の輸出攻勢や海外不動産投資について意見を求められた。なんとかアルコールの勢いとへたくそな英語で切り抜けたが、この歴史的な瞬間から世界の動きは更に加速度的に速まっており、２１世紀に音をたてて突入しようとしているようだ。

これまでの既存の座標軸が大きく揺れ動いている現在、何を行うにも個人個人がしっかりと足もとを見つめ、アイデンティティを確認することが重要になると思う。自分自身、家族、住む地域、都市ヨコハマ、日本、アジア、世界・・・自らの立つ位置を明らかにする努力が必要である。そして、これまでの「草の根」のように単に下のレベルから連帯して根を張るばかりではなく、個人から都市、都市から世界へ、などといったような意識レベルの大ワープを行えるスピードを持つことが求められてくるだろう。

わが国のまちづくりの状況を振り返った場合、不毛の土地政策と民活都市開発の競争状態の中で、アイデンティティの基礎となる「住む」という行為は無視され、「都市の個性」はしだいに消滅し画一化されている。また、具体的なまちづくりの事業についても、都市問題へのアプローチというよりも金銭的価値があくまで重視され、また、様々な情報の坩堝の中でかえって物が見えず、アジア、世界の中での時代的価値はほとんどかえりみられない状況ではないだろうか。このようなまちづくりはいくら研究しても仕方ないだろう。

以上、これからの『まち研』に求めたいものは、情報活動だけでなく、会員個人のアイデンティティある生活観や仕事観の表現としてのより地に足のついた議論と、それに基づくネットワークの再構築、そして個人―都市―世界という縦横無尽のワープ活動である。また、さらに会の中核となってきた仲原氏や田口氏らも１０年の年齢を重ねてきたので、思い切った若い感性の参加により会を揺るがす刺激を期待したい。

新人感想

鶴見区戸籍課　鈴木　政憲

横浜市役所に入って、早くも一年が過ぎようとしている。（『まち研』には１年半になる。？）新人職員としては、日常業務を人並みにこなすために、毎日てんてこまいである。従って、言い訳になってしまうが今年度の後半は定例会にも不参加が多くなってしまった。（世話人の方々には御迷惑をおかけしました）戸籍係に配属され、直接まちづくりと結びつかない職場で、当時はちょっと残念でした。人々の生活をこうも管理すべきかなとも思うが、戸籍は、公共の福祉や税金等の地方自治体の基礎となる住民基本台帳の土台となっているのである。機関委任事務であり、すべてが細かく規定された職場ではあるが、横浜市地方自治の土台として、また窓口での多くの市民との触れ合いを大事にして、これからもしばらく戸籍係で頑張ります。皆様よろしくお願いいたします。

東欧小報告

総務局行政管理課　　山梨　竜一郎

『まち研』の１０周年おめでとうございます。

私は、１９８９年の暮れから今年の正月にかけて訪れた東欧の様子を述べたい。

まず、東ベルリンでは、西側を訪れようと「壁」の前に列をなして出国許可を求める人々が目を引いた。

深夜のブランデンブルク門を東側から見た。厳寒だというのに、門の周りに若者がたくさんたむろしている。よく見ると西側への出国手続きも行われていて、その前に並ぶ者もいる。西側からは壁を「採掘」するハンマーの音が響く。昨年の話題をさらった「壁」を砕くこの槌音！ベルリンの人々の心の痛みを凝集したような音が寒空に響くのは、その後もなかなか耳を離れなかった。

次はライプツィヒ。「第九」を指揮したクルト・マズア氏への惜しみない拍手を耳にした後、新年を祝う街じゅうの打ち上げ花火を見ていると、東ドイツの人々にとって９０年代にはたいへんな期待が寄せられ、いつもの新年とは違う思いを味わっているのでは、と思う。

東欧の生活必需品不足は申告だが、プラハの街だけは、店先の缶詰、菓子など、それなりに種類も数もそろっていた。「旧市街広場」では、ヤミ両替を求める人を振りはらうのに面倒なくらいだ。警官隊との衝突で死んだ学生を悼み街角にろうそくが供えてあり、その火は絶えることがない。

それにしても新大統領の人気は相当なもので、街じゅういたるところ、観光地にまで、「ハベルをお城へ」（すなわち、大統領に）というポスターが見られた。平静に戻り、買い物客であふれる夕刻のバーツラフ広場は目に焼きついている。「百塔の街」といわれるこの美しいプラハに、かつて戦車が進入したのは、ひどく野蛮な行為に思われた。

最後の訪問地はウィーンだった。店先にあふれる電化製品、街じゅうの広告・看板、高い物価など、今回の旅行では始めて接するものばかりで、「西側へもどった」ことを肌で感じられた。

ヨーロッパには、１０００年以上の歴史が、そのまま「まちづくり」へつながっている都市がたくさんある。横浜はやっと百数十年。都市の歴史としてはまだ赤ん坊のようだ。私たちはそこにどんな「まちづくり」の種をまくことができるのだろう？　幼少の頃から道を誤らせたくないものだ。

『まち研』とのかかわり

都市計画局金沢八景駅東口開発事務所　松下　由佳

まちづくり研究会の所属会員の数の多さと幅の広さに現れているとおり、各会員と「研究会」の関わり方は、人によって様々なのだと思っています。私はお話しをさせていただく幸運に恵まれましたが、その話自体が下手だったとか何かということより（勿論それもありますが）、私自身が考えていることに整理をつけるのに役立ちまして、まちづくり研究会との関わり方にはこんなものもあるのだと感じることができました。

私の関わっているのは、区画整理、再開発事業の初動期で、地元権利者のうちで権利を整理して一戸建て住宅を取得するのが望ましい人がぽつりぽつり移ってきている、通称「住宅用代替地」の景観誘導についてです。開発のアミがかかってしまい、やむなく（？）権利調整をした人々に、今度は、壁は、屋根は、塀はこうしましょう、とさらに御協力を願うと言えば聞こえは悪いのですが、地価も高く交通も便利な駅前に運良く住んでいたのだから、まちの「顔」になるという自覚くらいは、是非持っていただきたいのです。

1989年春には、行政はどのような姿勢をとるべきなのか、などを考えており、自分の置かれている立場の全貌が見えているつもりになって話をしていたのですが、今思えばそんなことはなく、当時わからないのが当然だぐらいに思っていたことが、その後いろんなことがあるうちに目の前のうろこがはがれ落ちるようによく見えるようになってきました。よく言われることですが、「何をするべきか」の前には「何をなし得るのか」があり、そこに至るには、表向きにはあまり言いたくない自分の側の弱みとか過去の経緯とかを知っていなければならない、と身を持って経験しました。研究会の時、答えられなかった質問の答えも見つけられたと思います。研究会で話題になった時にもっと掘り下げていたら答えに至るのが早かったかも知れません。というより、そうすることがこの時の会の主旨だったのでしょう。この住宅用代替地のことは、今では一応筋の通ったシナリオになっていますが、もう一年たった時どう感じられるかは、今はわからないことです。

誰かが自分の仕事のことを話すのを聴くとき、疑問に思ったことは、怖いもの知らずとそしられるのを恐れずに素直になげかけてみるのも大切かと今では思っています。

まちづくり研究会の、１０年間の活動を支えてきてくださった方々と、メンバーの皆様に、深く感謝申し上げます。

豊田市から『まち研』に参加して

豊田市福祉課　伴　幸俊

私が、『まち研』のことを知ったのは、８９年１月地方自治職員研修という月刊誌に、全国自治体の自主研究グループを紹介するシリーズで、横浜市の『まち研』が掲載された時のことです。その頃、私は豊田市のごく小人数の勉強会で、まちづくりを語る（愚痴る？）機会はありましたが、『まち研』発足からヨコハマ・フラッシュ、本牧ＣＡＴＶなどの記事を目にしたとき、「何だこれは！こんなことが本当にやれたのか？」という衝撃にかられました。とにかく一度会ってみたい、話してみたいと思い、８９年７月、石田さんをはじめ、田口さん、仲原さん、内藤さんに会うことができました。皆さんの話しからは、まちづくりに対する熱意と自信を感じました。しかも楽しんでそれをやっている。それはグループでまとまって何かをやろうというより、自己の仕事の中で、自分を磨きながら、自分のやりたいことをやっていくというもののような気がしました。

その後、『まち研』に参加し、他のメンバーから話しを聞くなかで、横浜市という巨大な組織（職員数は豊田市の１０倍）において、『まち研』のメンバーが『まち研』に何を求めているのか、まちづくり研究会とはどうあるべきかなど勝手に創造したりしています。・・・『まち研』の二次会で、一部のメンバーがお互い名刺を交換していましたが、豊田市のような小さな都市では、あまり考えれない光景でした。

私自身、横浜市の『まち研』を知ったことが、自分の中で自治体職員として、ひとつの大きな起爆剤になっていることは事実です。今年で『まち研』が十周年を迎えるとのこと。ここまで、引っ張ってきたコアメンバーの努力に敬服するとともに、今後も継続してユニークな活動を期待しています。

まちづくり研究会名簿

企画調整機能　自治体タテ割り行政を実質的・有機的結び総合調整するヨコ糸的役割もち、これにより自治体の主性・総合性・実践性を発揮させ機能のこと。戦略プランナー、プロデューサー、プロモーター、コーディネーター、デザイナーなどの能力を有する総合的なプラン組織である。現在この名称の組織を持つ自治体はいくつかある実態はさまざまである。財務・事部門、都市計画部門から独立せることによって初めて機能が分に発揮される。

まちづくり研究会名簿

氏　名	所　属　等	電話番号
相本　長武	神奈川区建築課	
青木　淳	環境事業局浄化設備課	(671)2550
安島　馨	都市計画局土地調整課	
天川　淳	千代田化工建設㈱	
荒木田　百合	総務局国際課	(671)2078
荒　伸直	泉区区政推進課	(863)2331
荒川　義則	都市計画局金沢八景駅開発事務所	
有賀　聖加	総務局人事課	
飯島　悦郎	建築局宅地第一課	(671)2948
石田　正	都市計画局企画課	(671)2021
石橋　雅昭	港北区市民税課	(543)1212
石井　保	建築局宅地第一課	
石津　啓介	建築局企画指導課	
石井　邦道	衛生局市民病院庶務課	
市川　一弘	衛生局南部市場食品衛生検査所	(321)5758
出縄　隆	企画財政局横浜博覧会協会	
伊藤　薫	緑保健所保健課	
伊東　貴	港南区市民課	
井上　雄太	神奈川区福祉課	(323)1212
井上　紀子	衛生局栄保健所保健課	
今川　晋也	東京ガス	
牛島　幸織		
漆原　順一	都市計画局都市計画課	(671)3510
江口　正彦		
榎本　裕久	東急エージェンシー	
江村　恵子	総務局電算システム課	(671)3811
遠藤　博	港湾局山下ふ頭事務所	
大木　節裕	企画財政局財政課	(671)2237
大矢知　敏子	総務局職員研修所	(671)2165
大蔭　直子	都市計画局都市デザイン室	(671)3863

氏　名	所　属　等	電話番号
大谷　康晴	都市計画局都市デザイン室	
大村　崇夫	総務局総務課庶務係付	
大貫　一幸	企画財政局高齢化対策室	
大島　昭宏	西区総務課	(322)1212
大島　正子	緑政局建設課	(671)2651
小笠原　泉	都市計画局開発計画課	
緒賀　道夫	緑政局建設課	(671)2651
小川　泰生	環境事業局北部工場	
奥村　誠	旭区建築課	
小沢　朗	都市計画局都市デザイン室	(671)2023
小野　かすみ	緑政局緑化推進課	(671)2646
小原　威司	緑政局緑政課	(331)2016
柿沼　友樹	建築局企画管理課	
加藤　美奈	衛生局	
金木　昭人	民生局厚生課	
金子　武志	港湾局設計課	(671)2891
上島　幸隆	市民局広聴課	
川崎　圭子	港湾局振興課	
川人　正憲	都市計画局調査課	
川手　光太	建築局住宅計画課	
菊池　盛夫	衛生局港湾病院庶務課	
北村　圭一	緑政局計画課	(671)2644
木村　裕毅	都市計画局みなとみらい２１	(671)2032
熊野　雅章	建築局住宅計画課	
小池　恭一	経済局⇨横浜国際観光協会	
小泉　麻子	鶴見区保護課	(503)1212
河野　真一	総務局国際課	(671)2078
小島　純	西区庶務課	
三島　哲男	都市計画局企画課	
[illegible]　[illegible]子	水道局旭営業所	
[illegible]　[illegible]	鶴見区市民税課	(503)1212
[illegible]　[illegible]	日本経済研究所	
[illegible]　[illegible]	保土ヶ谷区保険年金課	

氏　名	所　属　等	電話番号
小室　敏勝	瀬谷区建築課	
斎藤　龍男	企画財政局企画調整室	
斎藤　由実子	都市計画局都市デザイン室	
斎藤　郁男	旭区建築課	
斎藤　健	環境事業局業務一課	
斎藤　貴子	総務局総務課	
斎藤　聡美	㈱ニュース	(671)2082
坂和　伸賢	港南区建築課	
佐藤　誠		
佐野　浩	企画財政局財政課	
志村　正	都市計画局総務課	
下山　尚一	経済局中央市場本場庶務課	
珠玖　磨理	教育委員会体育課	
城内　孝元	泉区区政推進課	
白井　一夫	都市計画局みなとみらい２１	(863)2331
白井　幹子	鶴見区総務課	(671)3501
神宮寺　哲男	経済局中央卸売市場本場庶務課	
鈴木　政憲	鶴見区戸籍課	
角　妙子	企画財政局企画調整室	
諏訪部　博道	経済局工業課	
諏訪　直人	緑政局計画課	
関口　昌幸	金沢区課税課	
大徳　努	磯子区総務課	(782)1212
高橋　和也	都市計画局都市計画課	
高安　宏昌	鶴見区区政推進課	
高橋　保夫	磯子区保護課	
高橋　正也	都市計画局戸塚駅周辺再開発事務所	(753)1212
高橋　衛	中区建築課	
田口　俊夫	都市計画局⇨㈱みなとみらい２１	(221)0021
竹内　義明	市民局広報課	(671)2332
竹前　大	総務局行政管理課	
竹田　良雄	緑区市民課	
武部　真人	緑政局計画課	(671)2647

氏　名	所　属　等	電話番号
田中　美穂	衛生局緑保健所保健課	
玉村　慎一	都市計画局開発計画課	
玉井　桂子	神奈川新聞社	(671)7465
田村　明	法政大学教授	(431)2016
対馬　まり	建築局企画指導課	
津田　祐孝	消防局施設課	
続橋　宏昭	緑区建築課	(933)1212
角田　浩之	衛生局愛児センター事務室	
角田　広行	都市計画局港北ﾆｭｰﾀｳﾝ建設事務所	
寺田　芳朗	山手総合計画研究所	(662)4836
土井　一成	都市計画局企画課	
土肥　雅樹	交通局新羽事務室課	(545)2526
徳田　文男	総務局職員研修所	(671)2165
内藤　恒平	緑政局緑化推進課	
中川　理夫	建築局住宅計画課	
中野　創	都市計画局都市デザイン室	(671)2023
中野　裕也	港湾局埋立工事課	(671)2672
中道　彰子	市民局住居表示課	
仲原　正治	金沢区福祉課	(782)1212
永井　潤	(財)横浜市シルバー人材センター	(651)2444
長井　幹	旭区建築課	(953)1212
灘上　文彦	栄区戸籍課	
野田　邦弘	経済局消費経済課	
野本　大作	南区保護課	
野谷　淳一	環境事業局施設課	
服部　達己	凸版印刷(株)	
花園　勝	横浜市海外交流協会	
馬場　宏之	民生局なしの木学園	
羽太　良一	南区建築課	(742)1212
林　博巳	総務局国際室⇨ＩＴＴＯ	
治田　淳	都市計画局上大岡駅周辺再開発事務	
春木　聡子	戸塚区固定資産税課	(881)1212
坐　幸俊	豊田市福祉課	0565(31)1212

氏　名	所　属　等	電話番号
檜垣　明弘	港湾局本牧オフィス	(623)8231
日比野　政芳	栄区区政推進課	(894)8331
平山　実	緑政局建設課	
広瀬　明子	都市計画局企画課	(671)2024
藤又　衛	都市計画局総務課	(671)2656
藤塚　万里子	下水道局経理課	
藤田　明子	戸塚区建築課	(881)1212
藤井　康次郎	建築局企画管理課	
藤田　幸三	都市計画局都市計画課	
古田　智久	建築局宅地第一課	
保坂　研志	鶴見区建築課	(503)1212
細山田　幸子	都市計画局港北ﾆｭｰﾀｳﾝ事業調整課	(671)2682
堀　勇良	総務局横浜開港資料館	
堀切　安二	旭区建築課	(952)1212
増田　実	アルカディア　アルキテクツ ｵﾌｨｽ	
又坂　匡	公務職員研修協会	03(230)3701
松嵜　尚紀	都市計画局企画課	(671)2022
松原　忠敏	旭区課税課	
松下　由佳	都市計画局金沢八景駅開発事務所	
松岡　文和	総務局教育課	
松原　忠敏	旭区課税課	
松村　浩美	企画財政局東京事務所	
松島　義一	集英社出版部『イミダス』担当	03(230)6050
南　学	総務局⇨ＵＣＬＡ留学中	
宮本　一	戸塚区戸籍課	
三宅　建也	鶴見区建築課	(503)1212
村田　尚子	総務局電算システム課	
八木沢	横浜市海外交流協会	
柳川　俊一	都市計画局金沢八景駅開発事務所	
山崎　隆弘	経済局貿易観光課	
山梨　竜一郎	総務局行政管理課	
山口　嘉隆	都市計画局都市計画課	
山本　和弘	建築局宅地第一課	

掲載紙抜粋

ライトアップ　都市にある歴史的建造物、モニュメント、噴水、庭園、橋、街路等を照らし出し、夜の都市景観を演出すること。都市の照明は、フランスのルイ一四世時代に、安全性、生活時間や空間の拡大と共に当初から都市景観の演出を目的として始まった。電力による本格的都市照明は、一九二〇年代にパリに始まり、三〇年代には、電力会社の支援によりヨーロッパ各地に広がった。日本では、商業施設の照明は過度ともいえる状況であるが、欧米のように都市の夜景演出を目的とした照明方法は取られなかった。しかし、近年各地で夜の景観的魅力の創造と賑わいづくりのためにライトアップの実験的な試みが行われ、社会に定着しつつある。闇に浮かぶ歴史的建造物の荘厳な美しさは、人々に新たな感動を与え、この効果を歴史的建造物保存運動に結びつける成果を上げている。しかし、建物と街並みとの関係を無視したもの、一律的な照明技術により安易に行われているもの等、都市の景観を無視したものもある。（『都市景観照明』）

連載1回

OUTPUT

"まち研"誕生

自治体職員自主研究グループ

まちづくり研究会（横浜市）

OUT PUT ❶ 「都市問題を考える会」発足

「自治体には思ったよりも多くの仕事がありました。このまま各職場に散ってしまえば毎日の仕事の中に埋もれてしまうかも知れない。横浜市の抱えている問題を都市問題として定期的に勉強していく会をつくろう……。」

昭和五二年四月、この年の横浜市の新規採用職員の研修最終日に、研修生全員の前でマイクを握った南はこう呼びかけ、これに賛同したメンバーにより「都市問題を考える会」が発足した。

「都市問題を考える会」は、この年の大卒新規採用職員一二〇名中五〇名という多数の参加を得て活動を開始し、職員研修所が新たな研修メニューとして設けた「行政問題自主研修」の第一号ともなった。"半年続けば立派なもの"と言われながら、この会は翌年の採用職員へのはたらきかけや、分科会の設置などにより三年間続き、"まち研"の母体となったのである。この会が予想以上に継続出来たのは、二週間に一度の割合でニュース発行を行ったこと、一〇名程度のコアグループを形成したこと、さらには合宿やハイキングなど多様なメニューを用意したことなどが挙げられる。このノウハウは、後に"まち研"に生かされることになる。

OUT PUT ❷ "まち研"誕生

「都市問題を考える会」も三年を経て、同期採用の職員による研究会という限界で、タネ切れという悩みを抱えていた。同じころ、職員研修所に在籍していた仲原（現在民生局係長）は、自分の仕事に悩んでいた。研修がお仕着せで主体的に職員が動くという場面がない。研修を受ける側も上司に言われてイヤイヤ来たり、研修マニア的に来るような人が目立つ。

そうした折り、当時市の技監であった田村明氏（現在法政大学教授）を訪ねた。横浜のまちづくりについて、連続講座をしてほしいというのがリクエストだった。面白い研修をつくりたい。どうしても「まちづくり」の基本的なことを職員に教えて欲しいと熱っぽく語ったが、即答は得られなかった。何日か経って、もう一度お願いに行くと、「やってもいいよ。ただし、研修生の数は三〇名程度、人選は僕に任せて欲しい」ということであった。一応その場は了承し、手続きを進めたが、仲原は"研修主体はこちらだ"という気持ちがあり、人選については勝手に行い、後からお目玉を食った。この時点では、これが"まち研"誕生の布石になっていたということに仲原は気付いていなかった。

この連続講座開催に先立って、南は田村氏に呼ばれ「都市問題を考える会」のメンバーが主体的に講座に参加するよう勧められ、同時にこの講座の意図を打ち明けられた。それは、田村氏の横浜での都市プランナーとしての実践をまとめるとともに、今後市役所内に「まちづくり」を考えていく研究会を発足させ、インフォーマルな部分から役所の縦割り機構に横糸を張り巡らそうという考えだった。この講座を企画した仲原とこれに参加した南は、研修の最終日に参加者に対して「まちづくり研究会」の発足と参加を呼びかけたのである。

こうして昭和五五年三月四日"まちづくり研究会"は誕生した。運営については「都市問題を考える会」を中心にコアメンバーを固めて討議しながら企画を立てていくよう、参加型の運営方式をとった。また、毎回の報告と討論の内容、次回の日程とテーマをメンバーに通信として配布するなど、広報にも力を入れた。更に、口コミで区役所等の若手職員への呼びかけを行い、一年目で一〇〇人近くの職員が通信を受け取るようになった。研究会の企画も、可能な限り現場の見学を実施するなどバラエティに富んだものとしていった。もうすぐ一〇回目の春を迎えようとしている。

OUT PUT ❸ "落ち研"といわれながらも——。

"まち研"の発足の当初の活動は「お勉強会」であった。毎回、講師を呼んで話を聞き質疑応答を行うというスタイルで、これは基本的には今も変わっているわけではない。しかし、"まちづくり"を標ぼうする会に相当な期待をもって(?)みる講師の一部などから、「おまえたちは、お勉強だけして何もできない落ちこぼれの研修会即ち"落ち研"だ」などというお叱りを受けることもあった。まち研に対する批判・助言は次のようなものである。

☆基礎的な知識に欠ける——憲法、行政法等の基礎的理解、あるいは都市計画等の都市に関する法的枠組みに対する理解が不足している。

☆リーダーがいない——責任者がいない。

☆仲良しクラブ・同好会である——表面的な意見交換はあっても、突っ込んだ議論がされない。

☆目的・目標が明確でない——会としての目標が見えない。

☆聞きっぱなしである——講師の話を聞くのは良いが、それについて参加者個人がどう考え、どうしたいかという反応がない。

コアメンバーの共通認識には、都市づくり・まちづくりにはあらゆる事象が関係するので、つねに幅広い視点を持っていたいということがあった。あまり、テーマ、対象を限定せず、偏りを避けたいという意識である。その分、明確な目標、リーダーシップを欠いたまま、流れてきたことは否めない。また、会を通してネットワークを広げ、お互いの仕事に生かしつつ、個人の資質の向上を図ることに重点があるのであり、それが目標でもあったのである。結果的にはこれらの課題を引きずったまま今日に至っているが、基礎的な部分は個人の努力とし、あまり堅く考えずにやってきたのが良かったという面もあるように思える。

様々な批判にもめげず、会を重ねていくうちに、月一回の定例会に対し「間があき過ぎる」「テーマに関連性がなく、場当たり的である」といった意見が出始めた。とはいえ、先に述べた基本的なスタンスの中で関連するテーマを絞り、短期集中的に行うことは無理があった。

しかし、まち研のメンバーの中には定例会とは別に、テーマを絞り、より深い研究をしていきたいという有志グループもあらわれた。一つは、五七年六月に横浜で開催された国連アジア太平洋都市会議（YLAP）を契機に活動したアジア部会であり、いま一つは、地域経済部会であった。

OUT PUT ❹ 再建に継ぐ再建

まち研の活動を記録の上だけでみると、スムースに活動が展開されているかのように思われるが、現実は日々再建といったことも少なくなかった。出席率がひどく落ち込んだ時期もあった。ソフトシリーズと銘打って福祉等をとりあげた時など、わずか数名しか集まらず惨たんたる状況であった。まち研の活動にとって、人集めは常に意識しなければならない課題である。というのは、ネットワークを広げ相互交流の充実を図るためには、すそ野を広げ、門戸を開いておくことが必要であるが、いく

DATA

横浜市職員の自主研究会。昭和55年3月発足。自治体の仕事を通じて横浜のまちづくりを考えて行こうという趣旨から、局区・職種を超えた幅広いメンバーで構成されている。原則月1回の定例会の他、合宿、イベント等も行い、最近ではソウル市訪問、台北市訪問、ヨコハマフラッシュ（手づくりの文化イベント）を行った。途中から市職員以外にも呼びかけており、現在会員数は約150名。田村明氏（法政大学教授）が顧問をしている。

ら呼びかけてみても会に出席してくれないことにはどうしようもない。また、毎回のように詳細な案内を会員に発送するという苦労も報われず、がっくりである。

こうした〝惨状〟を打開すべく再建委員会と称して、コアメンバーが緊急会議を開くことはしばしばであった。こんな時には気分転換に、ホテル・ニューグランドのマッカーサールームを借りて、飲みながら、まち研の方向を確かめあったものである。

多くの参加者を得ようとすれば、タイムリーで親しみやすい話題を追わなければならない。実際、再開発等のハードなまちづくりの話題はわかりやすいせいか、比較的出席率が高い。一方、テーマがホットでも、それを話してくれる人が役所の公式見解程度のカタい話ししかしてくれないのでは面白くない。一担当者としての苦労話、裏話などを含めた話をしてもらわなければならない。したがって、毎回のテーマ、講師の選定には頭を悩ますわけである。何やら、講演屋、セミナー屋のようである。

OUT P
❺
"お勉強"から
のトライ―Y
へのまち研

YLAP（ワイラップと呼ぶ）とは、横浜市と国連の共催で昭和五七年六月にヨコハマで行われた「国連アジア太平洋都市会議」の愛称で、「アジア太平洋地域における自治体の都市づくりに関する横浜国際会議」という副題が会議の目的を言い当てている。

このYLAPの場で、インフォーマルな〝まち研〟の活動が初めてフォーマルな市の活動と融合し、かつ、相乗効果を発揮したのである。この国際会議の趣旨は、開発途上のアジア太平洋地域で、国と国の間ではなく、現実に地域の行政に責任を持ち、まちづくりを進めている自治体同士が相互に情報を交換しあい、まちづくりの主体性を高めることにあった。当時としては、自治体が主催する国際会議はあまり例がなく、とりわけ、まちづくりに関する会議は皆無といってよかった。海外二八カ国から一二〇人、国内を含め一〇〇〇人以上の参加者を集めて、七日間にわたって繰り広げられた会議は迫力に満ちていた。この会議を企画し、推進した者たちの心には、様々な意味で自治体としての[illegible]いう期待がゆらめいていた。

ところで、当時、アジア地域の情報は、国単位のものはあっても、都市ベースのものは極めて少なく、ましてや地方自治体といえるものがどの様に存在しているのかさえ明らかでなかった。まずは、会議の準備段階として、各参加予定都市の状況を現地に飛んで調べる作業と、各都市から報告書の提出を求める作業が行われた。こうして集められた生の資料を〝まち研〟のメンバーで自主的に翻訳し、また、留学生や在日のビジネスマンの方々のつてを頼って講師にお願いし、会議開催の半年前くらいから毎週のように〝まち研〟としての勉強会を開いた。テーマが今までになかったものであったためか、通常の定例会以上の参加者を得て、熱気を帯びたものになっていった。勉強会の最終日には、コネクションのあるレストランで格安料金で、大パーティーを開き、一〇〇人以上が参加した。参加者の中には、多くの留学生や在日外国人の方々もおり、アフリカ人の青年からは、外交官の父親が本国の政変で亡命さわぎになっているという話がでるなど、世界情勢の動きを直に感じることが出来た。毎回の勉強会の場所は、YLAP事務局メンバーの好意により、事務局の会議室を借り[illegible]部署の職員たちが、職務時間外に自主的に参加したことは意義深いことであったと思う。

これらの活動は当初は非公式なものであったが、当時市の職員研修所には何人か〝まち研〟メンバーがおり、管理職にも理解者がいて、何とかして若手職員の熱意を公式の場にもリンクさせようと努力がなされた。その結果、公式な研修事業の一環として会議本体に参加枠が確保された。当然、会議のすべての分科会を含め、各種セレモニー、市内観光など様々な場に参加できるようになった。

ところが、会議が間近になり参加予定者数の確保を心配するあまり、招待状が乱発された。そのため、研修生たちの参加枠が削られ、多くの場から締め出されるという事態になってしまった。それでも、最終的には、歓迎レセプションなどにも事務局員の指示で、研修生たちの入場は事実上認められることとなった。レセプションで最後まで残って各都市からの参加者（中には市長クラスもいた）とタドタドしい英語で話をしていたのは、これら若手の職員であった。また、国際会議にはフォーマルな場だけでなく、インフォーマルな場があってこそ本当のホスピタリティが生まれる。〝まち研〟メンバーの多くは、海外からの参加者を任意で市内案内したり、家に招いたりして友好を深めていった。自分達の少ないサイフから精一杯のもてなしに努めたこれらメンバーの心意気には頭が下がる思いである。今でもこの時の貴重な体験は、多くの職員の脳裏に鮮明に残っているようである。

このYLAPの後には、継続的にアジア太平洋の都市間の自治体ベースの交流が行われるはずであった。不幸なことに、近視眼的な判断により、一時市の公的な活動は中断された。そのため、〝まち研〟の内部に〝アジア部会〟と称するグループが結成され、草の根的にYALPの成果を守り育てる活動が続けられた。その後、〝まち研〟メンバーのこのような活動を背景に、都市間の公的な技術交流プログラムも復活され、国際化への具体的な施策の展開の足掛かりになろうとしている。（つづく）

◀昭和57年「国連アジア太平洋都市会議」のパンフ

●まちづくり研究会活動記録

(No)	(テーマ)	(年月日)
	(「まちづくり」研修	80.1.29～2.7)
	(まちづくり研究発足	
1.	地区カルテ	80.3.4)
2.	金沢シーサイドタウン	4.8
	(現地見学)	5.21
	(第1回日本文化デザイン会議参加	6.5
3.	保土ヶ谷区の将来	7.3～4)
4.	都心臨海部総合整備計画	7.9
5.	地下街のガス爆発	8.4
6.	地区カルテ	9.4
7.	産業廃棄物資源公社の意義と背景	10.8
	(埋立地見学含む)	11.12
8.	戸塚センター利用状況	12.23
9.	総合計画(21Cプラン)	81.2.10
10.	横浜市の高速道路	3.12
11.	横浜の産業構造の課題と展望	5.14
12.	文化行政と美術館	7.1
13.	まちづくりとは―バクダット報告	8.13
14.	市民が期待する広報紙とは	9.24
15.	国際障害者年の意義	11.5
16.	緑のマスタープラン	81.12.12
17.	新本牧地区計画	82.1.20
	(合宿	2.20～21)
18.	YLAPの意義と職員の主体的参加	4.2
19.	よこはまのまちづくり	5.31
	(YLAP自主研究会4.20から7回	6.9～16)
	YLAP参加	
20.	土地利用の制度と問題点	6.24
21.	地区整備計画の作成について	7.23
22.	山手地区のまちづくり	9.20
23.	新交通システムの現状	11.10
24.	地域性と空間的広がり	12.18
25.	神奈川区のまちづくり	83.1.25
	(合宿―都市ヨコハマをつくる	3.12～13)
26.	みなとみらい21について	4.22
27.	よこはまの主体的経済発展をめざして	6.8
28.	横浜市婦人問題懇話会提言について	7.8
29.	横浜市の老人問題	8.26
30.	「青少年に未来はあるか」	10.24
31.	MMフェスティバル顧末期	41.28
32.	地方自治体における国際化と国際機関	83.12.24
	(総会、公開講演会)	
33.	戸塚駅周辺開発について	84.2.21
	(合宿―土地問題と土地政策	3.3～4)
34.	ファッション都市ヨコハマをつくる	4.18
35.	日本丸とみなとみらい21について	5.30
36.	大分県の一村一品運動	6.29
37.	横浜港と経済の結びつき	8.30
	(大分一村一品ツアー	9.21～23)
38.	大分県一村一品運動見聞記	11.26
39.	アジアの自治体は今……	12.26
40.	「ひかり号新横浜停車は ヨコハマに何をもたらすか」	85.3.14
41.	東京都横浜市or首都横浜？？ 首都圏においてのヨコハマの生きる道は…	85.4.25
42.	ヨコハマ、鉄道、道路、空港 横浜を中心とする道路体系とは？	85.5.23
43.	横浜の交通 ベナンと横浜の都市間比較による 開発コントロールと交通体系	85.6.24
44.	海外レポートアメリカ編	85.7.31
45.	高度情報化社会の技術	85.9.30
	(合宿	85.10.12～13)
46.	自治体と高度情報化社会 高度情報化社会の裏表	85.11.13
47.	行政計画と住民調整 住民説明会を素材として	85.12.21
48.	市政100周年記念事業の戦略	86.3.4
49.	そごう進出と横浜駅周辺のこれから	86.4.1
50.	外食産業と街づくり	86.5.26
51.	インテリジェントビルと企業の情報化戦略	86.6.27
52.	「今、アーバンデザインは」 近年都市デザイン事情	86.9.18
53.	地方自治体の国際化 横浜と他都市の事例等	86.10.29
54.	「みなとみらい21は、今」	86.11.26
55.	海外大学の誘致は可能か	87.1.29
56.	みんなで考える国際居住者と横浜の役割	87.3.24
	(韓国（ソウル市）ツアー	87.4.23～26)
57.	今自治体がおもしろい！ 地方の目でみる四全総	87.5.15
58.	横浜博覧会の裏・表 人・金・事業の流れなどなど	87.6.26
59.	MM21新線の裏を覗く 今抱えている問題と、今後の見通し	87.8.3
60.	旧根岸競馬場スタンドの有効利用を考える	87.9.19
61.	横浜アートセンター構想	87.10.29
	(合宿	87.12.5～6)
62.	横浜港は今・・・	88.2.2
	(ヨコハマフラッシュ開催	88.3.11～27)
63.	企業サイドからの水際開発	88.3.15
	(台湾（台北市）ツアー	88.4.21～24)
64.	CATVと横浜のまちづくり	88.4.27
65.	東京都のウォーターフロント開発	88.6.3
66.	夜遊びへの水先案内人	88.7.21
67.	国際化への挑戦――自治体編	88.10.14

第2回

OUTPUT

まちづくりの実践

―"ヨコハマ・フラッシュ"―

自治体職員自主研究グループ
まちづくり研究会（横浜市）

ヨコハマのまちに光のモニュメントが立ち上がった時、震える感動が自然に沸き出てきた。この光が新しいヨコハマの時代を呼び起こすのではないか、そんな期待をもってこの光を見ていた。一九八八年三月一一日。その日からヨコハマを震撼させたイベントが始まった。『ヨコハマ・フラッシュ』。

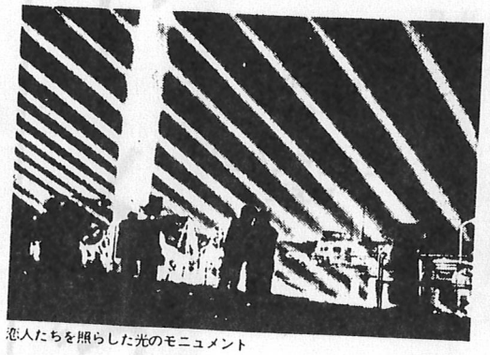
想像もつかなかったほどの人の波である。週末の海岸通りは、静かな倉庫街、官庁街を人通りで埋めてしまった。何でこんなに人が来るのだろう。倉庫の会場にはピーク時には一〇分間に二五〇人の入場者があった。それも半分くらいは横浜以外から来た人だ。人々が光のモニュメントを見て感動している。倉庫に入ってみて感激している。何かがヨコハマで始まった。ヨコハマが動いている。そう実感するイベントが始まった。これを企画実行したのが、横浜市の自主研究グループのまちづくり研究会（まち研）を中心としたメンバーだった。

OUT PUT ❶ ウォーターフロント部会から始まった

机上のお勉強だけではつまらない。実際に何かをやっていかないと、仕事のセンスも身につかない。まち研の母体は毎月一回程度の勉強会だが、主体的に何かをやっていくことも必要だ。そう思って部会を造って活動するグループがある。一九八七年三月にできたウォーターフロント部会もそのひとつだ。横浜のウォーターフロントを利用して、いかにヨコハマらしさを演出していくかを考える部会だ。

東京の芝浦地区や新川町の倉庫を見たり、ニューヨークのソーホー地区について勉強していった。すると、東京の凄さを感じるとともに横浜の状況が極めて貧困なのがわかってきた。東京にひきづられて都市が形成されてきている。都市の自立性や個性がほんとうに少ない。まるで東京のおこぼれを受けるために存在しているようなものだ。住宅についてもオフィスについても同じだ。その結果高度成長時代の昭和四〇年当初から一五年間で約百万人の人口増があった。山を崩し、丘を削り、開発が進み、まちがどんどん悪くなっていった。かろうじて海だけは民間の開発から逃れられた。その海も東京では地価の高騰によりオフィス機能や住宅機能を優先させて開発が進んでいる（十三号地や大川端開発）。このままの勢いでヨコハマが開発攻勢をかけられたらたまらない。

また、特に文化や芸術については、絶望的ですらある。横浜がかつて持っていた独特の横浜らしい文化や芸術が破滅状態になっている。横浜に住んでいる者にとって、活動している人が見えない。



恋人たちを照らした光のモニュメント

ヨコハマというまちにひとつの個性ある表情が生まれる。そういう願いがメンバーにはあった。

その赤レンガ倉庫の隣接地に三菱倉庫がある。六〇年の歴史がある倉庫だ。これが、一九八八年五月から取り壊される。ついては、最後の一か月貸してもいいという。どうしてもヨコハマのウォーターフロントのイメージを市民に見せたい。自分達でイベントを造って、市民に問い掛けてみたい。ウォーターフロントに関する関心は高くなっているけれども、実際にどうしていきたいのか、いつも行政主体になってしまう。へたをすればオフィスや住宅しか見えない計画ができてしまう。それを自分達の手で、新しい可能性を見せたい。そこから横浜の新しいまちづくりが始まるのではないか。そう考えてヨコハマ・フラッシュが始まった。

OUT PUT ❷ 何もわからない～ぶつかるしかない

意気込みはあるがイベントについては経験がない。金もない。企画もない。ツテもない。ナイナイづくしである。一番簡単なのはプロである広告代理店を探し出して、そこにまかせればよい。しかし、自分達でヨコハマの個性を造っていこうとしている時、代理店に任せても何も新しいものは生まれてこない。所詮、美味しいところだけ持っていかれるのがオチだ。それよりも、できなくてもいいから自分達の力でとことん頑張りたい。とはいえ、アマチュアだけでは、絶対にできないことは判っている。どうしても質の高いプロを入れていかねばダメだ。そうしている時、東京の新川町の三菱倉庫でギャラリーを開き、イベントを積極的に行っている上田カルチャープロジェクツ（UCP）の上田祐子さんと知り合いになった。彼女の行っていることは、空間を造形し、そこに音楽や舞踏を取り入れていく、今までとまったく異質の新しいイベントだ。彼女のプロデュースしたものを見た瞬間に『これだ』と思った。進取性と斬新性がヨコハマに似合うのであれば、この分野のイベントがヨコハマには一番ぴったりする。早速、上田祐子さんにぶつかっていった。ヨコハマの状況、赤レンガ倉庫のことを話すと、彼女の眼が輝いている。『面白い！　やりましょう』即座に彼女の決断がなされた。

OUT PUT ❸ 金がない

『やりましょう』といっても金がない。主催者として教育委員会が名乗りをあげてくれたが、百万円程度しか用意できない。三千㎡ある場所で一か月だと一億円近くかかる。ほんの百分の一で、なにができるのか。何としてもスポンサーを見つけなければ。しかし、地元には財界がない。太っ腹で、ポンと文化に金を出してくれるところはない。東京資本にしたら、企業のイメージを高めるために冠をつけるならば、というところはあるかもしれない。しかし、こちらとしては、企業の冠のついたイベントは御免だ。となると、ヨコハマのイメージをセールスするしかない。この三菱倉庫のイベントに後援すれば、大きな眼で見ると、得をするということを見せね

DATA

横浜市職員の自主研究会。昭和55年3月発足。自治体の仕事を通じて横浜のまちづくりを考えて行こうという趣旨から、局区・職種を超えた幅広いメンバーで構成されている。原則月1回の定例会の他、合宿、イベント等も行い、最近ではソウル市訪問、台北市訪問、ヨコハマフラッシュ（手づくりの文化イベント）を行った。途中から市職員以外にも呼びかけており、現在会員数は約150名。田村明氏（法政大学教授）が顧問をしている。

ば、企業は乗ってこない。また、まちづくりの一環として百年の計を考えてくれる企業でないと、ヨコハマとしても面白くない。そこで、横浜に本格的に進出を開始しようとしているセゾングループを選んだ。堤清二氏の文化に対する執着心と企業利益、先を見通す眼力にかけてみよう。様々な方法でアプローチをした。開発担当部長を通して交渉する。西武美術館を通して交渉する。そして最後には直接、上田さんを通して堤氏に当たってもらった。答えはOKだ。ヤッター！

その後、キリンビールを巻き込み、横浜市、横浜博覧会協会、㈱横浜みなとみらい21を主催者に入れ、不十分ながらも、名目と金の目途をつけた。

OUT PUT ❹ 若者がフラッシュを支えた

しかし、スタッフは少ない。雇える金もない。母体はまち研だが、それだけでなく、ヨコハマの若者を巻き込んで一緒にやりたい。そのため、ボランティア運営の実行委員会方式をとった。探せば若者はいる。僕のアンテナにかかったのがヨコハマでユニークな活動をしている『濱じゃん組』の竹産正樹と地元情報紙『ぱど』の原聡一郎だ。何かをしたがっている。ヨコハマには『発信性』がまったくなくなってしまっている。その状況をどうしても変えたい。日本に、世界に向かってヨコハマから再び何かを発信させたい。それを実現させたい。同じように彼らも考えている。この二人とまち研の大蔭直子。三人とも二〇代だ。彼らの意気込みは凄い。人を巻き込んでいく何かを持っている。この三人を中心に若者が集まってくる。『ぱど』を使って募集した若者。『濱じゃん組』の大学生。全員無償だ。その仲間を率いて企画から資金集め、運営にいたるまで自分達で築きあげた。むろん、大きな企画はプロ（UCP）が担当し、パブスペースの音楽の企画を地元のミュージシャン中心に若者が企画運営していった。

若者のエネルギーは無限だ。資金集めにしても物怖じせずに企業にぶつかっていく。ダメであっても、また次の企業にと前進のみを考えていく。結局のところ地元の企業の協賛は少なかったが、この偉大な無駄は、糧になっていった。このことでひとりひとりが逞しくなっていった。そして、会期中の頑張りは特に凄かった。一日一二時間労働はあたりまえ。最初は頼りなくて、何でもリーダーに聞かなければ処理できなかった。それが日に日に逞しくなって、ひとり歩きを始める。それが会期中の一五日間で見えた。そういう彼らがいなくてはイベントが成立しなかった。

OUT PUT ❺ ウォーターフロント講座

一方まち研では大蔭を中心に横浜のアイデンティティである港・ウォーターフロントという都市空間に、身近な関心を呼び起こし、横浜を再意識することを目的とするウォーターフロント講座を同時に企画した。横浜市教育文化センターが、市民を対象に行っているセミナーを利用し、一月二〇日～三月二三日までの計一一回連続講座だ（表参照）。

前半では、ウォーターフロントを保存の視点でとらえたソーホー派、開発の視点でとらえたニューヨーク・湾派、それぞれの実例・現状を、実際にかかわっている当事者から聞くことを中心に議論を重ねていった。後半では、「探検」の名のとおり、横浜のウォーターフロントを講師と受講者が、自分達の足で歩き、目でとらえ、体で感じてもらえるよう計画した。講座最終回では、ヨコハマ・フラッシュの会場に場所を移し、ウォーターフロントの実践例を参加者一同楽しんだ。

講座には、横浜内外から三〇人前後の参加者があり、質疑応答で時間を超過することもしばしばで、この問題に対する注目度・関心の高さがうかがわれた。また「探検」では、現状を目の前にした意見の交換は、熱を帯びたものであった。

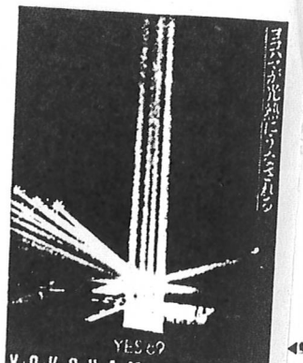
〝よこはま〟といえば、〝みなと〟がイメージされることに、異議を唱える人はいないであろうし、〝みなと〟なくして〝よこはま〟は語れない。その〝よこはま・みなと〟で、様々な利用・開発計画が立案されている現在、市民一人ひとりが、どれだけ現状を認識しているかは疑問が残る。今回の講座で、市民に一石を投じていればと願う。

OUT PUT ❻ 終わって

ヨコハマ・フラッシュから一年が過ぎようとしている。もうすぐ横浜博覧会が始まる。〝まち研〟を中心に多くの若者によって造ったヨコハマ・フラッシュは忘れられているかもしれない。横浜博覧会という巨大イベントに押し潰されてしまうかもしれない。しかし、メンバー達はまったく違った視点でこの博覧会とヨコハマ・フラッシュを捉えている。横浜博覧会が終わった時、残るものは、みなとみらい21という名前と土地だけではないだろうか。そこで、培ったヨコハマのエネルギーが果たして持続していくだろうか。たぶん、だめだろう。しかし、ヨコハマ・フラッシュは確かに何かを残している。ヨコハマという土地で『濱じゃん組』が育ち、まち研も伸び、若者が何かを求めて動き始めている。その若者達がリーダーになって新しい人を育て、新しいまちを造るために動き始めている。大きなこれからのヨコハマを造り出していくネットワークがある。

そして、ほんの小さな横浜市役所の自主研究グループ『まち研』がヨコハマの若者達と一緒になってまた動き始めた。横浜博覧会の中でほとんど唯一広告代理店を入れずに『FM放送』や週間情報紙『ぱど』の発行準備を始めている。一方で行政の仕事をしながら、もう一方でまちの若者と一緒に行動する。そのことが、明日のまちづくりに確実に繋がっていくという確信を持って動いている。

当初、まち研は勉強会であった。そして、まちづくりは実践であるということを仕事を通して、研究会を通して知った。実践とは、まず『まち』に出ることであり、何かを始めることである。さあ、みんな『書を捨てよ。まちへ出よ。』



◀印象を与えた〝ヨ

講座「横浜ウォーターフロント探検」

回	日程	タイトル	講師	内容
1	1／20（水）	ウォーターフロントの景観	窪田陽一（埼玉大学助教授）	ウォーターフロントを景観として捉えたときの現実を、実例を見ながら考える。
2	1／27（水）	ソーホー派IN ニューヨーク	岩淵潤子（アートコーディネーター）	ロフト利用の口火であるニューヨーク・ソーホーからの報告を中心に、現在そしてこれらの文化が求めている空間の現状を知る。
3	2／3（水）	ソーホー派IN ヨコハマ	野口英（横浜ボートシアター）	船の劇場として知られ、横浜文化拠点のひとつである横浜ボートシアターの活動を、都市における亜空間の創造として捉え今後の水際演出を考える。
4	2／10（水）	ニュー東京湾 パート1	田村明（法政大学教授）	東京湾をひとつの巨大なウォーターフロントとして捉えたとき、現在の色々ある個別計画の意義はどこにあるかを探り、ヨコハマのまちの個性を考える。
5	2／17（水）	ニュー東京湾 パート2	嬉野通史（海・海岸研究会）	数多くの湾岸開発計画を持つ東京都において、開発の重要性と切り捨てられた部分を知り、湾岸のまちづくりの今後を考える。
6	2／24（水）	ニュー東京湾 パート3	木下真男 ㈱みなとみらい21 企画部計画第一課長	横浜市ウォーターフロント開発の目玉である「みなとみらい21」計画について、東京湾という立場からの姿を知り、ヨコハマのまちづくりを考える。
7	3／2（水）	ウォーターフロント探検「探検のために」	藤原恵洋（東大生産技術研究所第5部藤森研）	ウォーターフロント探検のための問題点の整理と歩く視点の提示を行う。
8	3／5（土）	ウォーターフロント探検①	〃	桜木町を起点に歴史的遺構を訪ねる。主に造船所・新港埠頭から関内・大桟橋へ。
9	3／12（土）	〃 ②	〃	新子安を起点に京浜運河遺構から旧神奈川宿へ歩く。主に東海道水道遺構を訪ねる。
10	3／19（土）	〃 ③	〃	山下公園より赤い靴号に乗船、横浜港を周遊する。その後新山下埠頭から本牧埠頭へ。
11	3／23（土）	まとめ	〃	全体のまとめと今後の展望を三菱倉庫（ヨコハマフラッシュ会場）で行う。

1月号 450円
連邦制へ？
インタビュー●日本の自治百年、これから何が問われるか…西尾勝　座談会●連邦制への誘惑…中邨章＋杉山拓一郎＋雛元昌弘　論文●道州制と遷都論…戸沼幸市　連邦制…石田光義　岩崎美紀子

月刊自治研

発行●自治研中央推進委員会
発売●八月書館 東京都文京区本郷1・10・12 カルム本郷405 ☎03・815・0672

最終回

OUTPUT

学習の広がりとまちづくりの実践

自治体職員自主研究グループ
まちづくり研究会（横浜市）

OUT PUT ❶
より広い視野を―韓国・台湾ツアー―

昭和五七年に横浜で開催された国連アジア太平洋都市会議（YLAP）での活動や、それに続く研究会等でアジアとのつながりの中でまちづくりを考えてきたまち研では、実際にアジアの都市、まちづくりを見てみたいという気運が高まっていた。こうした声を反映し実現したのが昭和六二、六三年の韓国及び台湾へのまちづくり研究ツアーであった。

六二年四月に訪れた韓国は、日覚ましい経済成長過程にあり、その象徴ともいえるオリンピックを一年後に控え、都市開発が盛んに進められているということであった。十分な事前勉強は出来なかったが、具体的にどのように都市づくりがすすめられているのか、そこでの官民の役割等に興味が持たれた。

現実にみたソウルのまちは活気にあふれていた。まちは夜おそくまで賑わい、片道四車線の道路も車で埋まり、高層ビル、ニュータウン、交通網の建設も進められていた。私達は熱気にあてられる思いであった。同時に市内に残る日本統治の歴史の跡に、アジアの中の日本の役割・意味を改めて考えさせられた。

ソウルではまず市役所の都市計画部門へ行き、行政組織機構、まちづくりのしくみ、制度について話を聞いた。法制度は日本に酷似しているが、運用面においてはかなり厳格であり、特に規制行政の対応は日本に比べ徹底されているように思えた。

また、ツアーに参加された民間企業の方の紹介で、韓国の代表的企業である「現代」へ行き、会長さんにお会いした。会社の活動をはじめ、韓国の産業の動向や課題、市民生活の状況等についてもお話しをうかがうことが出来た。高度成長期の日本に似ていることと、学歴に対する格差が日本以上にシビアであり、教育に対して相当力をいれていることなど、今後日本と並びアジアでのリーダー、世界への飛躍を目指す国の迫力を感じた。

夜になると、比較的治安がいいということで、それぞれが目的に応じて街の中にとびだしていったが、もっとも賑やかな繁華街である明洞地区へ行ったメンバーはサギまがいの支払い料金を粘り強い交渉で大幅に値切るなどというハプニングもあった。

アジアツアー二年目は台湾（台北市）を訪れた。折から我が国は首都圏を中心に、空前の地価高騰の真っ只中で、マスコミもこぞって特集番組を組み、これまでの土地無策が問われ、広く国民各層で土地問題が論議されるといった状況であった。同時に海外の土地政策の紹介も盛んで、とりわけアジアでは台湾の平均地権制度が注目を浴びていた。

こうした背景からか、民間主催のセミナーで平均地権制度についての講演を行うため、台湾の文化大学、政治大学の蔡教授が来日していた。以前から台湾ツアーを考えていた、まち研コアメンバーの飯島（建築局宅地第一課係長）は、セミナーに参加し、蔡教授にコンタクトをとり、まち研ツアーへの支援をとりつけることができた。

昭和六三年四月二一日台湾まちづくり研究ツアー一三名は早朝に羽田を出発し、一一時には台北空港に到着した。午後一番で台北市を訪れたが、都市計画、土地対策セクションを司る工務局の鄭副局長をはじめとして多数の職員の方々の暖かい歓迎を受けた。歴史的な経緯もあるせいか日本への親近感が強いようにも思われた。この日は台湾の都市計画の沿革、課題などについてお話しをしていただき、その後若干の質疑を行った。

翌日は土地対策を担当する地政処を訪れ、台湾の土地政策特に平均地権制度を中心に実態をお聞きした。科長（日本では課長にあたる）の林さんは小学校が日本人学校を出たこともあって日本語が堪能であり、ベースボールマガジンの創刊号からの愛読者というほどの野球ファンだった。平均地権はよく知られているように孫文の三民主義に基づく土地政策であり、土地は全体のために用い土地保有による増加利益は公に帰し、国民全体の福利に用いられるというものである。しかし、その運用においては、かなり形骸化されて来ているというのが現状であった。経済的利益の向上が政治を動かし、政治が制度を歪めるのはどの国も同様なのかもしれない。そうは言っても、平均地権の思想は優れたものであり、行政の体制も、地政処が土地の登記、土地の調査、農地問題、区画整理など土地に関する行政の一元的執行の権限をもっているなど、日本が学ぶべき点は少なくない。

過密な日程で、午後には国の行政院経済建設委員会都市及住宅発展處（日本でいうと建設省と国土庁を合わせたような権限をもつ）の劉副處長から国土計画と将来の課題等についてうかがい、続いてまち研顧問の田村氏が横浜のまづくりについて講演をおこなった。夜は台湾大学の方々にツアー代表者が夕食会に招かれた。

翌日はフリーであったが、田村氏の大学院での生徒であった行政院顧問で台湾の代表的な映画会社中央電影の社長である許さんの厚意で、希望者が撮影所の見学と福建料理の狂食会のもてなしを受けた。家族ぐるみの暖かいもてなしにまたまた大感激！

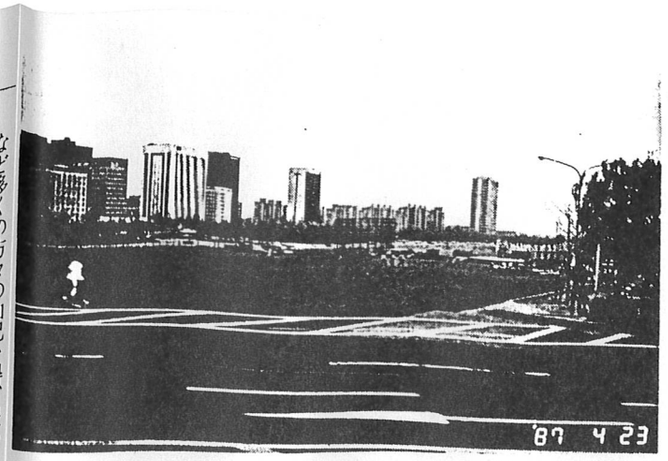
今回のツアーは課題が明確になっており、事前にある程度の準備が可能であったので比較的スムースに効率良く情報が得られた。しかしそれ以上に、国交のない友好国台湾の政府、台北市、台湾大学

▲ソウル特別市の市庁舎

▼韓国を代表する企業「現代」を訪問したまち研の面々

DATA

横浜市職員の自主研究会。昭和55年３月発足。自治体の仕事を通じて横浜のまちづくりを考えて行こうという趣旨から、局区・職種を超えた幅広いメンバーで構成されている。原則月１回の定例会の他、合宿、イベント等も行い、最近ではソウル市訪問、台北市訪問、ヨコハマフラッシュ（手づくりの文化イベント）を行った。途中から市職員以外にも呼びかけており、現在会員数は約150名。田村明氏（法政大学教授）が顧問をしている。



▲ソウル市ヨイド地区の広場

抱えている問題を学習してきている。これらを余すところなく把握し、意識的に生かすことが出来れば必ず良い仕事が出来るはずである。しかし、現実には、なかなかOUT・PUTが出て来ない。それは、ひとつには具体的な職場の中での立場、機会に恵まれないといったこともある。反面、メンバーのなかにはまち研と実際の職場はまったく別物といった、変に割り切った意識があることも否めないのではないだろうか。もう一歩踏み出した行動をしていればといったこともないとはいえない。自主的な活動を職務に結び付けるのは口で言うほど簡単ではないが、積極的な意識を持ち続けることがそれを可能にする。その好例が新本牧地区のCATVプロジェクトである。

昭和六二年六月に新本牧地区の区画整理事業によるまちづくりを担当するセクションの係長に着任した田口は、コミュニティメディアとしての意識なく、モノとして敷設されつつあったCATV施設の取り扱いに苦慮していた。当時の彼は、CATVをはじめとするいわゆるニューメディアに関する知識もなかった。そこで彼は、まち研の定例会で「自治体と高度情報社会」について講師として語った石田（当時企画調整室係長）の存在を思い出した。そして田口はすぐ石田をまきこみ、彼のもっている知識と外部とのネットワークを活用し、僅か一年半余で一部地域のCATVの運営主体としてはきわめて優位な財団法人の設立を実現し、日本ではじめてのCATV網による電話実験まで誘致することが出来た（このプロジェクトについては『横浜・本牧CATVV奮戦記』小社刊を参照されたい）。

このプロジェクトには、まち研のコアメンバーである飯島も当時田口の部下として参加していた。このプロジェクトはその成果もさることながら、そこに至るまでのメンバーの体験・成長・自信、そして何よりも強力な民間等外部の人々の大きな助けを得、ネットワーキングの素晴らしさを実践的に認識出来たことがもっとも大きな財産であったと思われる。

しかし、これらはほんの一部のメンバーに特化したものにとどまっている。どんな組織でも同様であるが、長い時間が経ち固定化してしまうと必ず弊害が出、活力も失われがちである。よそ目からみるとまち研は目的が不明確だという声もある。しかし、考え方の異なる多様なメンバーが自発的に目的意識をもって集うという原点を考えるとこれは止むを得ない。中心的に活動しているメンバーに改めて『何故、まち研に参加している』と問いかけてみても、「息抜きと田村さんと定例的に話ができること」（田口）、「ネットワーキングできる」（大藤）、「人を介して生の情報を入手できる」（仲原）、「刺激をえられる」（飯島）など様々である。しかし、これらはいずれも自治体で積極的な仕事をしたいという個人としての向上心が前提になっている。

現在の役所の人事配置の実情からみると、積極的な意欲を維持するには相当な〝ずうずうしさ〟が必要となる。とりわけ、区や出先機関に配属された新人職員で期待と現実とのギャップを目の当たりにみながら自発的に活動出来るような人は数少ない。潜在的に能力があり意欲があっても情報や機会に恵まれず、不満をかかえている者も少なくない。こうした人材を発掘し、自己開発の足掛かりをみつけてもらうことは重要なことである。このような実態を考えると、新入職員への働き掛けは大切である。個人の積極性、努力が基本であること、ネットワーキングによって可能性がひろがることなどを言葉だけでなく分かってもらうことが必要である。そうは言っても、役所に入ってきたばかりの職員に、まち研の常連が〝役所用語〟を連発するようでは逆効果になる。まち研は特殊解であってはいけない。

新規メンバーの確保と表裏にあることであるが、活動メンバーの高齢化対策も重要である。新しい発想、役所ズレしていないメンバーによるリフレッシュ効果は大きい。

具体的な仕事での活用についても、今後は出先や区での事業でのしかけにまち研がバックアップするようなことも必要である。市民に近い区の在り方、重要性の認識と改革の必要性を実践的に考えてもらうことは、大きな課題である。

流動的で柔構造な会であるだけに課題は次々に噴出してくる。都市問題の知識・見解を高めることだけでなく、具体的なまちづくりへの実践を考えれば、いきおい人づくりに力をいれざるを得なくなる。市役所に入って二年目でまち研の運営の事務局の役割を果たしている漆原は、まち研の意義を次のように言い当てている。―「この会の運営にたずさわって一番感じていることは、横浜市のような巨大組織の中での仕事というもので、必ずしも組織のシステムだけで進められるのではなく、フォーマルであれインフォーマルであれ、人と人のネットワークが横糸となり、潤滑油となって動いているということです。こうした横糸や潤滑油となったり、あるいは、起爆剤となるようなネットワークをつくっていくことがまち研の役割のひとつであると信じています」―。

OUT PUT ❷
ネットワークを生かした仕事への実践―本牧CATVプロジェクト―

まち研がこれまでに定例会で取り上げてきたテーマは六〇以上にものぼり広範な横浜という都市が抱えている問題を学習してきている。これらを余すところなく把握し、意識的に生かすことが出来れば必ず良い仕事が出来るはずである。しかし、現実には、なかなかOUT・PUTが出て来ない。それは、ひとつには具体的な職場の中での立場、機会に恵まれないといったこともある。反面、メンバーのなかにはまち研と実際の職場はまったく別物といった、変に割り切った意識があることも否めないのではないだろうか。もう一歩踏み出した行動をしていればといったこともないとはいえない。自主的な活動を職務に結び付けるのは口で言うほど簡単ではないが、積極的な意識を持ち続けることがそれを可能にする。その好例が新本牧地区のCATVプロジェクトである。

昭和六二年六月に新本牧地区の区画整理事業によるまちづくりを担当するセクションの係長に着任した田口は、コミュニティメディアとしての意識なく、モノとして敷設されつつあったCATV施設の取り扱いに苦慮していた。当時の彼は、CATVをはじめとするいわゆるニューメディアに関する知識もなかった。そこで彼は、まち研の定例会で「自治体と高度情報社会」について講師として語った石田（当時企画調整室係長）の存在を思い出した。そして田口はすぐ石田をまきこみ、彼のもっている知識と外部とのネットワークを活用し、僅か一年半余で一部地域のCATVの運営主体としてはきわめて優位な財団法人の設立を実現し、日本ではじめてのCATV網による電話実験まで誘致することが出来た（このプロジェクトについては『横浜・本牧CATVV奮戦記』小社刊を参照されたい）。

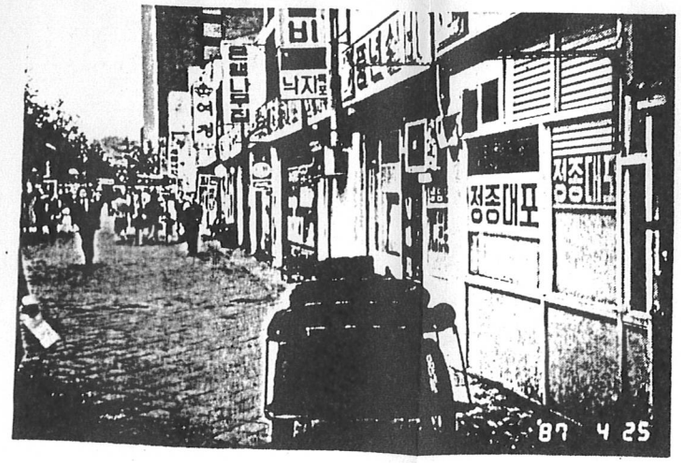
このプロジェクトには、まち研のコアメンバーである飯島も当時田口の部下として参加していた。このプロジェクトはその成果もさることながら、そこに至るまでのメンバーの体験・成長・自信、そして何よりも強力な民間等外部の人々の大きな助けを得、ネットワーキングの素晴らしさを実践的に認識出来たことがもっとも大きな財産であったと思われる。

OUT PUT ❸
あしたへ向けて―まち研の課題と方向―

自治体内の自主的な研究会グループとしては、息長く多様なプログラムをこなし、仕事にも生かすこともみられるようになってきた。

しかし、これらはほんの一部のメンバーに特化したものにとどまっている。どんな組織でも同様であるが、長い時間が経ち固定化してしまうと必ず弊害が出、活力も失われがちである。よそ目からみるとまち研は目的が不明確だという声もある。しかし、考え方の異なる多様なメンバーが自発的に目的意識をもって集うという原点を考えるとこれは止むを得ない。中心的に活動しているメンバーに改めて『何故、まち研に参加している

▼ハングル文字の看板が並ぶソウルの商店街



新聞月報

年報'87年（好評発売中）

1月の各紙重要記事をピックアップ
天皇陛下崩御
平成元年スタート
予算政府案決定
米大統領就任式
その他、政治・経済・国際・社会といったテーマ別に1ヵ月の記事をわかりやすく編集。

3月号発売中

定価600円（〒60円）

去年一年間の新聞月報を再編集した、87年年鑑です。定価1900円

新聞論潮

1月の各紙社説をテーマごとに編集。並べて読み比べると、各新聞社の性格の違いがはっきりとわかります。

2月号
2月25日発売

定価500円（〒55円）

新聞月報社

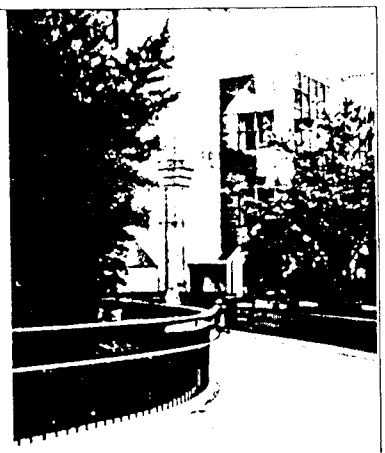
〒112 文京区関口1－18－6
TEL 03（267）1006
FAX 03（267）1007

●事例研究

「まち」から「みち」を考える

横浜まちづくり研究会

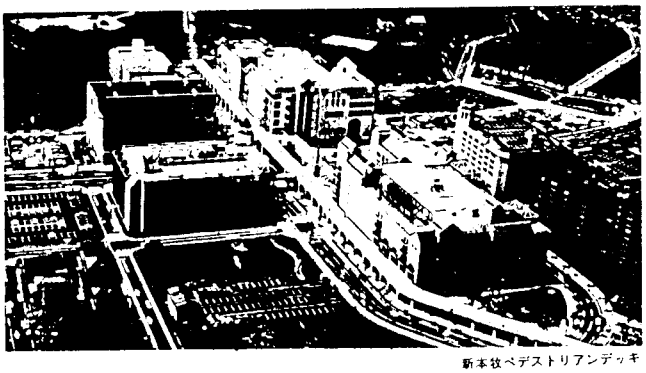
「まち」を読みとることによって「みち」のあり方がみえてくる。「みち」をつくることによって、「まち」が少しずつ変わっていく。横浜市の最新の例を中心に「まち」と「みち」を考える。



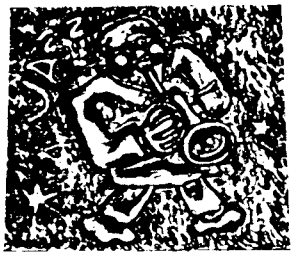
ボーリング場

●事例① 建物と組み合わせ、エレベーターも付いた

新本牧ペデストリアンデッキ 横浜市中区



新本牧ペデストリアンデッキ

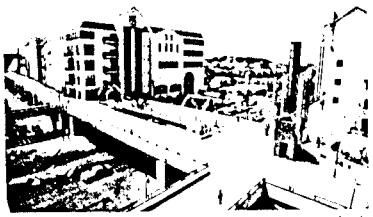


市民手づくりのレリーフ

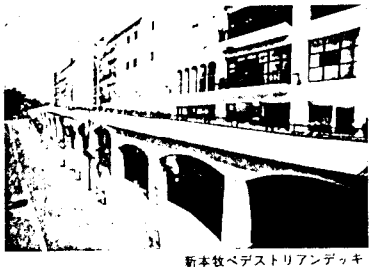
デッキの手すりなどに飾る市民手づくりのレリーフの完成記念式典には実に多くの人たちが集まってくれた。このレリーフはアルミ鋳物で元型を油土から自分でこねてつくるもので、本牧に何らかの“思い入れ”を持つ人は自由に参加できるものとした。テーマも“私の本牧”というぐらいのきわめて幅のあるもので、3歳から70歳までの50人近い人たちが参加してくれた。

新本牧地区では、横浜市中区の本牧地域の中にあった旧米軍接収地約80ヘクタール強を土地区画整理事業とそれに伴う建築指導を行うことによって新たなまちづくりが進められている。本牧はヨコハマの中でも山手と並んで最もヨコハマらしい所と言われている。横浜開港前は漁師まちであった本牧は開港後、居留地の外国人が好んで別荘を建てたり、日本人資産家の邸宅が建ったりした歴史的なまちである。そこが終戦直後に米軍に接収され、家族用のハウスとして使われた。戦後の豊かなアメリカ文化はここから入ってきたのである。この新本牧の中心である“センター地区”につくられたのが、高架（二層式）の歩行者専用道路（ペデストリアン・デッキ）である。

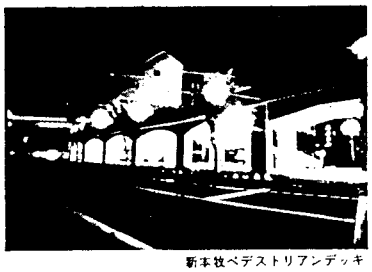
このデッキは、丘と海をその景観的かつ歴史的特徴とする本牧において、海と丘を結ぶ主要な軸として計画された。丘は新本牧の背骨である地区の1／4の面積を占める“山頂公園”と、海は市民利用施設も充実された臨港埠頭地区である。どちらともデッキは現在のところ行き止まりとなっているが、山頂公園は国から買収され次第整備され、デッキと結合した公園内の部分が整備される予定であり、臨港地区とのつながりも臨港業務用途と



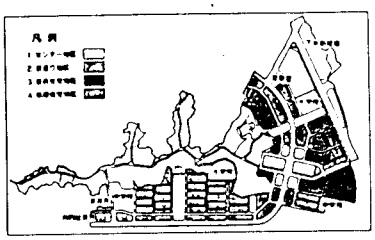
新本牧ペデストリアンデッキ

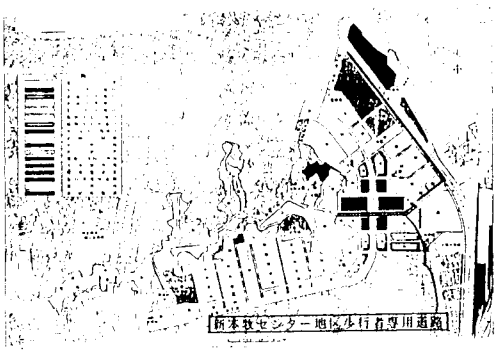


新本牧ペデストリアンデッキ



新本牧ペデストリアンデッキ





新本牧地区と新本牧ペデストリアンデッキ

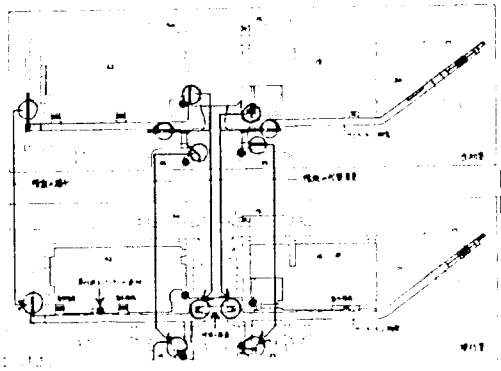
の将来的な調整を図りながら実現されていくべきものであろう。

中区には山手地区をはじめとして昔からの“洋館”が多く残されている。本牧にもいくつかの洋館があり、新本牧の中でも民間の高層住宅団地の管理棟としてヨコハマに緑の深いアントニン・レーモンド設計の洋館（山手 250番館）の完全復元を指導した。この洋館群を結ぶ尾根道をルートとして、“緑と洋館の巡り道”を整備する計画がある。新本牧地区のデッキをはじめ、山頂公園内の緑道や地区内の歩行者専用道もこの一環として位置づけた。

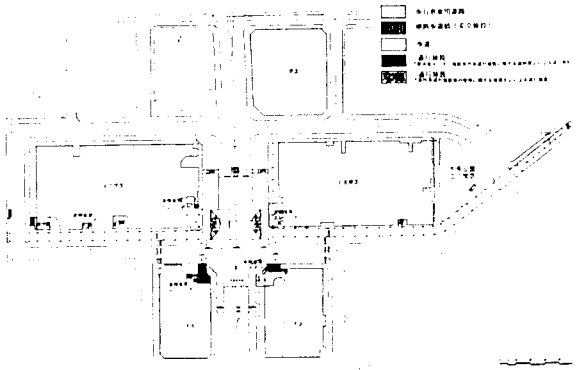
センター地区の全街区を一体として開発することになった商業者からは当初、分散した各街区を結ぶ巨大な専用デッキ（道路法にいう占用物件となるが）の構想が出された。しかし商業者の都合で公共空間としての道路上空が占用されてしまうのは、まちづくり総論としては釈然とせず、まちづくりの中での意義ある形態が求められた。反面、市の内部からは商業施設に接しているのだからすべて“占用”でやらせればいい、という意見も出されたが、やはり地区のまちづくりの主要な軸となるに相応しいものを公共の手で周辺の地権者の応分の協力を得てつくるのが筋である、との主張が通った。

デッキ（設計：大成建設設計部、指導助言：横浜市都市計画局新本牧開発室）は総延長 400メートルで、幅6.5 メートル（中央部は吹き抜けを含めて幅20.6メートル）、高さは約 4.4メートルから7.8メートルである。鉄筋コンクリート造とし、壁面や天井はいたずらスプレー防止をかねて特殊な無機質系吹付けタイルを使用している。デッキ上部は磁器質タイル舗装とした。道路法上の位置づけは、デッキ上部が歩行者専用道路で、そのデッキ下部が通常の歩道である。道路管理者にとってはこの種別の扱いが難しい点で、議論を要した。身障者への配慮として、徐々に海側から山側へのレベル差を意図的に解消したリズミカルな階段による演出に沿ってスロープを併設した。このようなデッキの常として、その下部が暗い空間となりやすい。そのため接する建物側は最低1メートル以上のセットバックを行ってもらい光がさしこむようにした。当初の設計ではデッキは片持ち構造で片側に巨大な柱や天井にリブが出現するのを、あえて二脚構造として構造的にスッキリさせることによってデッキ下空間への演出をやりやすくした。デッキ下部の天井は建物に接する部分では商業施設側よりの照明を受けてビーズ玉を入れた天井が反射して幻想的な空間を形づくっている。

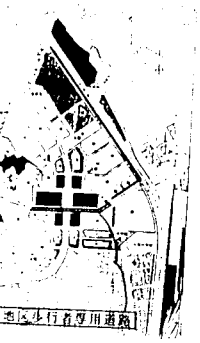
デッキに不可欠の階段は利用者の利便性を考えると要所要所に設置するべきで身障者用スロープも当然必要となる。しかしいくら区画整理事業により生み出された道路用地といえどもそれほど余裕はなく、規定の2メートル強の階段をつけると、もはやその脇を歩行者がすり抜け



デッキの主な変更点

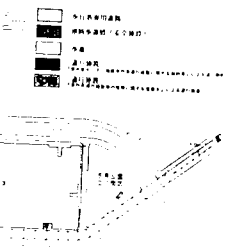


新本牧ペデストリアンデッキ



新本牧地区と新本牧ペデストリアンデッキ

に解消したリズミカルな階段
に沿ってスロープを併設した
デッキの常として、その下部
となりやすい。そのため接す
最低1メートル以上のセッ
ってもらい光がさしこむよう
初の設計ではデッキは片持ち
に巨大な柱や天井にリブが出
あえて二脚構造として構造
させることによってデッキ
出をやりやすくした。デ
は建物に接する部分では
の照明を受けてビーズ玉を
反射して幻想的な空間を形
。
可欠の階段は利用者の利便
要所要所に設置するべきで
ーブも当然必要となる。し
画整理事業により生み出さ
いえどもそれほど余裕は
メートル強の階段をつけ
の脇を歩行者がすり抜け



新本牧ペデストリアンデッキ

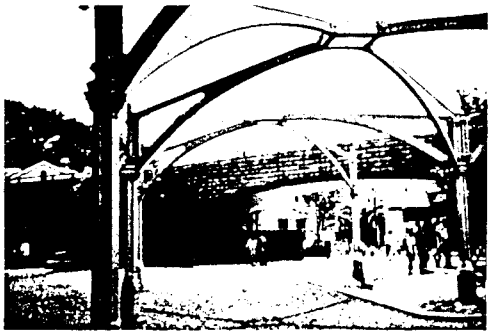
る余地もなくなってしまう状況であった。かつ階段下の空間も暗いジメジメしたものとなってしまう。そこで考えられたのが隣接する建物所有者の協力を得ることであった。隣接商業ビルも当然客のために階段とエレベーターは設置するわけで、その位置を限りなくデッキに近づけてもらい両者で“共用”できれば、それにこしたことはない。ただ公共側にすると、その永続的な使用についての“担保”をどうしても求めたくなる。そこで自己の建物の足まわりにデッキへの昇降施設がなくなりスッキリとして逆にメリットを受ける商業ビル所有者と横浜市の間で民法に基づく“使用賃貸契約”を“新本牧センター地区歩行者通行施設に関する契約書”として締結した。横浜市ではこのような契約は初めてのことであり、全国でも例が少ないと思う。

このおかげで身障者用エレベーターがデッキの要所に数多く設置された。身障者に限らず一般の人の利用を考えてもこれほど便利なデッキはないと考える。

またデッキに接する市の公園用地にもデッキとのつながりを考慮した階段を公園計画の一部としてデザインし設置した。これも道路管理者と公園管理者という市の内部ではあるが異なる局間の調整を図った例である。デッキは今年の4月末に周辺建物とともに完成したが、今後利用者に親しまれ、本牧の軸としてまちの中に息づくことを期待したい。

●事例2) 魅力あるゾーンをつなぐもの

フランス橋・ポーリン橋 横浜市中区



フランス橋 手前はフランス領事館跡地にパリのレアール市場遺構を移築したもの

横浜の代表的な観光名所である、「山下公園」と「横浜人形の家」(設計：坂倉建築研究所)を結ぶ「ポーリン橋」がこのほど完成した。この橋ができたことにより、フランス山公園(正式名称：港の見える丘公園フランス山地区)から山下公園までが、先に竣工した「フランス橋」(設計：M+Mデザイン事務所)と「横浜人形の家」、「ポーリン橋」を介して、やっと一つにつながったわけである。

もともとこれらの計画は、首都高速道路横羽線を中村川の上に通したことから始まる。この中村川の左岸には、山下公園や大桟橋、中華街などのある関内地区があり、右岸には港の見える丘公園、外人墓地、洋館の点在する山手地区やその足元に元町商店街がある。このように横浜を代表する観光拠点が両岸に広がっているが、この間をつなぐルートが十分でなかった。こうした状況に加え、上空を高速道路という高架の大規模構造物によって遮断してしまうことには、当然にして周辺地域から代替措置が要求されたわけである。その代替措置の一つとして、中村川の上を渡す、三本の歩行者専用橋を新設することになった。そのうちの一本が「フランス橋」となるのであるが、この橋の建設にはさまざまな問題が待ちかまえていた。

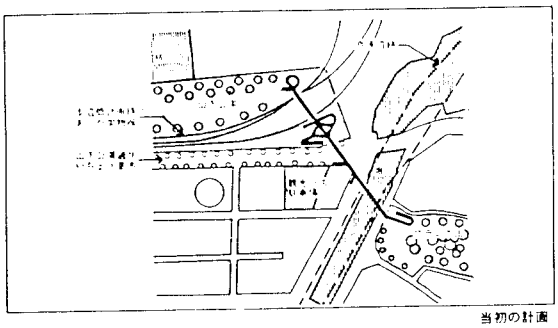
フランス橋

計画当初の案は、中村川右岸のフランス山公園内に設ける階段とスロープを起点として中村川、山下橋交差点、山下臨港線(貨物)の上を経由して、山下公園の南端部に至るというものであった。この計画案は機能的に考えると最も効率的なルートをたどることになる。しかし、次のような問題をのこしていた。

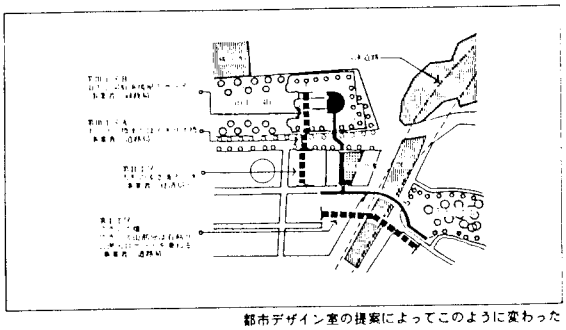
まず第一に山下公園南端部と山手地区をダイレクトに結ぶことによって、バイパス効果から途中の街区への来訪者が減る恐れがあること。第二に平面的にも大きな交差点となってしまっている山下橋交差点に高速道路の高架に加え、さらに歩道橋も横切るとなると、山下公園通りのいちょう並木という素晴らしい景観を損ねてしまう。第三に250mもの長い直線状の歩道橋では、味気ない空間になってしまう。最後にフランス山公園内に構造物が取り付くことによってフランス山の景観を大きく損ねてしまう。

このような理由から横浜市都市デザイン室では別案を検討した。その過程で平面橋というアイディアも出されたが、地域居住者から立体歩道橋を求める要望がだされ、この案は成立しなかった。その後提案したのが次のような特長を持ったものである。第一にそれぞれの道路と歩道橋を直角に交差させることによって景観の破壊を最低限にとどめる。第二に、ちょうど建設場所を探していた「横浜市人形の家」を、観光バス駐車場の上部利用をはかり途中に介在させることで、単なる通過空間でなく、中間部の魅力的な“ふくらみ”として、人のとどまれる場所を設ける。第三にフランス山公園の入口部分にスロープを設置し景観への影響を小さくし、さらに公園の入口を兼ねたゲートとすることによって、公園をより魅力的な空間に変える。

こうしたアイディアによって、当初案が変更され、1984年に「フランス橋」が竣工、1986年に「横浜人形のいえ」及び



当初の計画



都市デザイン室の提案によってこのように変わった

二階外部デッキ、今年3月には山下公園駐車場上部広場（設計：坂倉建築研究所＋創和エクステリア）とそこにかかる「ポーリン橋」が竣工した。

この二つの橋の名前にはそれぞれ次のような意味がある。一方の「フランス橋」という名前は、昔フランス波止場とよばれる桟橋があったことに由来するもので、もう一方の「ポーリン橋」は、1927年に始まった人形交流で、アメリカの子どもたちから日本の子どもたちに両国の親善を願って送られた中の一体で、市内の小学校に残っていた青い目の人形「ポーリン」をモデルにして作られたブロンズ像が人形の家の二階デッキ部分に座っており、ちょうど橋のかかる位置にあることに由来するものである。そして、どちらもこの名前にふさわしい雰囲気を持った橋として完成した。

この立体歩道橋の完成により、大桟橋、山下公園、氷川丸、マリンタワー、フランス山、港の見える丘公園、近代文学館、外人墓地といった横浜の観光名所が歩行空間として、一体になり面的に広がりを持った一大レクリエーション・ゾーンを形成することになった。

やがて、この歩道橋は、将来の赤れんがパーク、日本丸ドックパーク、みなとみらい21臨港パークといった一連の公園へとつながり、ウォーターフロントを思う存分味わえる、魅力的な場所へと成長して行くための大きな架け橋となるにちがいない。

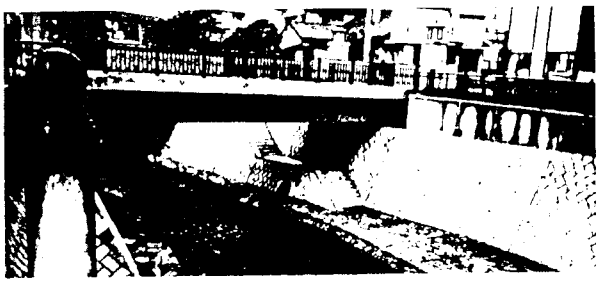
また、立体歩道橋の設置は景観的に好ましくないことや、歩行者は元来平面を歩かせるべきであるという理由から、都市デザイン行政の中では消極的な対応をされてきたが、都市空間における歩道橋のあり方という点で、この計画の変転は今後重要な意味を持つであろう。

ポーリン橋

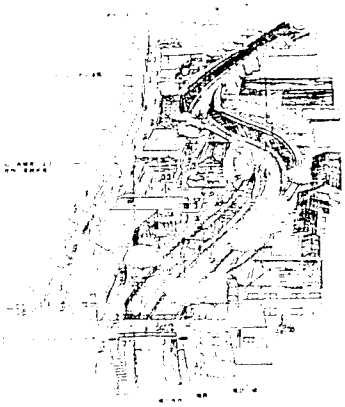
橋の名前になった青い目の人形ポーリンちゃんの像

●事例3　川の再生から橋、道へ

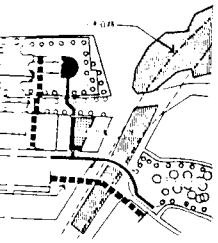
上大岡/大久保橋と道 横浜市南区



横浜の上大岡駅周辺は横浜南部の一大交通拠点として発展著しい地区である。京浜急行線と市営地下鉄線が交わり、駅前には古くからの幹線道路である鎌倉街道が通り周辺からのバス路線も集まる交通の重要な結節点なのである。しかしながら、鎌倉街道をはじめとする道路は増加した交通量をさばききれず、バスターミナルも数年前にようやく暫定のものが確保された状態で、さらに商業も無秩序に集積するなど、全体に機能と魅力が低下したまま今日にいたっている。このため、横浜市でも副都心として位置付け、官民協力のもと総合的な再整備を図ろう



「川のあるまち大岡川」イメージ図

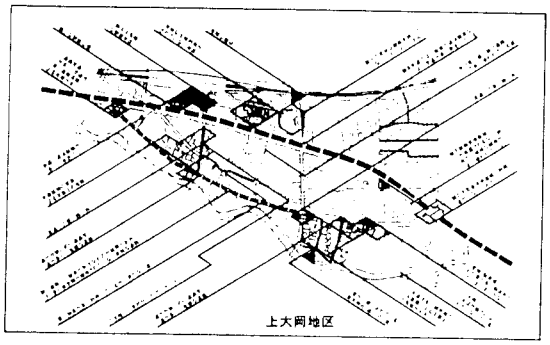


デザイン室の提案によってこのように変わった

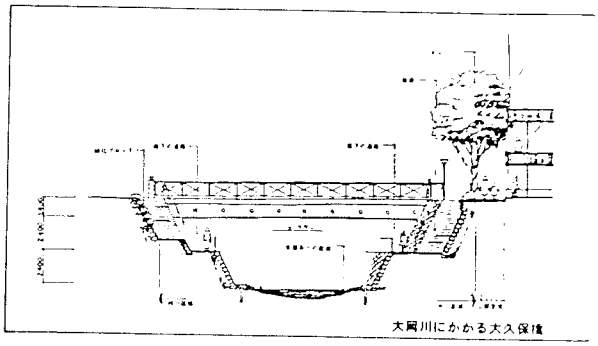
ない。

立体歩道橋の設置は景観的に好ましいことや、歩行者は元来平面を歩くべきであるという理由から、都市行政の中では消極的な対応をしてきたが、都市空間における歩道橋という点で、この計画の変転は大きな意味を持つであろう。

「川のあるまち大岡川」イメージ図



上大岡地区



大岡川にかかる大久保橋

としている。近々、駅前の再開発事業が始動するなど、ここにきて再整備にむけて動きが活発化している。

この上大岡の駅周辺部の裏手に大岡川という川が流れている。川幅十数メートルの川であるが、横浜の中心街である関内・伊勢佐木町地区がこの川の河口デルタを埋立ててできたことを思えば意味深い川である。しかし、どこの川でもそうであるように、高度経済成長とともにこの川も排水路としての機能しかなくなり、市民からは見向きもされない存在になっていた。ところが、経済成長も落着き市民が身近な環境に目を向けるようになると、都市内に存在する唯一といってよい自然環境である川と、その水辺が見直されるようになってきた。大岡川にも市民の目が向けられ、この上大岡地区でも川に着目した種々の市民運動が行われるようになったのである。子どもを含めた地域住民の手によるクリーンフェスティバルは、川の大掃除から始まり川遊びへと発展しながら定着してきた。従来置き去りにされてきた川と川沿いの環境は、これらの運動を通じて行政からも注目され、川沿いのプロムナードなども計画され、一部すでに整備された部分もある。

このような動きの中で、この大岡川にかかる大久保橋が老朽化にともない、かけかえられることになった。大久保橋は、

大岡川プロムナード

鎌倉街道から駅西方の住宅地域へつながる市道が大岡川をわたる位置にある。この道路は幅員十メートルに満たない一方通行の狭い道路ではあるが、バスも通り交通量は歩行者、自動車ともに少なくない。かけかえに際し、市では川沿いの環境整備構想にしたがい、単なるかけかえにせず、橋周辺の護岸改修を河川管理者である神奈川県にはたらきかけ、河原におりる階段を設けるなど、直接水に触れられるような形態の整備を行ったのである。ちょうどこの橋のたもとあたりは、毎年行われる川掃除のイベントの際ごみを揚げる場所でもあり、護岸から水面へのアプローチは望まれていたものでもあった。市民運動が一つの布石となったわけである。わずかの区間ながら親水空間が整備され、橋まわりの空間に深みが増したと言えよう。

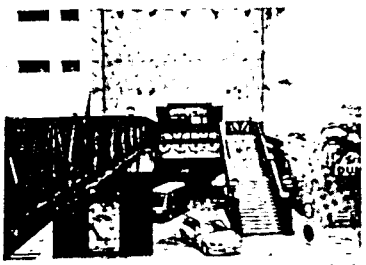
この橋と川沿いの整備は、既成市街地の中で橋が自然空間である川への入口として大事な意味を持つことを示している。道から見れば、まちなかの川を渡る橋は一瞬の通過地点にすぎない。しかし、建物が密集した市街地においては上下にヌケた貴重な空間である。橋をめぐる空間はまちの一つのポイントとなるのであり、ここから川を軸にしたまちづくりが展開されていくことが期待される。また、川沿いのまちづくりも橋からのびていく可能性がある。

そして、この大久保橋に関していえば、川の魅力が市民をひきつけ市民運動を呼び、それが実を結んできたのである。かつては、地域住民の中でも、川はふたがけして駐車場に、などという声もあったというが、川の再生が他ではみられない魅力づくりになっている。大久保橋周辺の建物はいまだ川には背を向けているが、川に表を向けた土地利用が出てくると、さらに輝きをますことになろう。

●事例4　ビルを貫く空中歩廊

金沢シーサイドタウン/ペデストリアンデッキ 横浜市金沢区

金沢並木三丁目ペデストリアンデッキ



金沢並木三丁目ペデストリアンデッキ

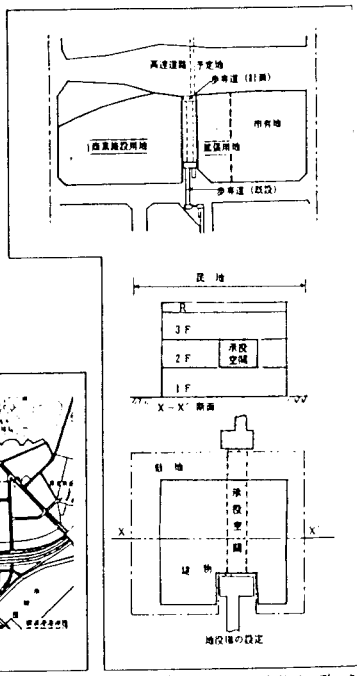
横浜市の南部海岸ぞいには広大な埋立て地が広がっている。昭和40～50年代に埋立てられた六百ヘクタールを超える土地は、単なる産業誘致のための埋立て地ではなく、市都心部の工場移転の受け皿とすることで都心部の跡地整備も図っていくという横浜市全体の都市強化戦略に位置付けられたものであった。内陸よりに住宅地を配し旧海岸線はかつての面影を残すため緑地等とし、また、事業費にはマルク債を充当するなど各種の手法で注目された事業である。交通機関として計画されていた新交通システムも本年念願の開通を迎え、さらなる発展を遂げようとしている。

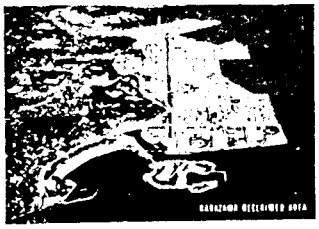
金沢シーサイドタウンは、この内陸よりの計画人口3万人の住宅団地である。全体の計画調整を横浜市の都市デザイン室が行い、モデル的に質の高い住環境づくりがねらわれている。東側の産業用地とは緩衝緑地で隔てられ、西側に旧海岸線緑地をもったまったくのニュータウンである。動線計画も歩車道の分離が行われ、南北に歩行者専用道路が軸として伸びている。各住棟、学校等の公共公益施設、商業施設等が歩行者専用道路により互いにつながっている。水路等により、北から1号地、2号地、3号地と分かれており、2号地はさらに高速道路で南北に二分されることになっている。したがって2号地中央はシーサイドタウン全体の中心に位置する重要なポイントであり、当初から商業センターが計画されるとともに、高速道路と歩行者専用道路との交差部の処理が課題とされてきた。

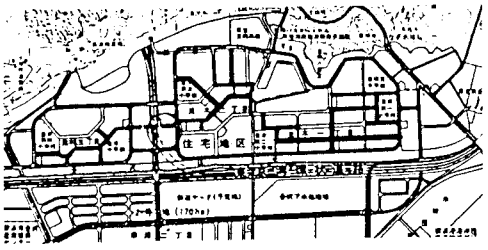
その後、市街化の進展にともないこの商業施設の計画が具体化すると、予定されていた土地の面積では不足し、歩行者専用道路用地をまたぎ敷地をふやす必要が生じた。従来の法令では、公共の道路内にこのような商業ビルを建築することは認められない。別々の敷地として計画せざるを得ないのであるがこれは得策ではない。かといって、商業施設を優先して歩行者専用道路を迂回させることも好ましくない。このため、市では商業の機能を損なわず、同時に歩行者専用道路も確保する手法を検討した。具体的には、歩行者専用道路用地を商業事業者に売却し、かわりにその部分に通行地役権を設定（無償）したのである。これにより、双方の機能を満足させるとともに、契約により、この通路の建設、維持管理等を商業事業者の負担とすることとした。商業事業者にとっても歩行者専用道路が直接建物内で接することは有利な材料である。この結果、商業ビルが2階部分に歩行者専用道路を抱え込んだ形となった。

歩行者専用道路は、北側の住宅街区から車道をまたぐデッキとなりそのまま商業ビルを貫通しさらに高速道路用地をまたいで南側の住宅地へとのびている。延長200メートルにも及ぶことになるこのデッキは商業の賑いのにじみでた日常の利用度の高いものになることが期待される。今回の措置により建物と歩行者専用道路が一体化し、平板になりがちな埋立て地に都市的高まりを形成していると言えよう。官民の利害が一致した結果とはいえ、今回の民側は全体計画におりこまれた中での民間事業者であり、既成市街地とはいくらか状況は異なり、どこでもすぐ同様な結果が得られるというものではないようである。

近年、道路上空の土地利用が盛んに検討されている。一方、建物敷地内を道路が貫通することはあまり例がない。建築物はとっくに重層化しているのであるから、道路の方も車道とデッキというかたちで重層化してもよい。デッキが建築物とからみあえば、建物の付加価値も高まることになる。道がビル内を抜ける自由度をもつかどうか今後の法令整備に期待がかかるところである。本来、道路があってはじめて建物が建つはずであるが市街地では都市計画上の道路と建物容積とのバランスが悪いのか、建物にとりかこまれて道路が窮屈になっている。建物間の調整がされ、ビル間を通る歩行者専用道路が空中歩廊としてネットワークを構成できるようになったとき、1次元高いまちづくりができるのかもしれない

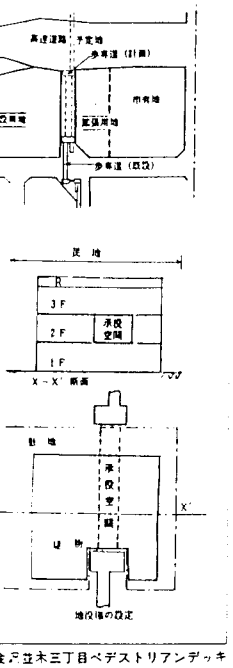






金沢シーサイドタウン地区　金沢並木三丁目ペデストリアンデッキ

的高まりを形成しているとも
官民の利害が一致した結果と
回の民側は全体計画におりこ
の民間事業者であり、既成市
くらか状況は異なり、どこで
な結果が得られるというもの
うである。
路上空の土地利用が盛んに検
る。一方、建物敷地内を道路
ことはあまり例がない。建築
に重層化しているのであるか
方も車道とデッキというかた
してもよい。デッキが建築物
えば、建物の付加価値も高ま
る。道がビル内を抜ける自由
どうか今後の法令整備に期待
ころである。本来、道路が
って建物が建つはずであるが
区市計画上の道路と建物容積
が悪いのか、建物にとりな
が窮屈になっている。建物
れ、ビル間を通る歩行者専
歩廊としてネットワークを
うになったとき、1次元構
ができるのかもしれない



表戸並木三丁目ペデストリアンデッキ

●みちをつくるためのパーツたち

横浜まちづくり研究会

「みち」は実にいろいろな要素からできている。それらを考えるうえでのチェックポイントは何だろう。実例から見る。

伊勢佐木町の緑のアーチ

●ほっとするもの

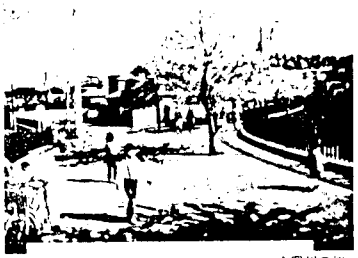
街路樹

緑は、それがあることにより街にうるおいを与える。市内の例では、プロムナード化などと一体で植樹されることが多い。整備により人々の目が街路樹にも向けられ、緑も含んだ環境をみなおすきっかけになる。

横浜市庁舎の横は舗石の敷設と同時に植樹をおこない、くすのき広場として親しまれている。イセザキモールでは、アーケードを撤去して無電柱化を行ったので、植物の成育できる空間が大きくなった。コブシやカリンが地元の人々の手で管理されている。街路の両側をビルではさまれているが、緑が視界に占める割合の大きい商店街である。木陰もできているのが好評である。馬車道は車道と歩道との境に丈の低い植樹帯を設けている。歩道の環境を自動車交通から保護するため、また路上駐車を防止するために効果を上げている。また、中区と南区に

馬車道の並木

山下公園通の並木



大岡川の桜

わたる大岡川プロムナードは、昔は川沿いにあった桜並木を復活させる意味で桜を植え、プロムナード化した。このようにして快適な環境が作られることで、今まで忘れられていた歴史・環境・人材などの資源に市民の目が向けられるようになっている。

●分離か共存か

人と車

人

人と車は共存できた方が便利ではあるが、単に両者ともに通行を許すというだけでは交通事故の危険をともなう。しかし、都市単位で両者にとって快適になるようにするには、既存の交通体系や幅員等の中では難しい。そのためショッピングモールでは車を排除する方向をとっているものが多い。

ところで横浜市内には、両者の共存を試みている事例がある。馬車道では歩道を拡幅して車道は一方通行とし、自動車の排除はしなかった。だが実際には、禁

車

止のはずの路上駐車が両路肩に並び、事実上1車線通行である。そのため通過車はスピードを落とさざるを得ず、歩行者は道路を横断しやすくなっているが、反面、見通しがきかず危険でもある。また元町商店街では、パーキングスペースを巧みに取り入れ、歩行者の危険を避けるような平面計画で道路整備を行った。得意客は自動車で来店し高額の買い物をするからというのが商店街の理由である。ところで、伊勢佐木町では馬車道の整備をまのあたりにしながらほぼ同時期に、全面モール化を行っている。人と車を共存させるか分離させるかは、それぞれの道の実情を認識した上で選択されている。

共存型の場合

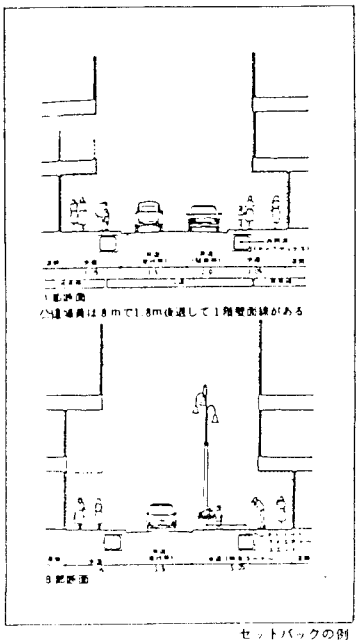
●心理的に影響大

建　物

道という空間の性格の中で建物の果たしている役割は大きく、また多様である。

道と建物の関係を示す指標の一つに、道の幅員（D）に対する建物の高さ（H）の割合を表すD／H値がある。視覚は心理的影響を与えるので、この値の違いにより道の印象はがらりと変わる。元町商店街では通りに面したファサードは低めにおさえてあるためD／H値は高くはないが、実は後ろに、もっと高層のアパートや事務所が見え隠れする建物が多い。そのため、実際の容積率よりもこぢんまりした印象を与えている。

また、建物の1・2階で道路に面している部分は、歩道と一体となって半公共空間とも言える独自な空間を形成する。

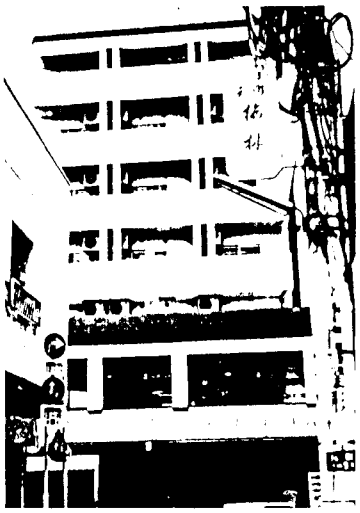


セットバックの例

1階部分をセットバックさせて歩道化する

建物の一部である柱やオーバーハング、開口部などによってこの空間が表情豊かであると、好印象を持たれる。人は、このようなヒューマンスケールな凹凸のそばの方が、居やすいと感じる。馬車道はその例であり、意識的に作られた半公共空間で人が滞留したり、行動に影響をうけたりしているのが見られる。馬車道では、これが整備の趣旨でもあった。道路は、面する建物の用途だけではなく建物の形によっても性格づけられる。

1、2階部分を広場にする



1階がセットバックし、2階はオーバーハング。背後に高い建物がある

●素材を選ぼう

舗　石

舗石

舗石は、空間の質が違うことを暗黙のうちに知らしめるのに有効である。たとえば商店街で壁面後退部分に舗石で高低差をわずかでもつけると、建物に無関心の人はそこに入りにくくなる。また、新興住宅地で最もプライベートに近い道路は舗石や色を違えて道にヒューマルを持たせている。今日、商店街でもニューアルや郊外でも緑化とセットにして舗石の敷設を行い効果を上げている。

しかし最近は、磁器質タイルは多くの場所で使われているため欠点も目につく。一つには、どこも印象が似てしまう。また、石と違って時間がたつほど味の出る素材なのではなく、完成したら、あとは汚れる一方になりやすい。それを防ぐ

●舗装を選ぼう

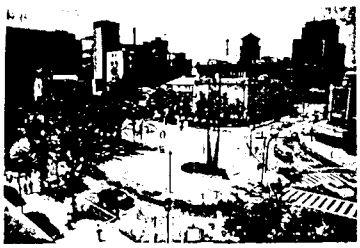
舗　石

舗石

空間の質が違うことを暗黙の
[illegible]に有効である。たと
[illegible]後退部分に舗石で[illegible]
[illegible]建物に[illegible]
[illegible]となる。また、[illegible]
[illegible]に[illegible]
[illegible]にセルフ[illegible]
[illegible]、商店街で
[illegible]も移転とセットに
[illegible]成果を上げている。
[illegible]タイルは多く[illegible]
[illegible]も必要点も目につく。
[illegible]変ぬけてしまう。ま
[illegible]たつほど味の出る
[illegible]考慮したら、あとは
[illegible]、それを防ぐた

●[illegible]

めには、維持のために[illegible]
られる。他の素材を、[illegible]
同じように見直してみる[illegible]
トは傷みを補修しや[illegible]
が穏やかで、足に対する[illegible]
歩きやすいなどの長所[illegible]
いことを第一に考える[illegible]
空間の性質を違うものにすることを優先
するべきかなどの条件によって舗石の素
材を選ぶ必要がある。また、そもそも舗
石を敷いて新たな[illegible]
当かどうかも考慮する必要がある。



舗石

●美術館とは違います

アート

街にアメニティ（環境の快適性）が求められるようになって久しいが、アートも、アメニティを高めるものとして街路に設置されるようになった。ある場所に、そこにふさわしいアートが置かれれば、アートそのものは環境により引き立てられ、その環境もアートによって質の高い空間になる。

横浜市では彫刻を都市空間の演出の一手段と位置づけ、設置に努めている。横浜市港北区の綱島にある「舞い降りた愛の神話」という彫刻は、作者と地元の

彫刻に触れる子どもたち

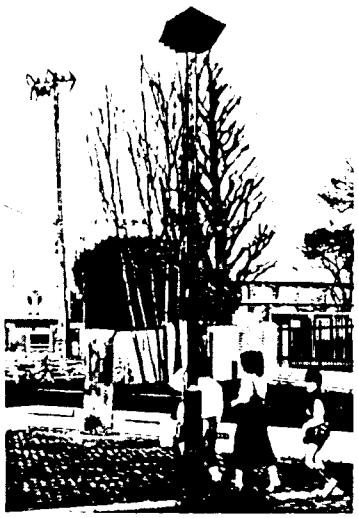
人々の熱意によって作られた。彫刻は地元の人々に親しまれ、作者は、彫刻を設置することの意義の大きさを経験したと後に語っている。ある地域と、その地域の人々にこだわりを持つ中で作られたものは、人々に愛され、都市空間の質を高める。そのような時に、アートを設置することの目的が果たされたことになる。今日ではアートは美術館で見られることが多いが、これは収集したという力を誇示したのが始まりだと言われており、作品の作られた目的や背景は伝わらない。また、これらの無い作品を生み出しもした。都市空間に求められるアートは、ある環境にふさわしいものとして作られたものであるから、美術館の作品とは性質の違うものである。

プロムナードギャラリー

古い石碑も活用して

●[illegible]

街　灯

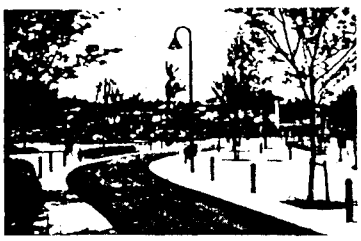


街灯

街灯を大きくみると2つの流れがある。1つは、道路照明のような、機能的で均質な照度を確保するための照明。そして、広告や存在の誇示を目的とする繁華街のネオンなどであり、これらは現代社会において機能本位に作られてきた。

もう一方では、まちづくりの動きと並行して、街灯によって、雰囲気を尊重した明るさ、すなわち量のみを求めることから質を求める流れである。

例えば、横浜は、日本におけるガス燈の発祥の地であるが、単なる照明の目的で作られたものを、その後、横浜馬車道のモール化のデザインでストリートファニチャーとして活かしている。さらに、横浜税関や神奈川県庁といった歴史的建造物のライトアップのように、光の演出



街灯

によって、独特の雰囲気を醸し出し、好評を得ているものも少なくない。

このように、人々の生活パターンの変化から、夜の街を安心して散策し、楽しむというような、都市を24時間活動の場とする動きがある中で、街灯に代表される照明といったものは重要な役割を果たしているし、今後もさまざまな役割を果たしていくであろう。

●なつかしくもある

電柱

電柱も中華街の演出に利用されている

現在の都市において、道路に立っているのは、電柱ばかりでなく、道路標識や広告塔など、数が知れない。これらは、防災面からみてあまり好ましくない状況にあり、景観上もその印象ははたいへん雑然としている。

その解決方法として、さまざまな機能を一本にまとめるという共柱化を行っている都市もある。また、協同溝、キャブ、多孔管、単独埋設といった地中化という方法も用いられている。これらには、それぞれメリット、デメリットがあり、横浜のみなとみらい21地区のようにインフラから整備していくのでない限り、敷設する道路条件などその地域の実情に合わせて使い分けなければならない。さらに、こうした地中化には巨額の費用がかかることもあり、その暫定措置として、まちづくりの中に積極的に取り入れていくという方法も行われている。たとえば、横浜の中華街における赤色の電柱のように、街の特色に合わせて、アレンジし街並みにとけ込ませるといった方策もとられている。

ただし、こういった考え方がある一方で、忘れてならないのは、街の姿が変わっていくなかで、我々の心の中でどこか「なつかしいもの」になりつつある電柱を街の記憶として残していくことも必要であるということを。

●サウンドスケープとしての

音

都市の中での音というと、雑踏、ベル、車や電車の音、話し声、店から流れてくるBGMの音を思い起こす。これらは、それに興味を持って接しない限り、単なる雑音でしかない。しかし、「まち」と音はきってもきれない要素であり、そこが人が住み活動している限り必ず発生してくるものである。われわれは音によって都市が機能していることを知るとも言える。

そこで、都市で発生する音を騒音としてのみ受け取るのでなく、よりポジティブに考え、都市を演出する装置として位置づけようと、サウンドスケープデザインが考え出された。これは、今まで音は、それが流される場所や環境などに関係なく、画一的、一方的に供給され、単に物理的な音響としてのみ存在していたことに最大の問題があるとして、受けとる側

横浜駅西口の西鶴屋橋

の多様な感性に期待して、音をひとつの媒体として、そこから各々がさまざまな空間体験をできるように、種々の「しかけ」を都市の中に組み込むものである。

身近な実例としては横浜西鶴屋橋（設計：GK設計＋サウンドスケープデザイン研究所）の架替の際考えられたスイング・ブリッジがある。これは橋の上を人が歩く時発生する振動を音に変換し、人に聞かせるものである。日常発生する音とは異質な音（澄んだ金属音、ランダムな音）で、人の注意を喚起し、歩くに従って、高音、低音、高音というように音域を変化させることにより、橋の上を歩いていることを体感できるようになっている。

また現在開催中のYES '89でも「計画された音風景をもった博覧会」にとりくみ、いくつかの試みがなされている。これは、「音のゲート」、「音のモール」、「サウンド・ブイ」などの音演出装置が「環境のための音」づくりをにない、「音ゾーニング」「音装置配置計画」によって、全体計画をし、場内放送にかわる他のメディアを充実させることで、にぎわいを引き出すような演出を行っている。

これらのことを通して、横浜博では騒音制御と音演出という相反するふたつのものを両立した「音環境のトータルデザイン」を試みているといえる。

横浜まちづくり研究会執筆者一覧

田口俊夫　都市計画局係長　㈱横浜みなとみらい21派遣
飯島悦郎　建築局宅地第一課第一係長
津原順一　都市計画局都市計画課
松下由佳　都市計画局金沢八景駅東口開発事務所
奥村　誠　旭区建築課
山本和弘　建築局宅地第一課

横浜まちづくり研究会とは

横浜市職員の自主研究会。昭和55年3月発足。自治体の仕事を通じて横浜のまちづくりを考えていこうという趣旨から、局区・職種を超えた幅広いメンバーで構成されている。原則月1回の定例会の他、合宿、イベント等も行い、最近ではソウル市訪問、台北市訪問、ヨコハマフラッシュ（手づくりの文化イベント）を行った。途中から市職員以外にも呼びかけており、現在会員数は約150名。田村明氏（法政大学教授）が顧問をしている。

横浜駅西口の西鶴屋橋

感性に期待して、音をひとつの
て、そこから各々がさまざまな
をできるように、種々の「しか
市の中に組み込むものである。
実例としては横浜西鶴屋橋（設
設計＋サウンドスケープデザイ
）の架替の際考えられたスイン
ッジがある。これは橋の上を人
発生する振動を音に変換し、人
るものである。日常発生する音
な音（潜んだ金属音、ランダム
、人の注意を喚起し、歩くに
高音、低音、高音というように
化させることにより、橋の上を
ることを体感できるようになっ

在開催中のＹＥＳ '89でも「計
音風景をもった博覧会」にとり
くつかの試みがなされている。
「音のゲート」、「音のモール」、
ド・ブイ」などの音演出装置が
にめの音」づくりをにない、「音
グ」「音装置配置計画」によっ
計画をし、場内放送にかわる他
アを充実させることで、にぎわ
出すような演出を行っている。
のことを通して、横浜博では騒
音演出という相反するふたつの
立した「音環境のトータルデザ
試みているといえる。

員の自主研究会。昭和[illegible]年3月発
の仕事を通じて横浜のまちづくり
こうという趣旨から、[illegible]職種
ないメンバーで構成されている。
の定例会の他、合宿、イベント等
ではソウル市訪問、[illegible]訪問、
ッシュ（手づくりの文化イベン
。途中から市職員[illegible]にも参加
現在会員数は約150名。田村明
教授）が顧問をしている。

編集後記

書いたものをワープロで打ち直しながら読んでいるとどうも老害が目立つという指摘が多い。設立当初からのメンバーが今もはびこっているという。否定できないが悪いことだと思わない。まちづくりを志すのに年齢性別を問わないという気持ちがあるからだ。しかし、現実の『まち研』を見ると、年齢は問わないが性別は問われているのではないかと思うくらい女性が少ない。どうもまちづくりというと建物や道路等のハードなものばかりを思い浮かべてしまうようだ。もっと我々も真摯にまちづくりの本来の意味を捉え直し、外に向かって叫んでいく必要があるように思う。（M）

やはりギリギリまで原稿はでないし、編集もできない。当初考えていたような論文集にしていくことも断念した。しかし、何かを残していかねばと今回こんな小冊子になった。１０年経って何が自分の中に構築されたかは自分ではよくわからない。しかし、他の人の文章をよんでいると、みんな人間として成長しているなあというのが正直な実感である。（S）

一区切りついたら、次の課題に向かって、また全力疾走。簡単には人生終われない。生きている限り走り続けていくぞ（某）

発行日　１９９０年3月１０日
発行所　横浜まちづくり研究会
（横浜市中区若葉町2-31 ﾒｲﾌｪｱﾊｳｽ 503）
電話 045(251)2492
編集者　仲原正治　飯島悦郎　漆原順一
表紙デザイン　田口俊夫　藤田幸三